2017 vol.16

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

特集

公共政策

ごあいさつ

こころの未来研究センターは、いまから10年前に教授４名という小さな組織でスタートしました。その後少しずつメンバーが増え、2016年４月に公共政策学、神経生理学、芸術学の３名の教授が加わって、現在の研究スタッフは、教授６名、准教授３名、助教５名。この10年の間の大きな変化は、センターの活動が、大学や研究者のコミュニティという閉じた空間を超えて、企業、行政、さらに地域に暮らす方たちともさまざまな形でつながり、協働の事業が展開するようになってきたことです。こころのサイエンスである脳科学や行動科学の研究プロジェクトにも「学際」や「連携」や「実践」といった要素が織り込まれ、本号の特集「公共政策」というテーマもその延長線上に自然につながっています。本号の論考や座談会が、これからの私たちの社会の在り方を思い描くヒントになることを願っています。

2017年１月　　京都大学こころの未来研究センター長　吉川左紀子

こころの未来
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

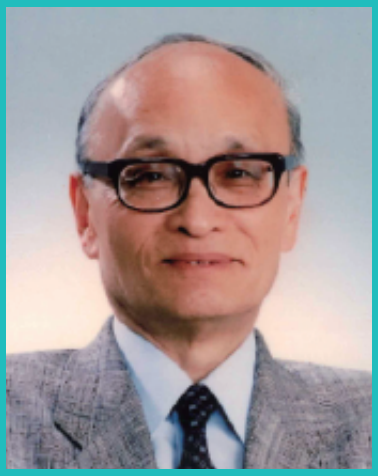
2017 vol.16

目次

	ごあいさつ	吉川左紀子
01	**巻頭言**　公共性と地球倫理	伊東俊太郎
02	**座談会**　公共政策と日本社会の未来	吉川左紀子＋佐伯啓思＋広井良典＋内田由紀子
	論考〈特集　公共政策〉	
15	地球倫理と公共政策――グローバル定常型社会の可能性	広井良典
19	メシア思想と覇権主義	服部英二
23	グローカルな倫理と公共性	山脇直司
27	脳科学と公共政策――橋渡しのロールモデル	山川義徳
32	人生は平等じゃないが、こころは出会い、羽ばたく――釜ヶ崎芸術大学・ココルームの日々と、友達になること	上田假奈代
	研究プロジェクト	
36	**研究プロジェクト一覧（平成 26 年度）**	
37	身体疾患・症状に関する心理療法の研究	河合俊雄
38	遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明	船橋新太郎
39	対人相互作用に関わる認知・感情機能：人はどのような顔に注目するのか――顔知覚の潜在動機の予備的検討	吉川左紀子＋上田祥行
40	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
41	連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
42	環境要因が潜在的認知に及ぼす影響	上田祥行
43	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子＋竹村幸祐
44	地域の幸福プロジェクト（上廣こころ学部門　幸福感の総合研究）	内田由紀子＋福島慎太郎
45	組織文化とこころのあり方：日本における企業調査	内田由紀子
46	こころ観の研究	鎌田東二
47	こころとモノをつなぐワザの研究――伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に	鎌田東二
48	生態智の拠点としての聖地文化――こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
49	東日本大震災関連プロジェクト――こころの再生に向けて	鎌田東二
50	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
51	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
52	終末期に対する早期支援	冲永隆子＋カール・ベッカー
53	出生をめぐる医療と倫理	赤塚京子＋カール・ベッカー
54	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	磯村朋子＋小川詩乃＋吉川左紀子
55	科学と思想・哲学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
56	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
57	国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈
58	孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究――京町家「くらしの学び庵」プロジェクト	清家　理
59	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家　理
60	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
61	こころ学創生――教育プロジェクト	吉川左紀子
62	身体と象徴：かたちとちから――力のでる形	木村はるみ
63	高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山　薫
64	被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究Ⅲ	大西宏志
65	心理療法場面に見られる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行
66	子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀
67	自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは――市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて	伊勢武史
68	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	長谷川千紘
69	**2015 年度仕事一覧**	
79	**センターの主な動向（2015 年 10 月～ 2016 年 3 月）**	
	編集後記	

巻頭言

公共性と地球倫理



伊東俊太郎（科学史家・文明史家）

1930年東京生まれ。東京大学文学部哲学科卒業、同大学院修士課程修了、ウィスコンシン大学PhD.取得。比較文明論・科学史研究の泰斗。東大教養学部教授、国際日本文化研究センター教授、麗澤大学教授、同比較文明文化研究センター初代所長等を歴任。日本科学史学会会長を8年間務め、現在、東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授、麗澤大学名誉教授、日本比較文明学会名誉会長、国際比較文明学会終身名誉会長、地球システム・倫理学会名誉会長。2009年、瑞宝中綬章を受章。著書に『伊東俊太郎著作集』（全12巻）ほか多数。

Shuntaro ITO

今日「公共性」なるものが盛んに論ぜられ、21世紀の中心問題になってきている。それは従来の個人主義も国家主義もともに破綻し、新しい公共の形成が強く求められているからである。

国際的にも、ジョン・ロールズ、マイケル・サンデル、ユルゲン・ハーバーマス、ハンナ・アレントらによって「公共」のあり方が活発に議論され、わが国でも佐々木毅・金泰昌編「公共哲学」叢書をはじめ、山脇直司、広井良典、小林正弥ら諸氏によってユニークな論が展開されている。筆者自身も「公共とは何か」の一文を草し、これまでの公共概念の批判的考察を行った（伊東俊太郎『変容の時代――科学・自然・倫理・公共』麗澤大学出版会、2013）。

そこでは筆者は、公共性の層的な構造を指摘し、個人の確立とともに、それと結びつく家族公共体、地方公共体、企業公共体、国家公共体、地球公共体の層的連関を見てとった。その際、企業や国家は、これまでのような単なる利潤追求集団や権力行使機構ではなく、1つの公共体と捉え直すこと、そしてそれの地球公共体との結びつきに注目することが重要である。そこでおのずから公共体と地球倫理との関係が問題となる。筆者はそこで「公共体」とは「個人が他者のことを考慮し、他者と一緒になって良き共同（協働）体を実現しようとする社会のあり方であり、その中で自己の生きがいを見出す組織である」と定義したのであるが、この「他者のことを考慮し、他者と一緒になって」というときの他者のなかには、通常の「他の人々」というだけではなく、「自然」も重要な他者のなかに入っている。これまでの「公共論」（ロールズ、サンデルetc.）が、この「自然」の問題をとり上げていないのは、大変不十分である。

今日の「公共論」の第一の新たな問題は、田中正造の言っていた「自然公共の大益」をもとり入れたものでなくてはならず、筆者の言う「環境革命」も、こうした環境公共主義を含むものなのである。このことにより「公共」は、持続可能性が求められる「地球倫理」と結びつく。

「地球倫理」と結びつく第二の新たな問題は、この他者が単にわれわれ同邦のあいだの他者だけではなく、他国の人々、とくに難民、亡命などにより滞在を余儀なくされている異邦の人々を含むということである。このことは21世紀の公共議論にとって極めて重要なものとなるであろう。「公共」は国境を越え、人種を超え、しばしば文化すらも超えてゆく。このことは、「ヘイト・スピーチ」、「難民受け入れの難渋」などわが国の公共問題にも重大な意味をもつ。「公共」を論ずるものに、これらのことは断じて無関心ではありえない。「自然」とともに、このような「異邦」の人々とともに生きる国際公共主義こそ、われわれにとっての大きな課題である。

座談会

公共政策と日本社会の未来

出席者：吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター長）
佐伯啓思（同特任教授）
広井良典（同教授）
内田由紀子（同准教授）

学問のパラダイムを超えて

吉川　日本の社会はこれからどうすればもっといい形になっていくのか、といった大きな問題意識があります。希望を持って生きていくことが、何となく難しくなってきているような感覚がある。それを少しでもいい形に変えていくための研究者の役割、とくに社会科学の研究者の役割といったことを考えてみたいと思います。

私は認知心理学が専門ですが、以前は自分の研究を社会につなごうとかつなぎたいという意識はそれほどありませんでした。実験をやって、データを分析して、論文を書いて、学会で発表して、と自分のやることの範囲が専門分野の中で完結していた。心理学でも臨床心理学者の多くはカウンセラーなので、社会と直接、接していますけれど、実験系の心理学者は自分の仕事は基礎的な研究をこつこつ積み重ねること、という意識でいたような気がします。

吉川左紀子センター長

内田　いまはもう心理学という分野のくくりで考えなくてもいい時代になりました。他の分野の研究者とお話ししていて、共通の問題意識があると思うことが少なくありません。

広井　私は、もともと科学史、科学哲学が専攻領域でした。学問というのは、パラダイムとか、科学者コミュニティができ上がると、その内部で完結してしまうところがあります。論文を書くのも、研究者コミュニティに向かって書いている。特に日本の場合、それがムラ社会みたいに閉じたものになっているので、社会との乖離が進んでいく。

私は、必ずしも社会に直結しなくても、純粋な真理を追究することは学問の本来のあり方だと思うので、大事にすべきだと思います。ただ、昔、トーマス・クーンが『科学革命の構造』の中で「パズル解きとしての科学」という言い方をしました。その学会で設定されたパズルを解くことに主眼がいってしまって、本来の真理の探究からも、社会的問題の解決からも遠ざかってしまう。そういう危険性は常にあると思います。

だから、ある意味では、公共政策などを意識することで、そういう閉鎖性を打破する学問を拓いていくひとつの契機になりうると思います。

吉川　公共政策は、もともと心理学より開かれた学問分野だったからでしょうか。

広井　公共政策という学問分野自体、まだパラダイムとしても未確立です。一応、公共政策学会がありますし、2000年代に入って公共政策大学院が、国の意向もあってたくさんつくられましたけど、必ずしも学問分野として確立しているわけではない。それが逆に長所かもしれないんですけれど。

結局、既存の経済学とか社会学、心理学といった分野に依拠しながらやっていくという感じだと思います。だから、公共政策という学問分野を意識するというより、いまやっている学問的な研究がどういう形で政策にフィードバックしていけるか、そういう少し広い捉え方で見たらいいのではないかと思います。

内田　応用科学的側面が強いということですか。

広井　そうですね。

佐伯　アメリカも日本も同じですが、政治学、経済学、社会学、心理学とか、完全に分野分けがされ、パラダイムができてしまって、制度化されている。それではうまくいかないということが、1990年代ぐらいからしきりに言われていました。つまり、いま世の中で問題にされていることは、最初から分野分けされているわけではない。たとえば、いま日本人は幸福なのかを考える場合、幸福とはいったい何なのかということが前提としてあるけれど、それをどの分野が扱うかということがはっきりしない。それぞれの分野なりのアプローチも可能だし、しかし、どの専門分野でも落ち着かない。

そういう問題がずいぶん増えました。グローバリズムだってそうです。経済史の概念の中には、国際貿易はあるけれどグローバリズムはない。政治学では国際関係論に行ってしまう。だから、新しい現象としてのグローバリズムをちゃんと扱うことは既成の分野だと無理なんです。

それで、こころの未来研究センターのようなものがつくられて、まず社会的な問題を設定し、それに対して総合的なアプローチをやろうじゃないかということになってきた。公共政策もそうでしょうね。

広井　大きな枠組みとしては、佐伯先生が言われたとおりだと思います。科学史的にいうと、17世紀にヨーロッパで科学革命が起こって近代科学ができた。19世紀には、工業化社会が展開する中で、科学の制度化というか、いまに続く学問の基本である、物理学、化学、経済学などができました。

次のステップが20世紀後半、今度は「ケインズ政策」が出てきて、政府が科学に研究投資をするようになった。経済成長とともに、科学がさらに制度化される形で縦割り的に発展していった。しかし、70年代、80年代から、そういう路線だと、格差が生まれたり、環境問題とかいろいろな問題が出てきて、いま学問自体が社会の変化と並行して再編を余儀なくされるという状況があります。

さっきの幸福にしても、内田先生が専門家ですが、脳のあり方とか、生物学的な人間の存在とか、文理融合的なテーマだと思います。いまいろいろな分野で、そういう文理融合的な捉え方をしないといけなくなっている。コミュニティのようなテーマもそうです。

アメリカナイズされた学問

吉川　私は1970年代、学生のころに森有正という当時パリ在住の哲学者の著作にはまってよく読んでいました。同級生のひとりは、そのころ京大教養部の教授だった生田耕作というフランス文学者の大ファンで、休講が多くてたまに授業があると（笑）熱心にでていたようですし、思想家の吉本隆明の信奉者もいました。その時代の思想家とか哲学者、文学者のことが学生の日常会話の中にもよく登場していたような気がするんです。

京大の人文科学研究所（人文研）ができたのが1949年です。1950〜60年代、たとえば桑原武夫のような、大学人の思想哲学に対する社会全体のリスペクトはいまよりもずっとあったような気がします。分野は違いますけど梅棹忠夫の著作も影響力が大きかった。そのころと比べて、いまは人文社会科学系の学者の発言が社会の注目を集めることが少なくなっているのはどうしてなんでしょうね。

佐伯　確かに1950年代から60年代は人文研がすごく力を持ちましたね。勢いもあって社会に影響を与えた。たとえば桑原さんのフランス革命研究とか、ルソー研究そのものが社会的な意味を帯びたんです。それは1つは、日本が戦後の時代に入って、西洋の進歩主義の社会科学がどっと入ってきた。桑原さんのルソー解釈は非常に戦後進歩主義に近い。あれは独特の解釈をしているんです。だけど、ほとんどの人が、その思想を意識しないでも、基本的にバックにしていたから、それが重要な意味を持ったんです。

それに対する反発もあって、たとえば梅棹さんなん

佐伯啓思特任教授

かは、西洋中心の進歩主義的な民主化は嫌だ、マルクス主義も嫌だ、それとは違うものをやりたいという意識が非常に強かった。でも、梅棹さんの『文明の生態史観』は、学術論文としては何の評価もされません。

内田　そうなんですか。

佐伯　一種の評論ですからね。だけど、そういう時代状況の中で、西洋中心の歴史観に対して全然違う見方があるということをぼんと出した。それが社会的に大きな影響を与えたんです。戦後日本の社会がどういうふうに理解されるのかというと、中央にマルクス主義がある、進歩主義がある、西洋中心主義がある。京大の場合には、内藤湖南以来のアジア重視の考え方がある。

だから、そのころの日本全体の社会科学や人文科学全体は、ある思想的な土台があって、その土台を壊そうとするものもいるし、その土台の中で学問をやろうとする人もいる。そういう状況だったんです。だけど、その状況は、80年、90年代に潰れてしまいました。

内田　それは、アメリカからプラグマティズムみたいなのが入ってきたからですか。

広井　善くも悪くもアメリカナイズされた学問が圧倒的な力を持つようになって、パラダイムとしては、非常に一元的になった。経済学も、それ以前はマルクス経済学対近代経済学という対立があったのが、新古典派的なものに統一されていった。だから、以前のほうがオルタナティヴな学問ヴィジョンがあったのが、非常に一元化されていったわけです。

佐伯　そうですね。それはこういうことがあるんです。われわれが大学、大学院のころ、日本ではマルクス主義の影響がものすごく強かった。それに対して、アメリカから、いわゆる新古典派的近代経済学が入ってきて、これが大きな対抗勢力になった。なぜかというと、マルクスは1つの社会主義運動のイデオロギーを背後に持っている。ところが、いわゆる新古典派的経済学の体系は非常に科学的なものであって、数学的に表現されている。だから、価値判断とは別に、これは科学理論として理解できるから、こちらのほうが信頼できるという話になった。

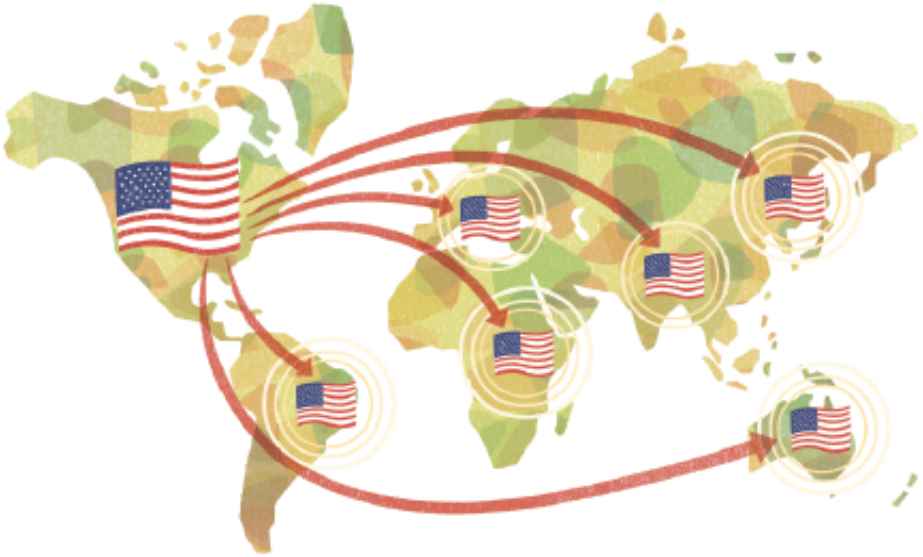
でも、僕らはそういうことに反発していたんです。マルクス主義がイデオロギーであることははっきりしているけれども、市場経済理論だってイデオロギーなんです。ある種の前提から出発して、個人主義とか、合理主義とか、あらゆるものは計量できるとか、いくつかの基本前提がある。そこには非常にアメリカ的価値観が反映されているのです。

広井　それは根本的な、認識論的な問題に行き着く話で、科学とか客観性とか、データの背後には何らかの価値とか思想といったものが関与しているのではないかという、かなり根本的な問題です。

これが、さっき吉川先生が言われた話とつながるんですけれども、以前はそういう価値や思想が背景にあると考えられていたので、わりと人文系、思想系の人が意味を持ったが、いまはもうそういうのはない。透明な、一元的な、客観的なデータの世界があるだけだということになると、もうデータを出すのが学問だということになって、思想家や哲学者の出る幕はほとんどなくなっているという状況です。

多少希望を込めて言うと、無色透明、データ一元論的な時代だったのが、90年代ぐらいから、内田先生の専門の幸福のテーマとか——これは価値の問題と不可分ですし、ノーベル経済学賞などでも、純然たる新古典派というよりは、アマルティア・センみたいな、規範の問題、価値の問題、コミュニティの問題であり、ダニエル・カーネマンのような、心理学者が経済学賞を受賞したりして、価値とか、ある意味で思想的な部分をもう一度見直すような動きが出てきているというふうにも考えられなくはないです。

佐伯　それはもっともだと思うんですが、それもちょっと危険な感じもするんです。というのは、基本的に、ノーベル賞も含めてオーソドックスなところでは、やっぱりアメリカ・リベラル派の考え方が圧倒的に強いんですね。だから、あれも1つのパラダイムになってしまっていて、市場経済学、市場理論で非常に科学的なものをつくったようだけれども、その背後に、公正な競争は善だとか、人間にとって自由というのは重要だ、あるいは効率を高めることはいいことだといった、ある程度の規範があると思います。その規範を相対化



するような別の思想を持ってきたら、簡単には受け入れられない。そこは、アメリカ型のイデオロギー、グローバルな世界観がどんどん覆ってきているという印象が僕には強いですね。

広井　おっしゃるとおり、いまの議論で浮かび上がってきたのは、学問や科学といえども、その時代の社会システムとか価値観の枠組みの影響をもろに受けるものだということですね。

空気が支配する日本社会

広井　ただ、佐伯先生も『さらば、資本主義』を書かれて、そういういまの学問のベースにある資本主義自体がかなり変質しつつあるというか、リーマンショックも起こって変わらざるを得ない状況になる中で、これまでのリベラリズムといわれた個人の自由をすべての出発点にするような社会像、人間像がいまいろいろな分野で問い直されていて、もっと人間の利他性とか協調行動などが見直されているとお考えではないでしょうか。内田先生の専門の集合的幸福なんかもそうですが、コミュニタリアニズム（共同体主義）というか、個人が利潤を追求するだけではない見方が、いまいろいろな分野で出てきているように思います。

佐伯　そうですね。

内田　ただ、まだメインストリームからは遠いなという感じはします。どうしても、個人主体モデルなんですね。まず個人の意思決定なり、行動なり、モティベーションなどが説明の基本単位となっています。その上で、私たちは集合的に規範をつくったり、制度をつくったりするんだけれども、個人がいかにこうした規範や集合からフリーになるかというのは、現代社会の1つの大きなメタ的なテーマになっている。集団行動からどうやったら私たちは逃れることができるだろうかといった研究は、社会心理学の中でもよく見られます。

たとえば、つい人間は同調してしまう。あるいは、つい私たちは人のことをステレオタイプ的な見方をしてしまう。それに気づいて、そこからフリーになるにはどうしたらいいんだろうというようなテーマがある。それはそれで非常に重要なテーマだと思うんです。

反対に、コミュニティをどのようにしてつくって、いったいそこから何を得ているんだろうといった視点は研究にはなりにくい。文化とかコミュニティと言った時点で、それはイデオロギーだから、科学的な研究対象にはならないといった反発が来たりすることがあります。

佐伯　山本七平という人が、日本社会の大きな特徴として、空気の支配ということを言いました。つまり、ある種の得体の知れない雰囲気ができ上がって、その雰囲気にみんなが同調していって、そこで1つの決定がなされる。こういうことは、内田さんのような考え方から心理学的に分析できるんですか。つまり、個人の心理なんだけれども、実は純粋に個人の心理の問題ではないですよね。社会的なものと個人的なものは、どういう形で融合してくるのでしょうか。

内田　文化心理学者としては、文化っていったい何なのかというと、どこかに目に見える実体的存在があって取り出せるものじゃないわけですね。つまり、まさにその空気みたいなものが文化として働くわけです。

最近、学校で調査をしていて面白かったのが、先生がどういう考えを持っているかということが生徒に伝播するんですけれども、それが直接的に伝播するわけではないようなのです。たとえば吉川先生が「みんなで和気藹々とやるクラスにしましょう」と言ったとします。そうしたら、生徒がそれを内在化して、「よし、和気藹々なクラスにしましょう」と思うのではなくて、まず先に空気として伝わる。つまり、私は「先生はそう思っているんだな。そして、私がどう思っているかはさて置き、ほかのクラスメイトはきっと先生の言うとおりにしようと思うだろうな」と考えるわけです。その段階がまずあって、その後、自分に内在化していく。

つまり、集団と個人は完全に1対1対応で動くものではなくて、まず場の空気みたいなものが発生する。そ

れは実は単なる共同幻想かもしれない。その後、「自分もやらなきゃいけないんだ」とみんながその共同幻想に従い始めるというメカニズムが存在している。

佐伯　たとえば、アメリカではそういうふうにならないですか。日本では何かが下りてきて、そう言う。そうなってくると、何か文化的なものになってしまうのか、個人の脳のメカニズムの中に2つの可能性があって、どちらが出てくるかは、その状況によって違うから、場合によると変わり得るかもしれないということなのか。

内田　おそらく共同幻想の作られ方のプロセスそのものはあまり文化による違いがないのではないかと思います。実際アメリカでも「みんなが個人主義的で、自由である」という共同幻想が成り立っているということもできます。ただ、日本の場合は社会の流動性が低く、つきあう相手がアメリカよりは固定化されやすいので、相手の状況への敏感さが自ずと増しやすいかと思います。

吉川　基本的に日本は同質性が高いですね。個人的な感覚なんで他の人がどうなのかはわかりませんが、海外に行って町を歩いているときには、周りにいる人たちの様子がそれほど気にならない。そこの人の喜怒哀楽みたいなものが直に伝わってくる感じはしないんです。でも日本では、たとえば電車の中で周りにいる人がしんどそうだったり苛立ったりしていたりすると、すごく気になって落ち着かなくなってしまう。共鳴度が高いんです。そんなときに、ああ日本は同質性が高い社会だな、と感じます。

広井　日本人が非常に同調性が強いとか、佐伯先生が言われた、なぜそういう違いが生まれるのかの背景として、私は究極的には風土が大きいと思っています。私は比喩的な言い方で「稲作の遺伝子」と言っているんですけれども、内田先生の領域でもそういう研究がありますか。稲作と畑作で違うとか。

内田　はい、米作と麦作の違いを調べた研究があります。

広井　稲作というのは、基本的に、わりと恵まれた環境で、比較的小さな集団が生産に当たって、同調性を強く求められるような行動をするので、その中で社会生活を営むし、かつ集団の外に対してはやや排他的になる。そういう稲作という生産構造に適応的な形で進化した人間の行動様式、パターン、認知のあり方が形成された。だから、最初から日本人の文化というのがあるわけではなくて、その地域の環境、風土、それから生産構造に適応的な形で、認知や行動パターンが形成されるのが基本ではないかと思います。

それは、地球倫理の話ともつながります。地球倫理は、決してマクドナルド的に世界を均質化させていくような考え方ではありません。それぞれの地域ごとに、その風土から来る行動様式や文化が形成される。そういう多様性を認めていくことが地球倫理に結びつくのではないかと思います。

広井良典教授

東京は巨大なムラ

吉川　日本の社会は同質性が高くて、あまり「自分」という個を意識しなくてもうまくゆく社会を作ってきた。それが、戦後になって欧米の文化が入ってきたときに、「日本とは違う」と「日本の伝統文化はだめだ」という反応がセットになったように思います。私は大学紛争のすぐ後の世代なんですけど、学生のころ、何か自己主張するときに「私たち」とか「私たち日本人」といった表現をすると、「私たちじゃなくて、私でしょ」といって批判される風潮があった。みんなと同調する意識、集団のなかの一部としての自分という意識を何か卑屈に感じる。個を主張する西洋の文化が上でそれを取り入れないといけないという感覚はどうして生まれたんでしょう。日本は「稲作の遺伝子」をもって、それを善しとしてきたはずなんですけど。

広井　ここが微妙なところで、これもずっとある議論ですけれど、ある種の共同体の持つムラ社会的な窮屈さとか、「抑圧」と言ったら言い過ぎかもしれませんが、そういうのがやっぱりあって、同一性を過度に求められる社会はそれはそれで問題で、バランスの問題だと思うんです。

吉川　日本の社会は行き過ぎだったんですかね。

内田　排他的だったのは事実だと思うんです。その社会

の中で、血縁と地縁と、すべてが結びついていた。そこでたとえば人間関係を壊して村八分になると、もうすべてを失うわけです。そういうときに、東京に行っても仕事があるんだということになれば、そのしがらみを捨てて、啖呵を切ってばーっと出ていくこともできるわけです。しかも、そのほうがお金も稼げる、みたいな話になってくる。そういう情報って、あっという間に広まりますよね。そうなると、あえていろいろなことを我慢しながら調整していきましょうということに、たぶんインセンティヴが働かなくなっていたのではないかと思うんです。

吉川　それで、大家族で暮らす幸福感より、都会にでて自分で稼いで生活を作る、という生き方が格好よくて、みんながそれに倣って時代の風潮になったんでしょうね。わたしは子どものころ、60年代ですけど、北海道の田舎に住んでいました。アメリカ文化にあこがれる気持ちや都会に行きたいという気持ちがとても強かった。あの思いはどこからきたんだろうといまも考えます。

佐伯　日本は明治以降、近代化の中で西洋的な価値や文化をどんどん受け入れて、日本的な封建的なものはだめだみたいなことでずっとやってきた。戦後、さらにアメリカの文化がどっと入ってきて、第2段階をやりだした。それにもかかわらず、日本は全然個人主義にならないし、民主主義が定着しない。西洋原理的なものは、入ってきても非常に日本化されて入ってくる。いまの東京を見ても、あれは巨大なムラですね（笑）。

広井　まさにそのとおり、ムラです。

佐伯　ムラ社会で動いている都会なんですよね。

内田　日本の会社もある意味ムラなんです。

佐伯　日本の民主政治だって、西洋型は善かれ悪しかれ、相当に激しい討論をしたり、さまざまな手段を使って主張を伝えたりしますが、日本はそこまで行かないで、何となく調整しながら、ちょっとこちらが出てきたら頭をポンと叩いて、「おまえ、引っ込め」みたいなことをやる。非常に日本的共同体的な政治になっているじゃないですか。

戦後の日本にはその両方があって、頭の中では、共同体的な、家社会的な、封建的なものは良くないと思っているから、そういうものが出てくると文句は言うんだけれども、実際にやっているのは共同体的なこと（笑）。非常に妙な二重構造になってしまっているんです。

広井　実際には、戦後の日本というのは農村から都市への人口の大移動だったわけです。都市の中にムラを持ち込んだものが、会社であり家族であった。それぞれは閉じた共同体で、全体として経済成長のパイが拡大していたときは、それが競争し合って、それなりに機能していた面があった。しかし、もうパイも大きくならなくなって、そういう会社、家族も不安定になった。古い共同体は崩れてしまっているが、まだ新しいコミュニティができていない。個人が孤立した状況になっているのではないかと思います。

内田　いまのところ仮説として思っているのは、ムラにしても会社にしても、日本的な共同体はソーシャル・ネットワークというか、人間のつながりをつくるのはうまい。つまり関係の規範はけっこう提供している。一方で、個を育てるための規範はうまく提供できていない。個人個人で見ると、うまくやっている人は、独立した個人としての自主性もあるし、人ともうまくつながる。つまり両方を両立できるんです。ところが、会社や地域などの組織レベルで見ると、どうやら両立が難しい。つまり、個人主義的な会社をやろうとすると、そちらの規範ばかり提供してしまい、あげくに関係性の規範を否定したりしてしまって、途端に会社の共同体が崩壊していく。逆に、家族主義的な会社にすると、個人を育てるようなインセンティヴをうまく与えるのが難しいみたいです。

組織の中で両方の価値を提供するのは、いまの日本のコミュニティのつくり方では難しいのかもしれません。だから、個人と集団という二つの規範を両立させるためには、個人で学ばないといけなくなってしまっている。つながりは共同体で形成するけれども、革新的な考えとか自立性みたいなものは、共同体とは別のところで学ばないといけないみたいな、ねじれた構造になっているんです。

外資系の会社などを見ると、うまくその両方の価値

を提供しているようです。

「都市型コミュニティ」と「農村型コミュニティ」

佐伯　仮説的にものすごく大きな見取り図で言えば、アメリカを含めて西洋社会はまず個人主義がある。最初に神との関係において個人というものが定義されて、その個人が約束をして1つの社会をつくった。アメリカの場合にはコミュニティにしても神を前提にして1つの社会をつくりますという契約をするわけです。この契約に参加するものはアメリカに来てくれというわけだから、どんどん拡大していく。

内田　神を媒介にしてみんながつながり合っている。教会のコミュニティもそれに近いのでしょうね。

佐伯　アメリカの場合は、そこがかなりはっきりしている。一方に個人主義があって、同時に、社会をつくるために、その社会に対してある種の責任を負うという共同意識もある。一方、ヨーロッパの場合、そこまではっきりした契約でもって社会ができていないから、個人と社会をつなぐ別の原理があるんだろうと思うんです。それはどちらかといえばギリシャ・ローマ的な、いわゆる共和国的な市民意識だという感じがしています。個人主義であり、同時に市民として1つの共同体をつくっているという意識が強いでしょう。

広井　私は「農村型コミュニティ」に対する「都市型コミュニティ」という言い方をしますが、市民、シティズンは都市の住民ということで、ヨーロッパの場合、城壁に囲まれたコミュニティということになります。私の理解では、日本社会はどうしても「農村型コミュニティ」、まさに稲作に傾きがちで、そうではない「都市型コミュニティ」というのは、ある程度、個が立ちながら、ばらばらになるんじゃなくて、コミュニティとしてつながる。

「都市型コミュニティ」と「農村型コミュニティ」は公共ともつながってきます。都市というのはまさに公共性とかパブリックで、「農村型コミュニティ」、ムラ社会は共同性、コモンで、自分の同心円を広げてべたっとくっつくような感じです。

内田さんがさっき言われた、個人が独立しながらコミュニティとしてつながるようなことがどうすれば実現できるかが重要ですね。

佐伯　そうですね。ただ、西洋の場合には公共という観念はある程度成り立ちやすいんです。アメリカも、神との関係で個人があって、契約によってアメリカ社会をつくった。社会の人間としては、その社会における契約を守らないとだめだし、世俗社会に対して一定の義務も果たさないといけない。そこに、「公共性」という観念ができやすい。

ヨーロッパは、いまの「都市型コミュニティ」にしても、一方で、個人の財産が大事だということはあるけれど、同時に、個人の財産を守るためには都市全体を守っていかなければならないという考えがある。それは「公共観念」になるんです。

しかし、そういう意味での「私と公共」みたいなものをきちっと区別しながら両立させるという観念は、日本ではなかなかできない。できないのが悪いわけではないんだけれども、歴史的に見て難しいですね。

広井　かなり希望を込めて、私は関係性の進化ということを考えていて、そういう違いは、最初から固定的にあるのではなくて、さっきの稲作に適応的な行動様式が進化したのだと思うんです。

戦後、急激に日本は都市化したけれども、農村の論理を都市の中に持ち込んだので、そこで乖離が生じている。だけど、孤独死とか、無縁社会と言われたりして、いまのままじゃまずいと感じている人は、かなり増えている。都市社会なのにこれだけ個人が閉鎖的ではまずいということを感じる人が多くなっていて、希望を込めて言うと、だんだん公共性みたいなことが大事だというところに人々の関心も向かい、いろいろなNPOや活動も生まれていると思います。

主権者教育の前にすべきこと

内田　一方で、日本が「公共」みたいなものをつくったときに、その「公共」が今度は監視役のようになっていく。「公共」のルールに違反したのはどいつだ、みたいな議論になりがちです。最近もネットで炎上騒ぎなどがあります。

広井　村八分。

内田　だれかをバッシングするのも、ものすごく公的な、倫理的な意識みたいなのでやっている。最近は、マタニティ・マークをつけた人がいじめられるという話があります。10年ぐらい前には、マタニティ・ハラスメントは会社でいじめられるレベルでしたけれど、マタニティ・マークをつけて電車に乗っていたら、「妊婦様だと思って偉そうにするな」と言う人がいるらしいんです。

吉川　ええっ、本当？

内田　「あなた、好きで子どもを産んでいるんでしょう？　あなた個人のことでしょう」というふうに。子どもたちは次世代を担う人材だという理解がなく、非常に個人主義的な考え方を持ちながら、「だけど、妊婦様のあなたもちゃんとこの公共空間のルールを守りなさい」という「公共の」ルールを成立させ、押しつけるわけです。

内田由紀子准教授

広井　ヨーロッパを美化するわけではないですが、ヨーロッパでは、電車に乗っていて、ベビーカーの人が乗ってきたら、みんなにこっと笑うくらいですね。

内田　そうですね。あやしたりしますよね。

広井　そう。日本はお互い無視し合うみたいな。前に吉川先生と話していて、こういうことは日常的なレベルの話のように思いました。見知らぬ者同士、ちょっと声をかけ合うとか、道を譲り合う、あいさつする、そういう日常の行動様式のレベルで、人と人の関係性とか、基本的な社会と自分の距離感とか、あり方の感覚というのができてくるような感じがします。そういうところから変えていこうというので、「日本あいさつ協会」というのをつくろうと思って（笑）、まだ実現していないんですけど。

吉川　私はうちのマンションで実践しています（笑）。

内田　自分から話すと、だんだんしゃべってくるようになりますね。

佐伯　朝日新聞と一緒にやっている塾でもずっと言っているんだけど、いま主権者教育とか言っているでしょう？　あれは根本的に間違っているので、そんなこと絶対にやるなという話をしています。要するに、主権者教育というのは、すべてのものを政治化するという話なんです。世の中に対して何か文句を言いたいことがあれば、全部政治的に発言してください。政治家にそれをぶつけてください、という話です。そうじゃない。本当は、いまおっしゃったように、あいさつひとつで片がつくような話を、権利の話とか、法とか、政治の話に持っていっちゃだめなんです。その手前のところで、もっとうまく調整して、ある種の慣例みたいなものをこしらえていく。そういうことを全部政治の話にしなさいという風潮がいまは強いんです。

広井　ところで、これも内田先生がご専門ですが、よく言われる話で、日本は世界価値観調査で幸福度43位とか、国連のワールド・ハピネス・レポートでは53位とか、幸福度が低いわけです。文化の違いもあるので、単純に比較はできないし、アメリカ人みたいに、何でも“Are you happy?”とか言うのがいいとは私も思わないですが（笑）。

不思議なのが、日本は長寿という意味では基本的に世界1位なんです。「幸福」と「健康」ってわりと相関していて、経済発展の初期段階では、GDPが上がると「幸福」も「寿命」も、だいたい比例的に上がるけれども、ある段階を過ぎると、ランダムになってきます。GDPが増えれば「幸福」になるとも限らないし「健康」になるとも限らない。アメリカなんか、GDPは1位ですけれども、平均寿命だとWHOで40位とか、かなり低い。だから、日本と似ているんですが、日本は長寿なのに幸福度が低いのは、人と人の関係性みたいな部分が大きいのでしょうか。

内田　ある研究で、ちょっとネガティヴな感情を持っているぐらいのほうが、日本人の健康にはいいみたいだというデータがあります。たとえば、神経症だったりすることが、逆にかえってうまくいっているというデータなんです。北山忍先生のグループの最近のデータです。ちょっと神経症的ですと、普通は健康状態に悪いと言われている、鬱になったり。アメリカではそうなんですが、日本だと、神経症っぽい人のほうが、周りにあわせることさえできれば、意外にうまく適応していることがあるそうです。もしかすると、社会的なリスク、たとえば、村八分にされるリスクの中で、うまく対処する能力として神経症的な傾向が働いている可能性があります。

佐伯　それと、前に内田さんが言っていたけれども、アンケートをして、「あなたは、10段階でどれぐらいハッピーですか」と尋ねたときに、日本人はだれも9とか10とは言わない。まあ7ぐらいにしておこうという感じ。そういう意味では、そんなに満足していないわけではないんだけれども、必ずしもハッピーだと言いたくない。

内田　理想の幸福度が100％の幸福ではないのも、日本らしい特徴です。

高齢者と団塊の世代

吉川　私は、アメリカの文化の影響で、日本人にとってあまり良くなかったのかなと思うのは、アメリカって、若くて、元気で、力強い、ポジティヴな思考とい

うのを高く評価する。それが、日本にそのまま入ってきて、いろいろな産業に通じる価値観がみな、「若くて元気」に偏っている。

広井　アンチエイジング（笑）。

吉川　でも、日本では昔から、成長するにつれて知恵と経験を身につけた大人になって、最後はみんなから慕われるおじいさん、おばあさんになって、幸せに暮らす、といったライフステージを想定した価値観があったような気がするんです。昔話に出てくるおじいさん、おばあさんって、全然不幸そうじゃないですね。『桃太郎』のおじいさん、おばあさんとか、『花咲かじいさん』なんか、まさにそうだけど。

内田　たまに意地悪じいさんも出てきますけど（笑）。

吉川　実は私は意地悪じいさんが大好きなんですよ（笑）。日本人は、昔のほうが豊かな人間像をもっていたんじゃないかな。昔話の中では年をとってだんだん元気がなくなるとか弱くなるようなイメージじゃなくて、意地悪なおじいさんもいれば、いいおじいさんもいる。どっちも元気でいろんな事件が起こるわけです。もちろん若いときは若いときなりに、鬼退治に行ったり竜宮城に行ったり、成功も失敗もいろんな冒険譚があるのが日本の昔話です。それぞれのライフステージのいろんな面が含まれている。実際の暮らしはもちろんいまよりもずっと大変だったに違いないんですけどね。それにしても、どうして最近は町に不機嫌そうなおじいさんが多いのかなあって思いますね（笑）。

佐伯　昔は、社会的な教育の中でおじいさんの役割があって、おじいさんとはこういうものだというのがあった。いまはみんな労働力で、生産性、効率性で測るから。

吉川　機嫌のいいおじいさんが増える社会をつくる、というのはいい目標になりそうですね（笑）。

佐伯　できるだけ急いでやってください（笑）。

広井　年代の問題と世代の問題があるような気がします。いま、団塊の世代も不機嫌だとよく言われます。

内田　駅の職員の人に、「ここはどうなってんだ！」と怒鳴ったりするのが、けっこう団塊の世代だという話がありますね。

広井　アメリカ的価値、近代的価値を一番体現している世代なんでしょうね。

佐伯　それはそうだと思うよ。1960〜70年代のころ、全共闘運動をやったり、政治に参加した。あの連中は、確かに非常にアメリカ的な影響を受けているんです。だけど同時に、彼らなりにある種の正義感で運動をやったわけでしょう。その正義感だけ残ってしまっている。それで、若い連中を見ると、おまえら、ぐすぐすしてだらしない。何をやっているんだと怒りたくなってくる（笑）。

企業なんかでも、団塊の世代はもうほとんど退職してしまったけれども、彼らが管理職だったとき、ものすごくやりにくかったようです。下の者にしっかりしろと言ったりね。最近聞いたのは、団塊の世代が定年でいなくなったら、今度は、団塊よりちょっと下の連中が出てきて、この人たちは、団塊の世代に対する恨みつらみがあって、あいつらがいなくなったというので、もうやりたい放題という（笑）。

広井　それはまた困る。悪循環ですね。拡大成長の時代は、イケイケドンドンで、若いのがいい、健康なのがいい、強いのがいい、経済も大きいのがいいという価値観があった。それがいまはもう人口減少で、経済も低成長ですから、だけど、日本は成功体験が強くて、ジャパン・アズ・ナンバーワンとまで言われたので、なかなか高度成長期のパラダイムから転換するのが難しい。そこで、世代間のギャップがものすごく大きい。

内田　われわれの世代になると、ものすごい勢いの経済成長とか、あまり必要とはしていないんです。いまのレベルを維持することが大事で、ここから落ちると辛いなとは思うんですけど、もっと成長したらいいなという感覚はあまり持っていないんじゃないでしょうか。

佐伯　それと、日本は寿命の伸び率が急速ですよね。戦争が終わってしばらくは、平均寿命が60歳ぐらいだったのが、一気に80歳、90歳近くまできた。その間の年のとり方をだれも学習していないんです。

日本人の死生観と自然観

吉川　これから年をとっていって、自分はどんなふうに最期の日を迎えるのかな、ということを時々考えることがあって。鎌田東二先生が、映画監督の大重潤一郎さんが亡くなったときに、「自分の命を使い切って逝った」と書かれていたんです。大重さんは病を押して『久高オデッセイ』という三部作の最後の作品を完成して間もなく69歳で亡くなりました。その「命を使い切る」という表現がなんというか、胸に響きました。私の亡くなった両親は、頑張っていればいつまでも長生きできるみたいな感覚でいたように思うんです。

広井　私は90年代ぐらいに、できるだけ自然に、あまり延命医療などはしないで亡くなる姿がいいというので、「福祉のターミナル・ケア」という調査研究をしたことがあるんです。それに対して、一部の人からものすごい批判を受けて、特に強い批判を受けたのが、やっぱり団塊の世代だった（笑）。そんな自然の死なんていうのはあり得ないとか、人間はずっと生き続けるのがいいんだ、いかに死を乗り越えるかみたいなことで。時代構造と死生観は非常につながっている。

内田　そうですね。自然に対してどう対峙するかという課題があって、科学や工業が発展して、いろいろなことがコントロールできるようになるんじゃないかと、夢を抱いたんですよね。

広井　そうそう。でもそういう意識はアメリカのほうが強いですね。日本の中では団塊の世代ですが。

佐伯　そういう意味では僕は団塊の世代じゃないですね（笑）。僕の親父は戦争の世代なんだけれども、戦争世代の人たちというのは、案外と死について恬淡としているというか、あまり悩まないんです。戦争体験があって、いつも死ぬか生きるかみたいなところにいたから、生き残ってしまった以上は、生きることだけ考えればいいという意識が強かったですね。

戦後の日本の有名な作家にしろ、小林秀雄のような評論家にしろ、戦争体験をしたり、戦争中に青年時代を送ったりした人は、戦後、ほとんど死について書いていないんです。

団塊の世代はそういうのとは違って、むしろ意図的に死を忘れてしまって、作為的だと思うんです。

広井　そうですね。そのとおりです。

内田　もっと現世的なことで克服していきたい。それで、生をより豊かに長くして、経済も成長する。

佐伯　楽しいことをもっとやろう、それが生きるということじゃないかみたいなところがあってね。

僕は昔から、楽しむことはそんなに大したことではなくて、人間の根本問題は最期をどういうふうに迎えるか、それしかないと思っているんです。特に個人主義に立てば、絶対的な個人の経験というのは「死」しかないわけです。全部死に方は違うけれど、死ぬということに関してはまったくみんなに共通している。

自分が死ぬということはもう絶対的事実で、そこから遡ってきて、どういうふうに生きるかということを考える以外に、生きるということの意味を論じることはできないだろうと昔から感じているんです。

だけど、個人的にはそういうふうに感じる人はいるんだけど、社会全体として1つのモデルがあるかといったら、それはないですね。

広井　日本人にとっては自然というのが大きくて、私の父親は5、6年前に亡くなりましたが、退職後に郊外の農園みたいなのを借りて、そこを「還自園」と名づけて、野菜を育てるのを楽しみにしていました。「自然に還る」、それは農作業が自然に還る行いという意味だけではなくて、たぶん死んだら自然に還るという意味も含まれていたと思います。それは1つの身近な例ですが、死んだら自然に還るという、ある種、死生観、自然信仰、アニミズム、単なる物質的な自然を超えた、スピリチュアルな、生と死を超えた何かみたいな自然観が、けっこう日本では土台にあると思います。

死の意識が文化を生む

吉川　ここ2、3年、自分の仕事の区切りとか、自分の人生の来し方行く末のようなことをけっこうしつこく考えているというか、意識しているんです。たとえば、さっき言った「命を使い切って最期を迎える」ということ。まだ自分自身の死をリアルに意識しているわけではないですけど、自分がいなくなった世界というか、自分のいなくなった場を想定して何を残したらいいのかをあれこれ考えるようになりました。わたしの場合は自分の家族という単位じゃなくて、組織という単位での世代継承です。

2007年にうちのセンターができて、10年やってきた。京大には大小たくさんの研究所やセンターがありますけど、こころの未来研究センターはそのどれとも違う。小さいけれど、中にいる研究者の専門分野がとにかく多彩で、独自の文化がある。このセンターの空気というか雰囲気をずっとつないでいきたい。その思いだけだと単なる組織への愛着ですけど、2012年には若手の准教授が3人そろって、私の中にセンターの若い世代のために、できるだけいい研究組織を作りたい、という思いがぐんと強くなりました。これは自分でも不思議でしたね。こんなふうに言うと怒られるかもしれませんけど、センター長の仕事の大半は自分の研究とはまったく関係のない、雑多な仕事の集積です。それまで苦痛でしかたがなかった事務仕事も、良い組織文化を次の世代まで残すために自分がやらなければ、と思うと何とか我慢ができるようになりました（笑）。

後世に何かを残したい、という気持ちが生まれる条件というのは、たぶん、子どもや孫がいるといったような血縁的なものということじゃなくて、自分たちが作りあげてきたものに「高い価値がある」と感じて、その価値を同じように感じる次の世代がいることの嬉しさ、そうした価値が共有される嬉しさみたいなことかな、と思っています。

内田　心理学で「脅威管理理論」と言いますね。自分の命の限りみたいなものを考えたとき、いまある文化とか環境に対してコミットしようとする。人は自分の存在がたとえなくなったとしても、自分が一生懸命力を注いだものが残り、引き継がれていくことで、安心感を感じることができるわけです。人間はたぶん死を意識し始めた時点で、文化をつくったり、それを残していくことに専心するようになる。絵を描いたり、芸術みたいな気持ちと死の意識はけっこう結びついているんじゃないかと言われていますね。

吉川　いろいろな場から自分がいなくなったときの状況については、わりとよく想像しています。この場や

この組織から自分がいなくなったら、みたいなメンタル・シミュレーションはよくしている。たとえば、うちのセンターから自分がいなくなったときのことなんかはここ2、3年よくやっています。そうすると、いまはこっちの方向に進むのがいいんじゃないか、みたいなことがはっきり見えるようになってきました。これは、年齢も関係しているかもしれません。若いときはそんな発想は全然なかったですから。

広井　面白いですね。近代的自我というのはまさにその逆で、自分の意識は完全に独立したもの、実体的なもので、それが永続しないと困るみたいなところがありますが、いまの吉川先生の話は、むしろ自分が世界と浸透し合っている、つながっている、そういうエコロジカルな自己みたいな感じのものなんですかね。

佐伯　自分のやったことが後の人たちにいい影響を与えて、いい形で受け継がれていくのはものすごくうれしいことなんだけれども、われわれは本を書いて、ある程度世に出すという、比較的恵まれたポジションにいるからそういうことができるんじゃないかなあ。

広井　ただ、どういう人でも、小さなことでも身の周りの人とのつながりみたいなものが大切でしょうね。

内田　農村漁村のフィールド調査に行くと、自分のちょっとした技みたいなものが、それなりにみなさんあるんですね。それを聞いてくれる人、受け止めてくれる人がいるということに喜びがあったり、こういう環境を大事にしたいと思ったりするようです。

広井　それにしても、自分の意識がなくなって無に帰するという恐怖は究極のもので、本当にそれに耐えられるかというとどうでしょうか。

佐伯　それはそうですね。だけど、そこはマテリアリストになって、脳内で何か妙な物質が出てきて、そういう意識も全部消してくれるだろうと思っています。

吉川　わたしはけっこう単純に考えていまして、人は毎日、夜寝て、朝起きて、夜寝て、朝起きてと繰り返していますけど、あるときに、夜寝て朝起きない日がくる、そんなことなんじゃないかと思ってます。

佐伯　それは最高ですよ。でも、そんなわけに行かないんだもの（笑）。目が覚めてみたら、生きてはいるけれども手足が動かないということが起こったり。

内田　それが一番辛いですね。

広井　ただ、私もいま母親が認知症的な感じになっているのですが、緩やかな死というか、生と死が連続的で、徐々にフェードアウトしていくのは、もしかしたら幸せなのかもしれないと思うこともあります。

佐伯　象徴的な言い方をすると、僕は、ある程度年をとって弱ってきたら、断食するのが一番いいと思っているんです。本当に少しずつフェードアウトしていく。ただ、周りに家族や知り合いがいると、やっぱり放っておいてくれないでしょうね。

内田　もっと食べなさいと言われますね。

佐伯　病院へ行くとフェードアウトできないみたいですね。下手をしたら点滴されたりして。尊厳死もそうですが、フェードアウトさせてくれるシステムをどうやってつくるかは大事です。

吉川　「幸せな死ってなんだろう」といったことを、ひとりひとりが自分ごととしてよく考えてみるのは大切ですよね。でもたいていの人はそうしたことを日常の中で避けようとしてしまうから、研究者が人の死生観について研究して世に問うことも必要かもしれないですね。

広井　3、4年前、『文藝春秋』に、作家の五木寛之さんが、「平成のうらやましい死に方」という読者からの投稿をまとめた記事を載せていました。10年前ぐらいにも同じ企画をやったことがあるらしくて、五木さんはずいぶん変化したと書いていました。10年前ごろは、「死」はタブーというか、語られるべきではないような感じだった。いまはわりとあっけらかんと「死」を語ったり、こういう亡くなり方だったみたいなことをお互いに話すような空気が出てきていて、「生き方」ではなく「逝き方」について正面から話せる時代になってきていると感じたと書かれていました。高齢化の1つのプラス面として、そういう兆しも出てきているのではないかと思います。

佐伯　そろそろ死ぬころだと思うと、生きている心構えも多少変わっていくというか、楽になってきますね。できそうにないことは無理にやってもしょうがない。やれる範囲のことをやれるだけやっていこう、そんな気分になってくる。

たとえばブータンのような国の人たちでも、生活そのものはわりと単調で大きな変化はない。そうしたら、やっぱり重要な関心は日常生活を一応そこそこ楽しくやって、そしてうまく死んでいくことです。死ぬということを前提にして、日常生活を組み立てている。

先ほど話に出た、日本人の幸せは7分ぐらいでいい。10まで求める必要はない。10まで求めたら10得られるかもしれないけど、そのためにほかの人を傷つけるかもしれないし、エネルギーを使って、人生を擦り減らしていくのでは何をしているのかわからない。どうせみんな死んで同じになるんだから、現世でちょっと差があってもいいじゃないか。それで、みんな7ぐらいのところで抑えていたというのがもともとあったんじゃないかという気がするんです。

だから、死生観と幸福感は非常に密接につながっていると思います。そういう意味で言えば、死生観とか自然観を失ってしまうと、「幸福」という観念がうまく捉えられなくなってしまう。

自然は地球倫理につながるか

内田　いま、自然に対する畏怖心とか畏敬の念の研究をしているんです。日本だと、学生のデータを取っても、けっこうまだ畏怖心みたいな気持ちが残っているんですね。アメリカだと、大自然のすごい光景を見たら、うわーっとポジティヴになる。クリエイティヴィティが高まるようなんですが。日本では畏怖心は死生観などと重なっているような気がしていて、そこに自分ではコントロールできない大きな存在があると、恐怖心と、「ああ、でも美しい」という感動のようなものがない混ぜになった感情があるようです。

アメリカやヨーロッパでも、古くは恐怖心もあったようなんです。それが戦後、「自然はポジティヴで、楽しむものだ」みたいになっていった。生や死や、自然との対峙さえもコントロールできるんだという近代的な感覚が生まれた。日本もだんだんそうなっていますが、まだ怖さとか、運命に突き動かされている感じが、けっこう20代の若い人でもあるようですね。

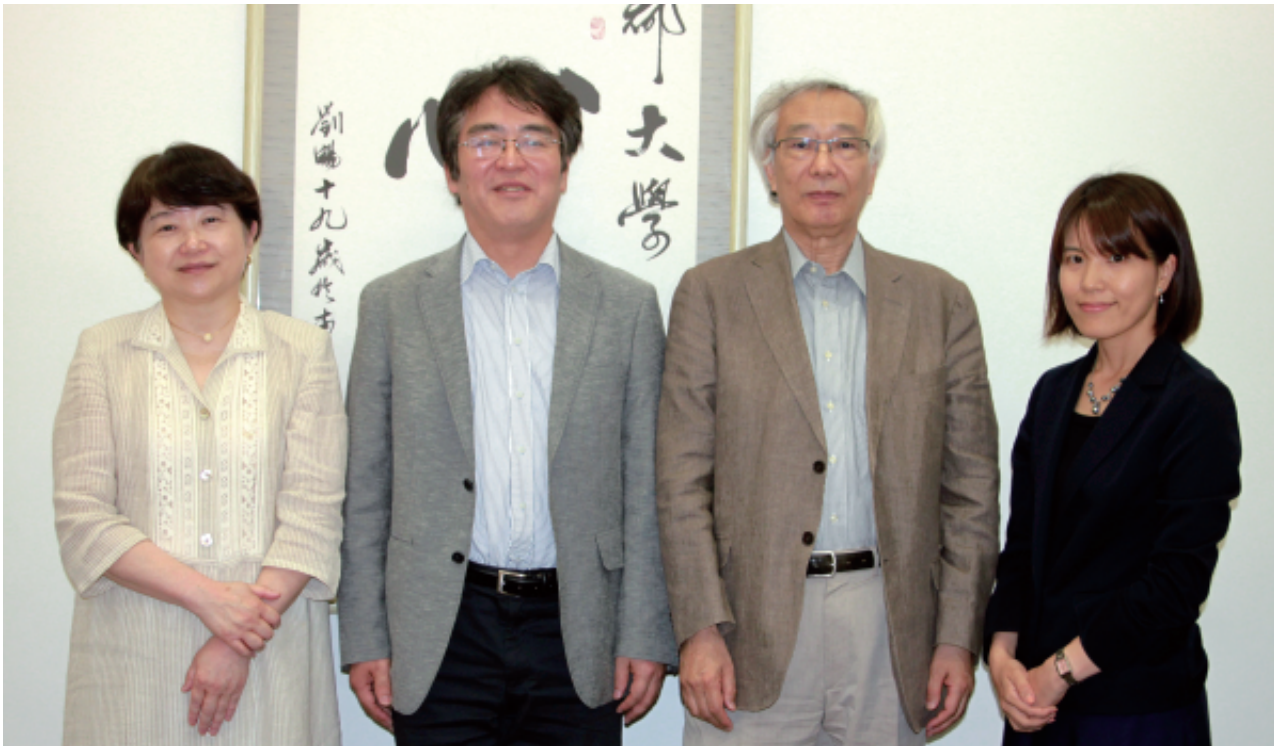
広井　むしろ強そうですね。

吉川　自然災害がこれだけ多い国に、1億を超える人間が住んで、まずまず幸せに暮らしている。これはある意味すごいことですよね。日本人は、生きている間に少なくとも何回かは大きな災害を経験するんじゃないでしょうか。自分は助かったとしても、地震や水害、台風などの災害で大変な目にあった人たちがまわりにいるような環境で暮らしている。それが、自然の美しさに対する親近感だけじゃなくて、自然に対する畏れの感覚や、万物流転のような無常観につながる。これは、若い人たちの中にもあるような気がします。

広井　私は鎮守の森のことをやっていて、各地の神社やお寺を訪ねるのですが、すると若者がたくさん来ているのが印象的です。茶髪のヤンキー風のカップルが、神妙な顔をして祈っていたりとか。そういう非合理的なものとか、単なる物質を超えた何かみたいなことへの関心は、むしろ強くなっているような感じがします。

内田　いろいろな自然災害も起こりますし、そういうのを目の当たりにして、やっぱりすべて自分たちのコントロール下にあるわけじゃない。そこで、どういうふうにするかみたいなところで、そこにパブリックみたいなものが生まれる可能性があるのかなと思います。

広井　自然というのは、ある意味で普遍的なものなので、個別の閉じた共同体を超える原理になり得るでしょう。テツオ・ナジタさんというシカゴ大学の元教授で日本思想史の研究者の方が、『相互扶助の経済』という本を書いています。江戸時代の二宮尊徳などの思想家や、頼母子講とか無尽講という相互扶助のネットワークのことを取り上げて、日本にはこういうつながりのネットワークがもともとしっかりあった。それが



忘れられていたけれども、震災のときなどにそういうDNAが甦る面があるという。いまの話との関係でいうと、相互扶助のネットワークの原理にあったのが自然という考え方です。日本の自然信仰的なものは、うまく発展させていけば、閉鎖的な共同体を超えて、ある種開かれた、普遍的な原理になり得る。

内田　そうだと思うんです。昔は共同体が自分を守ってくれた。でも、そこのルールを逸脱すると村八分になる。だから、生きるか死ぬかは自分が決めるんじゃなくて共同体が決める。だんだんそれがなくなっていって、自分が生きるか死ぬかを決めるようになった。しかし、それもすごくしんどくなってきて、コミュニティではなくて、もうちょっと大きな自然、ある種の環境などが、自分の生命をコントロールしているという感覚が出てきているのかもしれません。

広井　私の希望を込めて言えば、日本社会が閉鎖的になっていくのを超えていく拠り所となり、それが地球倫理というところまで進化していくとすれば、自然とか、その辺ではないかなと思います。

佐伯　たとえば、ギリシャ人にとって、自然はものすごく大事でした。ピュシス（自然）とノモス（人為）みたいなもので、一応そういう対立をさせるんだけれども、ピュシスのほうが大事で、もし人為的なものをつくるのならば、自然の秩序に合わせるのが正しい。

ところが、ギリシャで民主制が発展したのは、逆の原理なんです。人間が人為的に自分の意図や欲望ですべてのものを変えることができるというのがギリシャの民主主義なんです。それに反対したのがソクラテスやプラトンです。ソクラテスやプラトンは、そういう意味で言えば、もっと自然の原理みたいな、動かせない何かが世の中にあるはずだと考えているんです。政治家はそういうことを知らないとだめだ、それが民主政治なんだと。ただ、それをもっと抽象化して、イデアとか真理とか、別の言い方をしている。

広井　よく似た対立が同じ時代の中国にもあって、いわゆる儒教と老荘思想です。儒教は極めて都市型の論理で、「和して同ぜず」というのは、人間はべたっと一体になったらだめで、都市的に個人として存在する。一方、老荘の思想は、自然のほうを重視する。

佐伯　その両方が必要だという感じがするんです。

広井　両方大事ですね。ギリシャや中国でそういう思想が出たのは、いまから2500年ぐらい前の枢軸時代、「精神革命」といわれる紀元前5世紀頃です。同じ時代に、奇しくもインドで仏教が生まれ、また、イスラム教やキリスト教のルーツであるユダヤ教というか、旧約思想が登場するのも偶然同じ時代です。当時は農耕文明がかなり環境の限界に行き着いていた時代で、外に向かって発展する方向が限界に行き着いて、もっと内面的な豊かさとか、価値とか、幸福を考えるようになった。いまは工業文明が限界に達して、幸福とか死の問題もそうですが、いままでの時代とは違うテーマが出てきている。それが、まさにこころの未来につながり、公共政策や地球倫理につながっているのだと思うのです。

内田　うまくまとまりました（笑）。

（2016年6月2日、京都大学こころの未来研究センターにて）

論考 ◎ 特集・公共政策

地球倫理と公共政策――グローバル定常型社会の可能性

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）
Yoshinori HIROI

1961年岡山市生まれ。東京大学教養学部卒業（科学史・科学哲学専攻）、同大学院修士課程修了（相関社会科学専攻）。厚生省勤務、千葉大学法経学部助教授、マサチューセッツ工科大学客員研究員、千葉大学法政経学部教授を経て、2016年より京都大学こころの未来研究センター教授。専攻は公共政策・科学哲学。『日本の社会保障』（岩波書店）で第40回エコノミスト賞、『コミュニティを問いなおす』（筑摩書房）で第9回大仏次郎論壇賞受賞。他の著書に『アメリカの医療政策と日本』（勁草書房、吉村賞受賞）、『ケアを問いなおす』（筑摩書房）、『定常型社会　新しい「豊かさ」の構想』（岩波書店）、『死生観を問いなおす』（筑摩書房）、『創造的福祉社会』（同）、『ポスト資本主義　科学・人間・社会の未来』（岩波書店）ほか。

本稿では、「拡大・成長と定常化」という観点から人間の歴史をとらえ直し、そうした経済社会の構造変化が人間の思想や観念、規範意識等に深い影響をもたらすことを確認しつつ、それを踏まえてこれからの社会のありようや新たな価値原理について若干の考察を行ってみたい。

人類史における拡大・成長と定常化

人間の歴史を大きく俯瞰すると、それを人口や経済規模の「拡大・成長」の時代と「定常化」の時代の交代として把握することができ、それにはこれまで3回のサイクルがあったととらえることが可能である。

そうしたことが比較的明瞭に見えるのが人口をめぐる変動であり、この点に関してまず**図1**をご覧いただきたい。これは世界人口の長期推移について先駆的な研究を行ったアメリカの生態学者ディーヴェイの仮説的な図式を示したもので、世界人口の拡大・成長と成熟ないし定常化に関する3つのサイクルが示されている。ディーヴェイがこうした研究を発表した1960年代以降、超長期の世界人口の推移については多くの研究がなされてきているが（そうした研究の総説の1つとしてCohen, 1995）、これらはその推計内容において大きく異なるものではない。

さて、こうしたサイクルはさしあたり、いわゆる「狩猟・採集社会」、「農耕社会」、「近代ないし工業化（産業化）社会」という3つの局面の生成と成熟化に対応していると考えてよい。すなわち、第1のサイクルは私たちの祖先である現生人類（ホモ・サピエンス）が約20万年前に地球上に登場して以降の狩猟・採集段階であり、第2のサイクルは約1万年前に農耕が始まって以降の拡大・成長期とその成熟であり、第3のサイクルは、（16世紀前後を始動期としつつ）とりわけ産業革命以降ここ200～300年前後の拡大・成長期である。

さて、ここで特に注目したいのは、人間の歴史における拡大・成長から定常への移行期において、それまでには存在しなかったような何らかの新たな観念ないし思想、あるいは価値と呼べるものが生成したという点だ。

議論をごく駆け足で進めることになるが、しばらく前から人類学や考古学の分野で「心のビッグバン（意識のビッグバン）」あるいは「文化のビッグバン」などと呼ばれている興味深い現象がある。たとえば加工された装飾品、絵画や彫刻などの芸術作品のようなものが今から約5万年前の時期に一気に現れることを指したものである。現生人類ないしホモ・サピエンスが登場したのは先述のように約20万年前とされているので、なぜそうしたタイムラグが存在するのか、どのような背景でそうした変化が生じたのかといった話題が「心のビッグバン」をめぐる議論の中心テーマとなる（海部，2005、クライン他，2004、ミズン，1998等）。

一方、人間の歴史を大きく俯瞰したとき、もう1つ浮かび上がる精神的・文化的な面での大きな革新の時期がある。それはヤスパースが「枢軸時代」、科学史家の伊東俊太郎が「精神革命」と呼んだ、紀元前5世紀前後の時代であり、この時期ある意

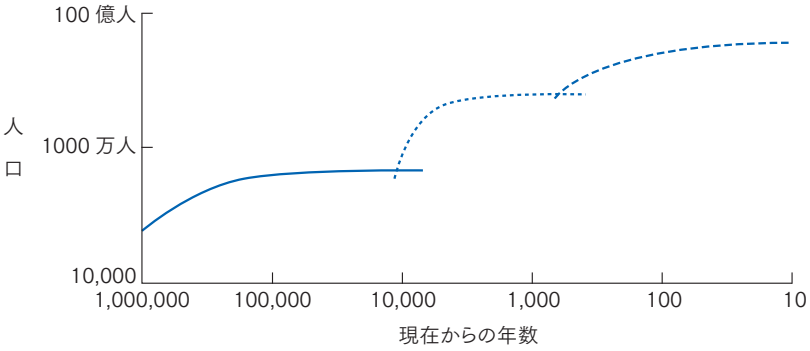


図1　世界人口の超長期推移（ディーヴェイの仮説的図式）〔出典：Cohen, 1995〕

味で奇妙なことに、現在に続く「普遍的な原理」を志向するような思想が地球上の各地で“同時多発的”に生まれた。インドでの仏教、中国での儒教や老荘思想、ギリシャ哲学、中東での（キリスト教やイスラム教の源流でもある）旧約思想であり、これらは共通して、特定の部族や共同体を超えた「人間」という観念を初めてもつと同時に、何らかの意味での“欲望の内的な規制”あるいは物質的欲求を超えた新たな価値を説いた点に特徴をもつものだった（ヤスパース，1964、伊東，1985）。

いま「奇妙なことに」こうした思想群が“同時多発的”に生じたと述べたが、その背景ないし原因は何だったのだろうか。興味深いことに最近の環境史（environmental history）と呼ばれる分野において、この時代、中国やギリシャ、インド等の各地域において、農耕に伴う人口増加や資源消費が進んだ結果として、森林の枯渇や土壌の浸食等が深刻な形で進み、農耕文明が（最初の）資源・環境制約に直面しつつあったということが明らかにされてきている（石他，2001、ポンティング，1994参照）。

このように見ていくと、これはなお私の仮説にすぎないが、枢軸時代ないし精神革命に生成した普遍思想／普遍宗教の群は、そうした環境的制約の中で、いわば「物質的生産の量的拡大から精神的・文化的発展へ」という方向を根拠づけるような思想として、あるいは生産の外的拡大に代わる新たな価値や観念を創造するものとして、生じたと考えられないだろうか。

一方、さらに思考を展開させれば、先ほどの「心のビッグバン」について、それが同様のメカニズム、つまり狩猟採集社会の拡大・成長から定常化への変容の時期に生じたと考えてみるのもあながち不合理ではないと思われる（この両者はいっしょに論じられることがないけれども）。

つまり人間のもっとも原初的な段階としての狩猟採集期の前半において、狩猟採集という生産活動（とその拡大）に伴ってもっぱら“外”に向かっていた意識が、何からの形での資源・環境制約にぶつかる中で、いわば“内”へと反転し、そこに現在の私たちが「心」と呼んでいる何かとともに、物質的な有用性を超えた装飾や広義の芸術への志向、ひいては（宗教の原型としての、死の観念を伴う）「自然信仰」が生まれたのではないか。

さらに、このように心のビッグバンや精神革命と定常期との関わりを考えることは、「定常」というコンセプトの再定義にもつながるだろう。すなわち、「定常」という表現からはともすれば“変化の止まった退屈な社会”というイメージが伴うかもしれないが、それは誤りであり、ここで見た人間の歴史が示しているように、定常期とはむしろ文化的創造の時代なのである。

以上の議論をまとめると、狩猟採集段階における定常への移行期に「心のビッグバン」が生じ、農耕社会における同様の時期に枢軸時代／精神革命の諸思想（普遍宗教ないし普遍思想）が生成し、両者は「物質的生産の量的拡大から内的・文化的発展へ」という点において共通していたと考えられるのではないか（以上について詳しくは広井，2011参照）。

同時に、現在が人類史における第3の定常化の時代とすれば、心のビッグバンにおいて生じた自然信仰や、枢軸時代に生成した普遍宗教に匹敵するような、根本的に新しい何らかの価値原理や思想が要請される時代の入り口を私たちは迎えようとしているのではないか。こうした点に関するもっとも巨視的な展望をまとめたのが図2である。

地球倫理の可能性

ではそのような新たな倫理あるいは価値とはどのような内容のものであるのか。

ここでまず議論の手がかりになるのは、“第2の定常化”の時代に生成した枢軸時代の諸思想との対比である。

それらが「普遍宗教・普遍思想」と表現されるように、枢軸時代に生成した思想群は、特定の民族や共同体を超えた「人間」あるいは「人類」という観念をはじめて持ち、人間にとっての普遍的な価値原理を提起したという点にその本質的な特徴があった。

この場合、それらの思想や世界観の「内容」は、各々が生まれた地域の風土的環境を反映しつつ、ごく大づかみに言えば、

- 旧約思想（〜キリスト教やイスラム）の場合……“超越者原理”
- 儒教やギリシャ哲学の場合……“人間的原理”
- 仏教の場合……“宇宙的原理”とも呼ぶべき世界観としてそれぞれ大きく異なっていたのだが、「普遍性」への志向という点においては共通していたのである（風土と宗

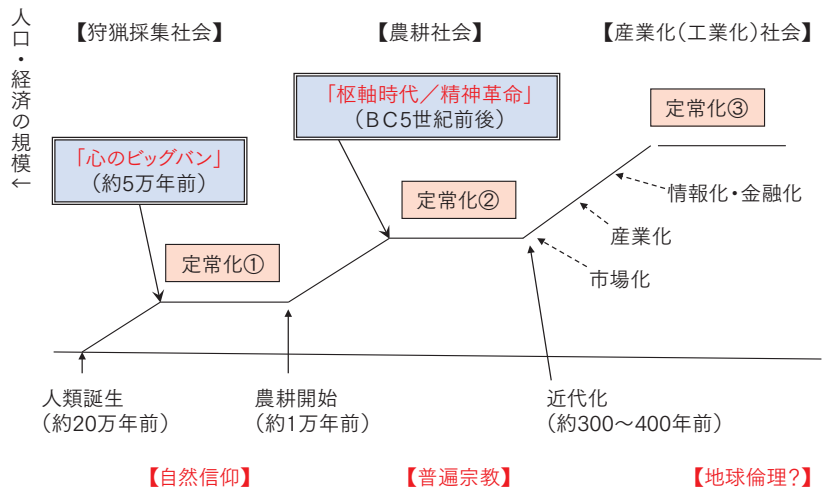


図2　人類史における拡大・成長と定常化

教の相関について鈴木，1976参照)。

ちなみに近年、GDPに代わる「豊かさ」の指標に関する研究とも並行する形で、「幸福」をめぐるテーマへの関心が高まっているが、これらの普遍思想ないし普遍宗教は、ある意味でいずれも（生産や欲望の外的な拡大を超えた）「幸福」の意味を――たとえばキリスト教の愛、仏教における慈悲、儒教やギリシャ思想における「徳」といった形で――説いたものと言ってもよいだろう。

さらに、こうした状況の全体を一歩外から見ると、次のような点が指摘できると思われる。すなわちこれらの諸思想は、上記のように特定の民族や共同体の利害や観念を超え出るものとして、そうした複数の民族・文化間の対立を乗り越え融和していく思想としての役割をもった半面、自らの「普遍性」を“自認”するぶん、互いに共存することは困難な性格を持っていたという点だ。

ある意味で逆説的なことだが、自らの考えの「普遍性」を自負し主張する度合いが強ければ強いほど、そうした思想同士は互いに両立が困難になるだろう（これは象徴的には“複数の普遍”は可能か、という問いの形で表現することもできる)。

しかし現実には、そうした問題が深刻な形で生じることは、かなり後の時代になるまでは比較的少なかった。なぜなら近代に至るまで、地球上の各地域間の交易はある程度限定された範囲にとどまっており、したがって枢軸時代の諸思想は、それが生まれた地域をベースとして地球上で一定の範囲に浸透していきながらも、互いにある種の“リージョナルな棲み分け”を行うことができたからである。

しかし現在のような時代においては、キリスト教とイスラムの対立を含めて、普遍宗教同士が互いにそのままの形で共存するのはきわめて困難な状況になっている。

「地球倫理」が登場する第1のポイントはこの点にある。つまりそれは、普遍宗教・普遍思想を含め、地球上の各地域における思想や宗教、あるいは自然観、世界観等々の多様性に積極的な関心を向け、しかもそうした多様性をただ網羅的に並列するだけでなく、そのような異なる観念や世界観が生成したその背景や環境、風土までを含めて理解しようとする思考の枠組みだ。

言い換えれば、枢軸時代の普遍宗教・普遍思想がそれぞれの普遍的な“宇宙（コスモス）”を持っていたという意味で「コスモロジカル」だったとすれば、地球倫理は、思想や観念をそれが生成した背景や風土、環境にさかのぼって把握するという意味で「エコロジカル」と言えるだろう。同時にそれは、個々の普遍宗教をメタレベルから俯瞰しつつ架橋するという意味で「地球的公共性」と呼びうる側面をもっている。

一方、地球倫理が要請されるもう1つのポイントは、地球上の各地域に存在する、「アニミズム」とも呼ばれるような、もっとも原初的な自然信仰との関わりに関してである。

それは自然の具体的な事象の中に、単なる物質的なものを超えた何かを見出すような自然観あるいは世界観であり、「自然のスピリチュアリティ」と呼ぶことも可能で、（第1の定常期における）「心のビッグバン」と深い関わりのあるものと言えるだろう（「自然のスピリチュアリティ」について広井，2003参照)。

これは上記のように地球上の各地でのもっとも原初的な自然観ないし信仰のかたちであり、ある意味ですべての“「価値」の源泉”とも呼びうる次元だが、枢軸時代ないし精神革命において生成した諸思想においては、一般にこうした自然信仰は不合理で“原始的”なものとして否定的にとらえられた。

たとえば「死生観」にそくして言えば、自然信仰においては、生と死を連続的にとらえ、自然の具体的な事物の中に生と死を超えた何かを見出すといった発想をとる。たとえばそれは、何百年にもわたって立っている1つの大樹を見て、そこに時間を超えた何かを見出すといった感覚あるいは世界観である。

これに対し普遍宗教・普遍思想においては、生と死は明確に区分されて概念化され、かつ死は「永遠」とか「空」といった、より抽象化された理念とともに把握されることになる。それはある意味で洗練され高次化された死生観の体系であるけれども、同時にそこに自然との「切断」が働いているのも確かである。

一方、地球倫理においては、原初にある自然信仰――それは本来的に「ローカル」な性格のものでもある

――の価値を再発見し、それに対して積極的な評価を与える。なぜなら地球倫理の視点からは、「自然信仰／自然のスピリチュアリティ」は、むしろあらゆる宗教や信仰の根源にあるものであり、普遍宗教を含む様々な宗教における異なる「神（神々）」や信仰の姿は、そうした根源にあるものを異なる形で表現したものと考えるからである。これは先ほど地球倫理について「エコロジカル」と表現した世界観、つまりある思想や信仰、観念等を、それだけを独立させてとらえるのではなく、それが生成した風土や環境との関係性において把握する視点ともつながっている。

いずれにしても、以上のように、地球倫理は一方で個々の普遍宗教と関係するとともに、もっとも根底にある「自然信仰／自然のスピリチュアリティ」と直接につながることになる（図３参照）。

そして最後にもう一歩思考を展開させれば、近年の諸科学がビッグバンないしインフレーションからの宇宙の創成、地球システムの形成、生命の誕生、そして人間と意識の生成といった一連の出来事を、生命ないし自然の内発性と重層的な自己組織化という、ひとつの一貫した過程としてとらえるという方向に向かっているとすれば（こうした把握について伊東，2013参照）、この図の中でもっとも「ローカル」な場所にある自然信仰は、その根源において宇宙的（ユニバーサル）な生命の次元とつながり、それは逆に地球倫理をも包含する位置にあると言えるかもしれない。

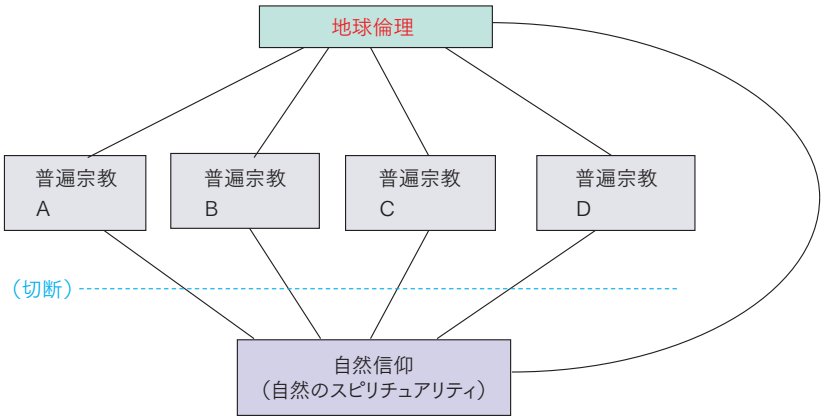


図３　地球倫理をめぐる構造

おわりに――グローバル定常型社会の可能性

人口学者のルッツは、「20世紀が人口増加の世紀――世界人口は16億から61億にまで増加した――だったとすれば、21世紀は世界人口の増加の終焉と人口高齢化の世紀となるだろう」と述べている（Lutz et al, 2004）。

もちろん、それは（たとえばアフリカの今後の人口動向等について）希望的観測を含むもので予断を許さないし、また工業化等に伴う１人当たりのエネルギー消費の増加を考えれば事態の困難性はさらに高まる。加えてその過程で予想される各種の資源の争奪戦や、地域間での格差あるいは分配の問題を考えれば、それは困難を極める状況であるだろう。

しかしながら、21世紀の後半まで視野に入れて考えた場合、私がこれまで「グローバル定常型社会」と呼んできた姿、つまり「21世紀後半に向けて世界は、高齢化が高度に進み、人口や資源消費も均衡化するような、ある定常点に向かいつつあるし、またそうならなければ持続可能ではない」という認識ないし展望は、ある意味で不可避のものと言えるのである（広井，2009）。

現実には21世紀という時代は、なお限りない「拡大・成長」を志向するベクトルと、成熟そして定常化を志向するベクトルとの、深いレベルでの対立ないし“せめぎ合い”の時代となるだろう。しかし世界の持続可能性や人々の幸福という価値基準をとった場合、定常化あるいは「持続可能な福祉社会」への道こそが、私たちが実現していくべき方向ではないか。“鎮守の森”に象徴されるような自然信仰の伝統を保持し、世界の中で人口減少社会にいちはやく移行した日本は、そうした定常型社会のビジョンこそ率先して追求し実現していくべき立ち位置にあると思えるのである。

参考文献

石弘之他（2001）『環境と文明の世界史』、洋泉社新書。
伊東俊太郎（1985）『比較文明』、東京大学出版会。
同（2013）『変容の時代――科学・自然・倫理・公共』、麗澤大学出版会。
海部陽介（2005）『人類がたどってきた道』、日本放送出版協会。
鎌田東二（2000）『神道とは何か』、PHP新書。
リチャード・G・クライン＆ブレイク・エドガー（鈴木訳、2004）『5万年前に人類に何が起きたか？』、新書館。
鈴木秀夫（1976）『超越者と風土』、大明堂。
クライブ・ポンティング（石他訳）『緑の世界史（上）』、朝日選書。
広井良典（2003）『生命の政治学――福祉国家・エコロジー・生命倫理』、岩波書店。
同（2009）『グローバル定常型社会』、岩波書店。
同（2011）『創造的福祉社会』、ちくま新書。
同（2015）『ポスト資本主義　科学・人間・社会の未来』、岩波新書。
スティーヴン・ミズン（松浦他訳、1998）『心の先史時代』、青土社。
カール・ヤスパース（重田訳、1964）『歴史の起源と目標』、理想社。
Cohen, Joel E. (1995) *How Many People can the Earth Support?* Norton.

論考 ◎ 特集・公共政策

メシア思想と覇権主義

服部英二（公益財団法人モラロジー研究所研究センター教授・顧問、元国連教育科学文化機関事務局長特別参与）
Eiji HATTORI

1934年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得後、フランス政府給費留学生としてソルボンヌ大学博士課程留学。1973年よりユネスコ（国連教育科学文化機関）パリ本部勤務、主席広報官、文化担当特別事業部長、1994年帰国、ユネスコ事務局長顧問、麗澤大学及び同大学院教授、日本学術会議（文明誌）構築特別委員会委員、日仏教育学会会長、地球システム・倫理学会会長、国際比較文明学会副会長等を歴任。現在、モラロジー研究所道徳科学研究センター顧問、麗澤大学比較文明文化研究センター客員教授、日本比較文明学会名誉理事、世界ユネスコクラブ協会連盟名誉会長、筑波大学大学院外部アドバイザー。1995年、フランス共和国より学術教育功労章オフィシエ位授与。2007年、国連教育科学文化機関より功労メダル授与。2010年、全国日本学士会よりアカデミア賞受賞。著書に、『未来を創る地球倫理 ── いのちの輝き・こころの世紀へ』、『文明の交差路で考える』、『文明は虹の大河』、『「対話」の文化 ── 言語・宗教・文明』（共著）、『未来世代の権利 ── 地球倫理の先覚者、J-Y.クストー』（編著）など、訳書に『地球との和解 ── 人類と地球にはどんな未来があるか』など。

タナトスの時代

中東を中心に繰り広げられる壮絶な殺戮の戦火は止むことを知らず、もはやだれがだれに対してなのかも分からない過激主義テロの頻発、それに対処するための米・露・欧の暫定的な協調と、「イスラム国」ISに対する空爆、これらが複雑怪奇な憎しみと報復の連鎖を生みだし、その陰で無数の幼い命までが奪われていく。それのみか、爆撃に伴う幾多の一般住民の犠牲はその住民親族を過激思想にいざない、自発的にISに忠誠を誓うものや一匹オオカミ的テロリストを創り出している。欧州・北アフリカをはじめとする数十か国からのIS義勇兵は3万人を超えた。

私は世界の現状にフロイトの述べたタナトス（死と破壊の本能）の噴出を見る。あるいは世界は今、前例のない形での第三次世界大戦にすでに突入しているのではないのか？　姿を見せないテロと戦うのはチョムスキーが指摘したように国家が姿を見せるもう1つのテロだ。この2つは形こそ正反対だが本質を1つにしている。すなわち他者の否定と抹殺である。その底には自己が否定されることへの否定がある。現代的十字軍と、それに対するジハードはともに「聖戦」を掲げる。はたして両者に大義はあるのか？

メシア思想の転移

思い出すのは、数年前、サンクトペテルブルクで行われた国際比較文明学会の会場でロシアの若い女性研究者と交わした会話だ。

「ロシア人はメシア思想を持っている」

と彼女は言い放った。

「え、それはなぜ？」

「5世紀、西ローマ帝国が崩壊すると、キリスト教会の中心は東ローマ帝国に移った。東方正教会には自らがメシアたらんとする自負が生まれた。ところが15世紀、コンスタンチノープルがオスマン帝国によって占領されると、メシア思想は北方に移り、ロシア正教会がその意識を受け継いだのよ」

「しかし」と僕は言った。「ロシア正教会は宗教をアヘンと断罪したマルクス・レーニンの共産主義革命によって迫害され、ごく最近まで封鎖されていたじゃないか？」

と、その問いを待っていたかのように彼女は声を張り上げたのだ。

「その共産主義こそがメシア思想なのよ！　だからその歌はインターナショナル、ロシアによる世界人民の救済が唱えられたのよ！」

「なるほど〜」と僕は言わざるを得なかった。この理論には一理ある。単なる覇権主義ではなく救済の観念がその底辺にあってこそのブームだったのだ。確かに20世紀初頭、ジイドを初めとする多くの西欧の知識人が希望の地としてのロシアを訪れている。その多くはのちに失望し共産思想を捨ててゆくのだが……。

しかしメシア思想がもしこのように移転したものだとするならば、もう1つの西ローマ帝国のほうも考えねばなるまい。確かにこの帝国（帝国という言い方自身は後世のものだが）は5世紀末ゲルマン民族の大移動の

ロシア革命の底辺には救済の観念があった［©Everett Historical/Shutterstock.com］

トマス・アクィナス　スコラ学の代表的神学者［wikipediaより］

波の中で崩壊する。しかし800年、カール大帝の即位により神聖ローマ帝国として復活したではないか。その後、浮き沈みはあったが、13世紀にはパリのノートルダム大聖堂に象徴されるような一大キリスト教文明を創り出す。スコラ哲学はギリシアの科学とキリスト教神学を融合させた「黄金の知」と言われた。Universityとはその Universal な真理を世界に発信する教学の場であった。真理の伝道である。するとこれまたメシア思想の殿堂ではなかったか？

トマス・アクィナスに代表されるこのキリスト教の教学に陰りが出始めるのは15世紀のことである。それはペストの流行によるのではなく、スコラ哲学そのものが12世紀ルネサンスの産物、すなわちアラビア経由で渡来したギリシアの諸科学の再発見によるものであり、その意味で自然科学の苗床であったからだ。ヘブライの不条理とギリシアの理性を融合するというこの錬金術的試みは時とともにその内部矛盾に耐えきれなくなっていった。しばらくは教会の真理と科学の真理という二重真理説、すなわち棲み分けにより難題を切りぬけてきたが、この矛盾は16世紀には決定的となり、ついには17世紀の科学革命となって決着がつけられたのである。このとき人間は自然を対象化した。言い換えれば自然と「離婚」したのであった。デカルトの言うとおり、「人間は自然の所有者であり主人」となった。

神の死

実はこのとき父なる神も死んだことに気が付かねばならない。その存在を証明するというが、デカルトにおける神とは限りなく透明な一点であり、ヘブライ＝キリスト教本来の人格神ではない。19世紀、ニーチェが「神は死んだ」と語るが、ニーチェが神を殺したのではない。彼は神が死んでいたことを明言する勇気を持っていたということだ。

パリのノートルダム大聖堂　13世紀には一大キリスト教文明が創り出された［©Kiev.Victor/Shutterstock.com］

中世の黄昏、教会はまだ地上に建っていたが、その土台は腐食していたのだ。ヨーロッパの中核ともいうべきスコラ哲学の崩壊から2つの流れが生まれた。1つは神をも客体化する人間の確立すなわち人本主義としてのルネサンス、もう1つがキリスト教の原点回帰を叫んだプロテスタント運動である。一方はギリシア的理性に、もう一方はヘブライ的信仰に、それぞれ回帰していく。黄金の知によって融合された2つの要素が再分裂していったのである。そして大航海時代、ピューリタンをはじめとするプロテスタントたちは新世界を求めて海を渡る。

注意すべきは、ヘブライ・キリスト教に固有のメシア思想であり、古いヨーロッパでは永らく影を潜めていたそれが、アメリカに渡ったプロテスタントに引き継がれて蘇生することだ。自由と平等という輝かしい理念は、フランス革命の標語であるが、それに先立つアメリカ独立宣言の理念でもあった。民主主義もまたアメリカで生まれた。それはすでに古代ギリシアのアテネに存在し、共和国すなわち民主主義だとする議論もあるが、そうではない。近代的民主主義はヨーロッパのしがらみを断

「独立宣言への署名」(ジョン・トランブル画)[wikipediaより]

ち切った新世界でこそ花開くべきものであった。トクヴィルが称賛したように、アメリカは夢と希望の国となった。しかし「自由と民主主義」が絶対かつ普遍的理念として世界を律していくのは、アメリカが二度の大戦の立役者となり、絶対王者として世界に君臨することになって以来である。

ソ連の崩壊後、世界はパクス・ロマーナをしのぐパクス・アメリカーナの時代に入った。そのとき世界の警察を自認したアメリカ人の意識の底にあったのは覇者のそれではなく、メシア意識であった、と私は思う。正義はわれにありとの確信をそこに見なければアメリカの行為は理解できない。敗戦国日本の処理もそうであったが、当時第三世界に赴いたアメリカ人の若者の目は善意にあふれていた。それは19世紀のイギリス人の目にも宿っていたものだ。善きものをもたらすために来た、という確信が植民地でも彼らの心を安らかにしていた。しかし同じ行為はやがて「植民地主義」と呼ばれる覇権主義に変身していく。植民地化の最大の罪は、経済的搾取ではない。精神の隷属だ。植民地の民を未開と見なし、啓蒙せんとするのはメシア思想だ。文化的価値に上下関係が生まれ、これは2001年のユネスコによる「文化の多様性に関する世界宣言」の採択まで続く。

パクス・アメリカーナの終焉

ところがいま、地上の最大の強国アメリカのオバマ大統領が「われわれは世界の警察ではない」と語る時代が到来した。それはプーチンという強力な指導者の下でソ連的性格を取り戻してきたロシアに対してだけの言葉ではなく、明らかにもう1つの大国の目覚ましい台頭によって3極化した世界の事実認識によるものである。

その中国にはメシア思想はあったのか？　答えは否である。そこにあるのは中原を制し、徐々に東夷・西戎・南蛮・北狄を制覇していった漢民族特有の中華思想である。それは覇権主義なのか？　確かに始皇帝の秦を破り2300年にわたって徐々に領土を広げていった事実を見れば覇権主義という側面は否定できない。しかしそこには常に華人つまり文化的優越性を自負する者による他民族の同化という側面があった。中華思想は文化的メシア思想である。

いまわれわれが考えなくてはならないのは、メシア思想とコミュニティの関係である。もともとメシア思想とはユダヤ民族に特有なもので、苦難に満ちたこの民族に約束された救い主Messiahが現れるという思想なのである。ギリシア語ではクリストス＝キリスト（いずれも香油を塗られたものの意）となる。それは万人のものではなく、諸民族のなかの特定の民族、すなわち「選民」たるユダヤ民族を救いに来るものでなければならなかった。イエス・キリストがメシアであると信じたものはキリスト

3極を担うロシアのプーチン大統領、中国の習近平国家主席、アメリカのオバマ大統領(2014年、APEC)[©時事]

教徒となり、イエスを単なる預言者の一人とみるユダヤ教徒と区別される。問題はメシアが「選民」のみを救う英邁なる王なのか、である。イエスの教えは革命であった。彼は選民思想を排除し、救いの対象を万人に開いた。そしてヘブライの怒りの神に代えて愛の神を説く。これはヘブライズムの中での180度の神概念の転換であり、キリスト教を一民族の宗教ではない世界宗教に昇華した精神改革であった。

コミュニティの意味

Communityとは捧げもの（Munus）を共にする（Co）人々の集まりである。供物を捧げる対象が大きくコミュニティの性格を左右する。アブラハムの民にとってそれは恐ろしい神ヤーヴェであった。アブラハムにその一人子イサクを生贄に捧げよ、と命じた不条理の神、試練を課す神である。イエスによりその神はアガペーすなわち崇高な無償の愛の本体となる。7世紀、ムハンマドもまた天使ガブリエルから同じ愛の神の啓示を受ける。全能にして万有に顕現する神、そのアラビアでの呼び名はアッラーである。

世界は3極時代に入ったのではない。それに加え今後ますます重要度を増すに違いない共同体としてのイスラームという1極がある。今世紀中に世界人口の3分の1がイスラム教徒になる、という人もいる。イスラームとは絶対服従の意だが、そのコミュニティはダール・アル・イスラーム（平和の家）で、ダール・アル・ハルブ（戦争の家）に対峙される。その救いの共同体がウンマと呼ばれる。

さまざまなコミュニテイが共存する地球［NASA］

このイスラームは覇権主義なのか？　ムハンマドを奉じた者たちが7世紀半ばから8世紀、中東はもとより西アジア、北アフリカ、イベリア半島までを燎原の火のごとく席巻していった歴史を見れば覇権主義的性格は否定できない。しかしその本当の成功の秘訣はアッラー信仰を武力で強いたのではなく、むしろ各都市に異教徒の共存を許した知恵にあったと考える。特にユダヤ教徒・キリスト教徒は従妹関係を認められていた。信仰の違いは租税の違い以外のものではなかった。

グローバル化が叫ばれて久しい。それは実質的にはアメリカ化を意味してきた。しかし、イスラームもまた本質的にグローバル化の性格を持つコミュニティだからだ。イスラームが既存の3極に加え第4極として浮上する可能性は高い。イスラーム過激派の中心地を破壊することはできない。バチカンのような本山がないからだ。教皇に当たる聖職者はいない。「イスラム国」の自称カリフ、バグダディはいずれ本拠をメッカにと考えているようだが、現状はそれとはほど遠く、アジアからアフリカまでイスラム国はアメーバのように変身して現れ、中東を超えて支配地が次々に生まれる。拡大と拡散である。グローバル・ジハードという言葉が聞こえる。

卑劣なテロとは断固として戦わねばならない。しかし同時にわれわれが反省すべきは、イスラーム文明を消去した世界史を学び、説いてきたことだ。オスマン帝国がヨーロッパに敗れて以来、イスラーム諸国は植民地化され蔑視され続けてきた。だがヨーロッパを列強に仕立てていく近代科学そのものは中世イスラーム世界の貢献、つまり12世紀ルネサンスなくして起こりえなかったものなのだ。中世まで世界をリードしたアラビア圏に行くとその存在を無視されたことに対する深いRessentiment（恨）が見て取れる。文明間対話が今ほど必要な時はない。

サウジアラビアのメッカに巡礼する人々［©Zurijeta/Shutterstock.com］

論考 ◎ 特集・公共政策

グローカルな倫理と公共性

山脇直司（星槎大学副学長、東京大学名誉教授）
Naoshi YAMAWAKI

1949年青森県八戸市生まれ。一橋大学経済学部卒業、上智大学大学院哲学研究科修士課程修了。1982年ミュンヘン大学にて哲学博士号を取得。現在、星槎大学副学長・学部長、東京大学名誉教授。東海大学文学部文明学科専任講師、上智大学文学部哲学科助教授、東京大学教養学部社会科学科助教授、同教授、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻教授等を経て現職。「より良き公正な社会を追究」する公共哲学が専門。関心は、市民が創る公共、21世紀にふさわしい哲学・学問論。単著に『ヨーロッパ社会思想史』『公共哲学とは何か』『社会とどうかかわるか』『公共哲学からの応答』『社会思想史を学ぶ』『グローカル公共哲学』など、編著に『科学・技術と社会倫理』など、訳書に『幸福と仁愛』『原子力時代の奢り』など。

私は最近、*Glocal Public Philosophy: Toward Peaceful and Just Societies in the Age of Globalization*（『グローカル公共哲学：グローバル化時代の平和で公正な社会のために』）という英語本を刊行した[1]。これは日本語で既発表の英語版ではなく、外国の読者のために書き下ろしたものである。本稿は、その内容を承けながら、「グローバル」でも「ローカル」でもない「グローカル」という和製英語の形容詞がついた倫理と公共という考え方が、科学技術政策のみならず、国際公共政策でもある原子力政策の根本にある「原子力問題」にとってなぜ必要なのかを論じてみたい。

1 グローカルという哲学的概念

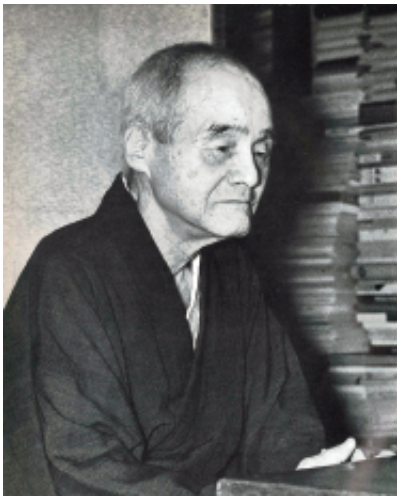
1990年代頃からNGOの間で、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」というスローガンが国際的に使われるようになった。他方、日本発の和製英語であるグローカルという言葉も、思想的立場の違いを超えて使われ始めた（『日経グローカル』、新左翼の機関誌『グローカル』、天理教のサイト等々）。その意味合いは必ずしも一義的ではないが、私はこの言葉を、グローバル化の波にさらされる今日、従来の欧米中心主義を乗り越える21世紀の哲学的概念にしたいと思っている。

まず、私なりのグローカルglocalという概念の定義から始めよう。英語のlocalは、「ある地域の」「特定の場所の」「現地の」などを意味する形容詞で、ラテン語のlocus（場所）に由来しており、現代でも英語のlocusは「場所」や「活動の中心」などの意味を持つ。そしてグローバルglobalは「地球的」という意味の形容詞である。したがって、グローカルとは「特定の現場や地域に即しながら、地球的な」を意味する形容詞だと考えたい。

ではなぜ、グローバルではなくグローカルという概念がいま必要なのかと言えば、グローバルな諸問題を考える際の、「現場や立ち位置」を明確にするためである。たとえば、ビジネスクラスで世界を駆け巡る人間と、明日の生活もままならぬ人間とでは、グローバルな問題も違って見えてくることが多いだろう。かつてのローマクラブのように、食うに困らない人々が地球環境問題を論じても、食べるだけできゅうきゅうとしている人間にとっては説得力がなく、経済問題のほうがはるかに重要に感じられるのは当然と言える。そうしたギャップや多様性を喚起するのが、地球時代における「グローカルな視座」であり、それに基づく公共哲学（善き公正な社会を追究しつつ、現下の公共的問題を論考する実践哲学）が必要なのである。

ここで、かつての京都学派の哲学を振り返ってみよう。西田幾多郎の哲学の基軸は「場の論理」であり、田辺元の哲学の基軸は「種の論理」であった。西田の言う「場」はいままでplaceと英訳されることが多かったが、最近はダイナミックなニュアンスを持つlocusと英訳されることもあり、筆者はその訳に賛同する[2]。他方、西田の「場」の論理に飽き足らず、人間を媒介する社会制度を意味する「種」の論理logic of speciesを唱えた田辺は、国家主義に絡めとら

西田幾多郎（提供：石川県西田幾多郎記念哲学館）



田辺元

れた反省から、戦後は「懺悔道としての哲学」を唱え、それがphilosophy of metanoetics（回心の哲学）と英訳され、海外でも注目されるようになった。筆者は、こうした巨匠の知の遺産を、過去の骨董品にしてしまうのではなく、不安定なグローバル化時代のいま活かすためには、それを地球的な視野を持った「グローカルな公共哲学」、すなわち「各自が置かれた現場や地域に即しながら、地球的な公共的問題と取り組む実践哲学」へ転化させなければならないと思っている。

2　原子力政策とグローカル倫理

最近の日本で、倫理という言葉は「法令遵守」の意味で使われることが多い。しかしそもそも倫理という言葉の意味はもっと広いはずである。ちなみに、日本の大辞典では、倫理学が「社会的存在としての人間の間で共存の規範・原理を考究する学問」（『広辞苑』第六版）と定義されている。それに則り、グローカルな倫理学（以下、グローカル倫理と略記）を定義すれば、それは「地域や現場の特殊性に即しつつ、地球的な問題の広がりを持つ公共的な価値判断」という意味になるだろう。グローカル倫理は、そうした特殊な場が地球的倫理に関わることを明確にしながら、公共政策を考える指針を提供する。

グローカル倫理が今日扱うべきテーマは数多いが、今回は科学技術政策の焦眉の問題である「原子力（核エネルギー）問題」を取り上げよう。先に挙げた田辺元は晩年、原子力時代を「死の時代」とみなし、国際的原子力競争の矛盾を指摘しつつ、敵をも愛するような「人類実存協同の愛」のみが現状を打破しうると述べていた[3]。これは、近代啓蒙主義に立脚した戦後民主主義の旗手、南原繁や丸山真男には比較的乏しかった見識であり、とりわけ、福島第一原発事故以降の今日、ますます必要となったグローカル倫理の先駆けと言ってよい。

原発事故後に、「原爆がどんな結果をもたらすかを知り、世界の良心となって核兵器廃絶を呼びかけながら、どうして日本が原子力に投資し原発を建設してきたのか、疑問に感じました」（朝日新聞2011年5月13日付）と率直な疑問を投げかけたのは、福島原発事故後にメルケル首相が招集した「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」で大きな役割を演じた著名な（今は亡き）社会学者ウルリッヒ・ベックであった。彼の疑問は確かに当たっていよう。なぜなら、毎年8月に広島と長崎で開かれる記念式典は、原爆の恐ろしさを追憶し、核兵器廃絶の意志を示す「グローカルな式典」であるのに対し、戦後、「核（原子力）の平和利用Atoms for Peace」という名で推進された原発は、高木仁三郎など少数の例外を除き、原爆とは無関係と考えられることが多かったからである。しかし今では、双方の連続性にも焦点を合わせなければならない状況に突入している。その連続性の象徴は、原発が生み出す核廃棄物、とりわけ高速増殖炉「もんじゅ」の頓挫後に使い道が途絶え、今では長崎型原爆が数千発も作れるほど貯まったプルトニウムに代表される。日本がいつ核武装してもおかしくないと考える外国人がいるのみならず、脱原発は日本が核武装しないことを中国などに示すが故に反対と公言する政治家が出てくる所以である。

こういう状況の中で、筆者は、原子力政策を考えるためのグローカル倫理を提供する場として、大量の核廃棄物と核廃棄物の再処理工場が存在する「六ヶ所Rokkasho」を取り上げたい。その理由は、次の2つである。

1つは、六ヶ所に貯蔵された高レベル放射性廃棄物やプルトニウムをどう処分するのかという問題が、日本国民のみならず、「すべての原発保有国の市民や政府の倫理的決断」にかかわることを喚起させるからである。このイシューは、高速増殖炉スーパーフェニックスやフェニックスが挫折した原発大国フランスだけでなく、2022年にすべての原発の停止を決めたドイツにとってさえ未解決な地球的問題であり、その意味で六ヶ所は、フランスの再処理工場地ラ・アーグ、イギリスの再処理工場地セラフィールド、ドイツの中間貯蔵地ゴアレーベンとともに、グローカルな「将来世代に対する責任倫理」の場を提供している。

もう1つの理由は、六ヶ所問題は、「環境的正義」という新たな倫理的概念の導入なしには語り得ない点で

青森県上北郡六ヶ所村にある六カ所再処理工場。原子力発電所の使用済燃料を再処理し、ウラン燃料やMOX燃料の原料として使えるようにする[© 時事通信フォト/朝日航洋]

六ヶ所村
青森県下北半島の付け根部分の太平洋側に位置する

ある。環境的正義とは、「環境保全と社会的公正の両立」を目指す理念であり、それは当初、北米で貧困層やアフリカ系アメリカ人が住んでいる地域に有害廃棄物処理施設が集中していることに対する抗議や、マイノリティや貧困層などが不当に環境破壊の被害者となりやすい不公平を正す社会運動とともに起こった。そして、1991年に開かれた全米有色人種環境運動指導者サミットが「環境的正義」についての17項目を採択してから本格的に論じられ始め、1992年にリオで開かれた地球サミットを契機として、グローバルな形で考えられるようになった[4]。その意味で環境的正義は、北米の貧しい地域から起こったグローカル倫理と言ってよい。

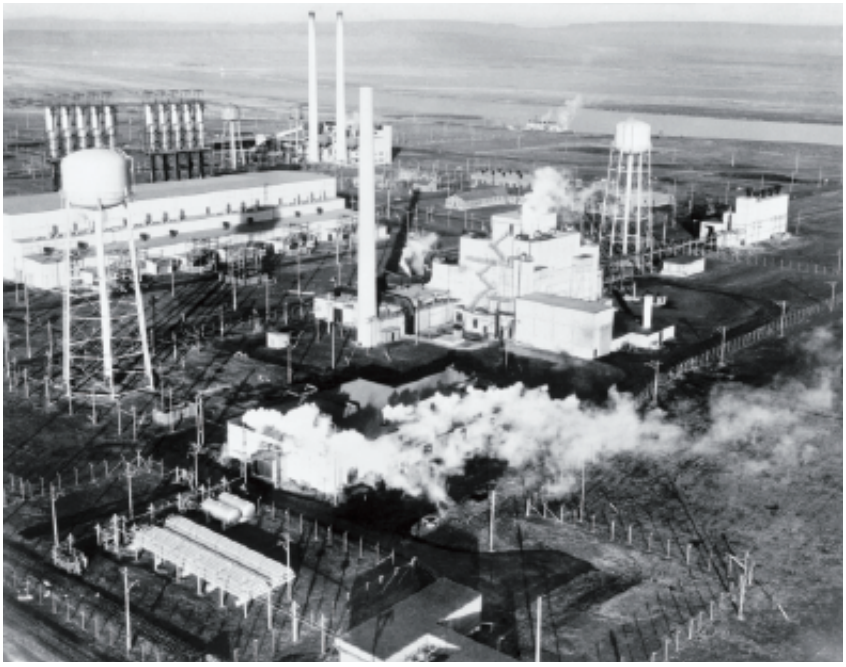
この環境的正義を六ヶ所問題にあてはめるとすれば、戦後の下北半島という地域の歴史が中央政府の上から目線による地方の翻弄の歴史であったという認識から始めなければならないだろう。中央政府と財界が青森県に空約束した「むつ小川原開発」の頓挫にはじまり、「原子力を恐れる者は、火を恐れる野獣の類」と放言した西堀栄三郎が率先して推し進めた「原子力船むつ」の無残な失敗を経て、六ヶ所村核廃棄物再処理工場誘致とその行き詰まりの主要な責任は、住民の貧しさにつけ込んだ中央政府とそれへの迎合者にある。したがって、環境保全を理由に原発関連施設を廃止して一切の補助金を打ち切るならば、昔の貧しい生活に舞い戻るという住民の不安をどのようにして取り除くかは、とりわけ脱原発を考える際の、環境的正義に基づく政策倫理的な課題のひとつである[5]。

3　原子力問題とグローカルな公共の記憶

さて、原発と並んで原子力問題を地球的規模で考える際に避けられないのは、核兵器（原爆、水爆など）の問題であろう。原発問題と原爆問題が異なることを主張する論者は多いし、1953年のアイゼンハウアー米国大統領の「原子力の平和利用 Atoms for Peace」という国連演説に後押しされつつ、1957年に発足したIAEA（国際原子力機関）は、一方で原発推進を容認しつつ、他方で核拡散防止条約を基に核兵器の縮減を目指すというダブルスタンダードをいまもって変えていない。しかし筆者は、原爆と原発は、同等視できないとはいえ、上述のプルトニウムや高レベル放射性廃棄物のように明らかな連続性も存在すると考えている。実際、核廃絶を目指すパグウォッシュ会議が、核廃棄物再処理を断念すべきという声明を出した[6]のは、その意味で理にかなっていよう。そしてその点で、六ヶ所と福島、そして広島、長崎には大いなる接点が存在すると言ってよい。

オバマ米大統領が最近訪れた原爆投下地の広島、そして長崎は「グローカルな公共の記憶の場」としての役割を世界に発信しているが、ようやく2015年、アメリカのマンハッタン計画の場となったロスアラモス、オークリッジ、ハンフォードなどの研究施設がアメリカの国立歴史公園になった。筆者は、これらが、アメリカというナショナルなレベルを超えた「グローカルな公共の記憶の場」となってほしいと強く望んでいる。マンハッタン計画は、戦時の科学技術政策が招いた出来事であり、科学技術のトランスナショナルな公共問題という根源的な問題をいまもってわれわれに突き付けているからである[7]。

広く知られるように、物理学者オッペンハイマーの指導のもと遂行されたマンハッタン計画は、ニュー・メキシコ州のロスアラモスを中枢とし、テネシー州オークリッジのウラン濃縮施設でベルギー領コンゴやカナダなどから運んだウラン238からウラン235を取り出し、さらにワシントン州のハンフォードで、物理化学者



プルトニウム239が製造されたワシントン州ハンフォードの核処理施設［©Everett Historical/Shutterstock.com］

マンハッタン計画に関連する主な施設

グレン・シーボークが発見したプルトニウム239を製造するという大規模な計画であった。自然界にごく稀にしか見出されないことを思えば、プルトニウムは人間によって創造された化学物質であり、さらに核燃料サイクルが破綻しつつある現在、核廃棄物としての使い道が原爆製造しか残されていないことを思えば、極めて処理が厄介な有害物質である。

思想史的に遡れば、技術を通して人間が自然に介入して自然の力を変容させ、それによって人々の福祉を実現することこそ、近代思想の論客フランシス・ベーコンの夢であった。確かに近代の科学技術の進歩は、一方で人々の福祉や便益を向上させた。このことを否定することは誰もできない。しかし他方、ベーコンからマルクス主義までみられる「技術の力による文明の進歩史」観は、20世紀の二度の大戦のみならず、21世紀の今日でも大量破壊兵器や原発問題によって大きく揺らいでいる。実際、技術進歩の約3割が武器などの軍備技術と結びついていることを思えば、それが全面的に人類の幸福を増したとは到底言えないはずである。

「広く社会一般に利害や正義を有する性質」（『広辞苑』第六版）という意味での公共性は、広島、長崎、ロスアラモス、オークリッジ、ハンフォード、六ヶ所などにおいてグローカルな性質を付与され、今後の地球倫理と国際公共政策にインパクトを与えなければならないと強く思う次第である。

注

1　Naoshi Yamawaki, *Glocal Public Philosophy: Toward Peaceful and Just Societies in the Age of Globalization*, Lit Verlag, 2016.

2　たとえば、Tanabe Hajime, *Philosophy as Metanoetics*, University of California Press, 1986に収められたJames W. Heisigの Foreword参照のこと。

3　田辺元「科学、哲学、宗教」『田辺元選集』筑摩書房、1975年、294-354頁。

4　アメリカ発の環境正義の由来に関しては、ASLE-Japan／文学・環境学会のサイト http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/環境正義-環境的正義-環境公正-環境的公正-environmental-justice/ を参照のこと。

5　このテーマに関して、筆者はすでに『公共哲学からの応答――3.11の衝撃の後で』筑摩書房、2011年、194-202頁で取り上げた。

6　共同通信の下記のサイト参照。 http://this.kiji.is/515792310818585 54?c=395467418394624 01

7　筆者はこのテーマを、山脇直司編『科学・技術と社会倫理――その統合的思考を探る』東京大学出版会、2015年、所収の拙稿「原子力時代における倫理概念の再構築」215-155頁で詳細に論じたので、関心ある方にご参照願えれば幸いである。

論考 ◎ 特集・公共政策

脳科学と公共政策――橋渡しのロールモデル

山川義徳（内閣府 ImPACT プログラムマネージャー）
Yoshinori YAMAKAWA

2000年京都大学大学院理学研究科修士課程修了。2000年より日本電気株式会社インターネット事業戦略室、経営企画部主任として新規事業開発に従事。2008年京都大学大学院人間・環境学研究科修了、博士（人間・環境学）。2008年より京都大学情報学研究科GCOE助教としてサービス・イノベーション及びニューロエコノミクスに関する研究・教育に従事。2010年よりNTTデータ経営研究所ニューロマネジメント室長として脳科学を用いた経営コンサルティングに従事。その他、京都大学経営管理大学院非常勤講師、神戸大学経済経営研究所リサーチフェロー。株式会社アラヤ・ブレイン・イメージング代表取締役を兼務。2014年より内閣府革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）プログラムマネージャー。

公共政策における脳科学

昨今の社会問題の多くは脳や心に関わることもあり、脳科学研究はそれらの解決に大きな期待がもたれている。一方で脳科学技術の成果を社会課題の解決に結びつけるには、一部の研究者や起業家のビジョンや行動力に頼るだけではなく、公共政策として4つの橋渡し機能の提供が必要と考えられる（図1）。

1つめは、科学技術政策の中心として、脳科学の基盤的知見を、応用を見据えた新技術へと橋渡しする学際研究である。脳科学はさまざまな学問と連携が進み、神経工学やニューロエコノミクスと呼ばれる新たな学問領域の創出や技術基盤の構築がなされつつある。

2つめは、新技術を個別具体な利用シーンの存在するサービスモデルへと橋渡しする民間企業との産学連携である。脳科学における産学連携としては、すでに脳と機械をつなぐブレイン・マシン・インターフェースを使ったニューロ・リハビリテーションなどが実現されている。

3つめは、個々のサービスモデルをより多様な技術の活用を可能とするプラットフォームへ橋渡しする国際協調である。たとえば、欧米を中心に、脳精神疾患の治療に向けたシミュレーション・プラットフォームの構築などが進められている。

以上の3つは科学技術政策の中に位置づけられる。

さらに4つめとして、科学技術政策を通じて実現された脳科学研究の成果を他の公共政策に展開し、社会生活に導入していく社会実装である。たとえば、脳科学に関する科学技術政策の成果を医療福祉政策に展開して医療費削減を目指したり、情報通信政策と合わせてより効果的な通信インフラを構築したりとさまざまな展開が見られる。

これらの点を踏まえ、本稿では、脳情報に関する内閣府革新的研究開発推進プログラム（Brain ImPACT プロ

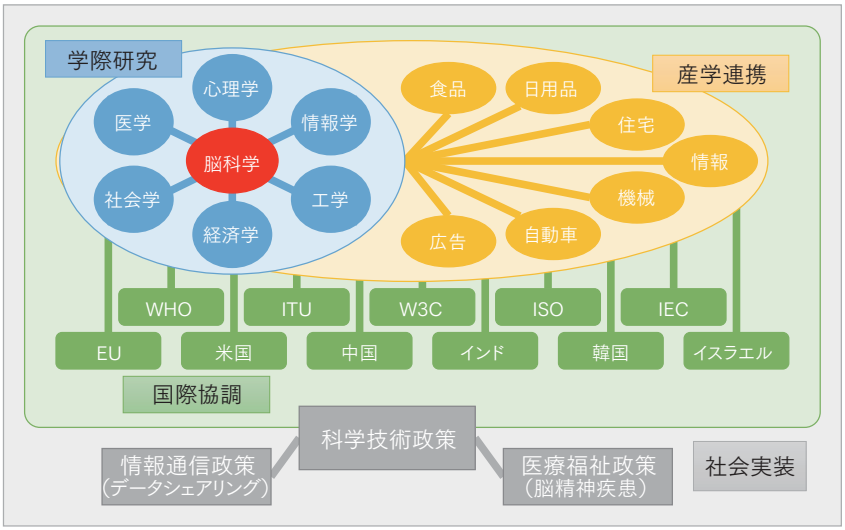


図1　公共政策から見た脳科学の橋渡し領域

図2　Brain ImPACTプログラムの全体像

グラム）で進めている脳科学の産業化に向けた取り組みを、4つの橋渡し機能に照らし合わせ、公共政策における1つのロールモデルとして紹介する。

Brain ImPACT プログラムの概要

社会の高齢化や経済の情報・サービス化が進む中で、手つかずの社会問題を鑑みると、その多くは脳や心に帰属している。このような背景から、日本の先駆的な企業は脳科学の活用を視野に入れているが、脳科学の活用には専門的な知識と莫大な研究費がかかることから、期待されるようなイノベーションはまだ生まれていない現状である。一方、日本の脳科学研究については、脳情報を用いたニューロフィードバック研究やデコーディング研究、ロボティクス研究が世界的にも評価されている。ただし、一部の研究者の取り組みにとどまっており、組織的な活動には広がっていないことに加え、産業化に向けての取り組みも限定的である。すでに欧米などでは、脳科学を用いた産業化、中でも医療分野での創薬や治療に向けての研究開発が進められている。

このような背景を受け、本プログラムでは、欧米とは異なる非医療分野での脳科学の応用から社会問題を解決する脳情報産業の創出を目標として、健康や教育、情報サービスなど民生分野で脳情報を活用するモデルケースの公開を進めるとともに、それらを支える脳情報のイノベーションエコシステムの構築を目指している（図2）。

サイエンスをテクノロジーへ進展させる学際研究

Brain ImPACT プログラムを進めるにあたって、最初に取り組んでいることは、脳科学研究の成果原理を、実用を見据えた精度を持つテクノロジーへと進展させることである。本プログラムの基盤となる脳科学研究の知見は、MRIなど高性能な機器で計測される脳の活動パターンを本人に伝え精神疾患治療に活用するニューロフィードバックと呼ばれるものである。本プログラムでは、誰もが自由に脳の状態を情報として扱うことができる社会の実現という目的を掲げ、科学研究で得られた知見の技術化に向け、携帯性、可視化性能、制御性能の3つの技術目標の達成に向けた学際研究（携帯型ブレイン・マシン・インターフェース〔以下、携帯型BMI〕、脳ビッグデータ、脳ロボティクス）を進めている。

携帯型BMIでは、MRIでしか実現できなかった脳情報の可視化と制御を、誰もが使える高性能小型にすることを目指している。このために、脳科学と計算機科学を融合し、MRIで計測される脳活動を簡易な脳計測機器であっても推定可能にすることを進めている。この際には、MRIと簡易脳計測機器を同時に計測し、計算機科学で研究が進んできた機械学習のアルゴリズムを脳情報に応用する。これにより、簡易な機器で計測される少ない脳情報からMRIで計測されるより多くの脳情報も予測可能になる。

さらに、脳ビッグデータ研究では、精神疾患の診断用のバイオマーカーにとどまらず、気分の落ち込みや不安、安心、快適など多様な心理状態の見える化を進めている。そのため、情報科学で研究が進んだビッ

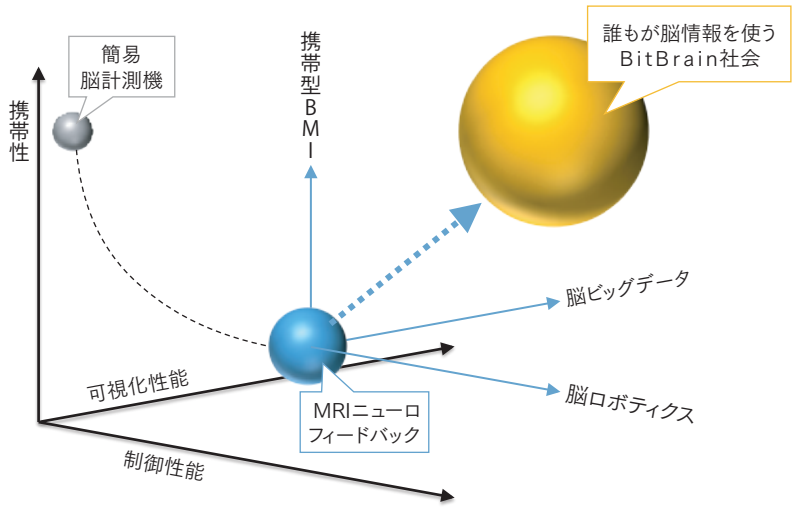


図3　BitBrain社会へ向けた3つの学際研究の位置づけ

グデータ処理を応用し、一人の実験協力者に対して、従来の10倍以上の実験刺激を処理することで、個人個人の脳活動の違いや個人がどのような心理状態であるかまで分析可能になる。

また、脳ロボティクス研究では、従来は精神疾患患者を対象に視覚的な手法が用いられていたニューロフィードバックを発展させ、一般の人に対して身体的なフィードバックを試みている。このため、ロボット工学で研究されてきた、人に最適なインターフェースとしてのアンドロイドを応用し、より日常生活の中での身体的な手法を通じてニューロフィードバックを実装することを進めている。

このような目的志向的な学際研究の中で、脳科学の成果を社会に役に立つ技術へ進展させ、BitBrain社会とも呼べる脳情報を誰もが自由に使える社会の実現が可能になると考えている（図3）。

テクノロジーをサービスモデルへつなげる産学連携

脳科学と他の研究分野の融合を通じて生まれた新たな技術は、BitBrain社会に向けてさまざまな可能性を持っている一方で、具体的な利用のモデルを有しているわけではない。このため、本プログラムでは、技術の活用領域として健康サービス、教育サービス、情報サービスの3つを想定してきた。脳情報という技術特性と出口領域の課題を照らし合わせ、健康サービスではいつまでも働ける脳、教育サービスでは暗黙知の共有、情報サービスでは新たな能力の獲得を初期のサービスイメージとした。これらは、多様な業種の民間企業が関与していることから、サービスイメージを具体的な利用モデルに昇華させるため、食品・飲料、電気、情報、住宅、広告など多様な企業と対話を重ねた。その結果、健康サービスを優先領域と定め、脳の健康サービス開発を支えるため、業種を問わず共通した脳の健康指標を策定していくに至った。

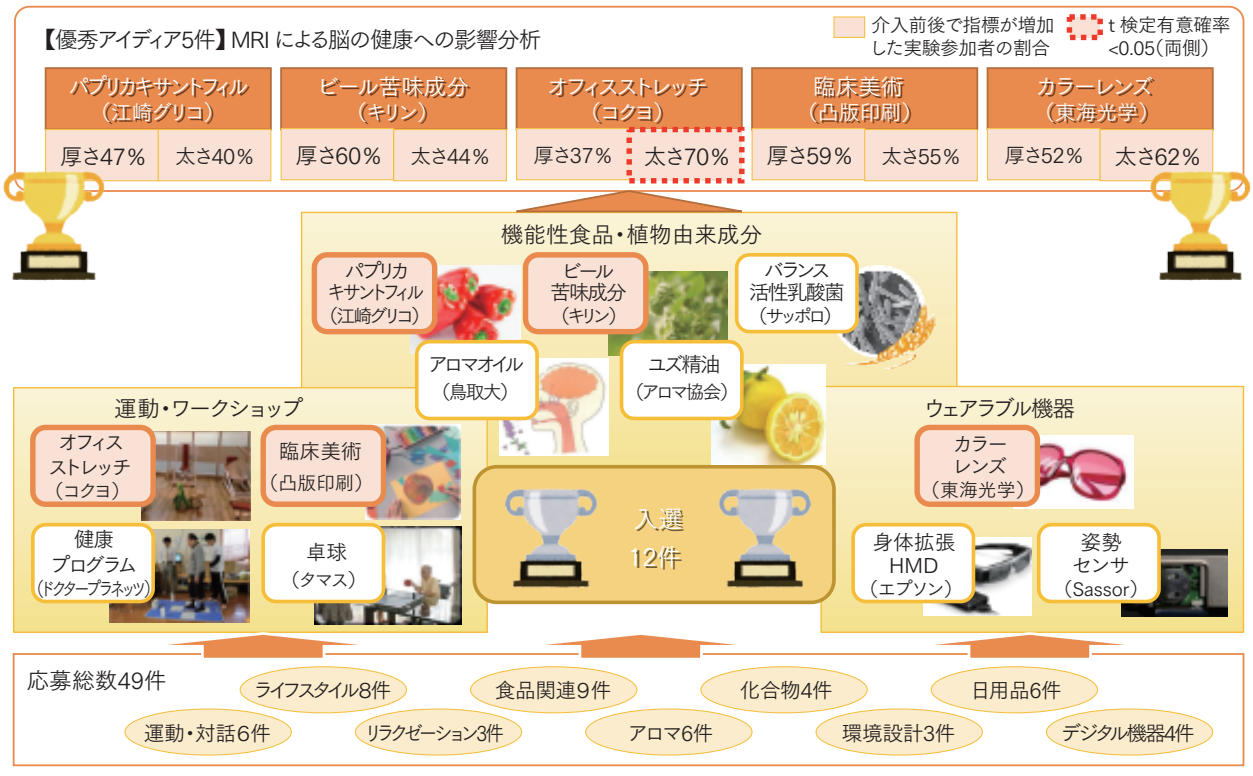


図4　Brain Healthcareチャレンジによる産学連携

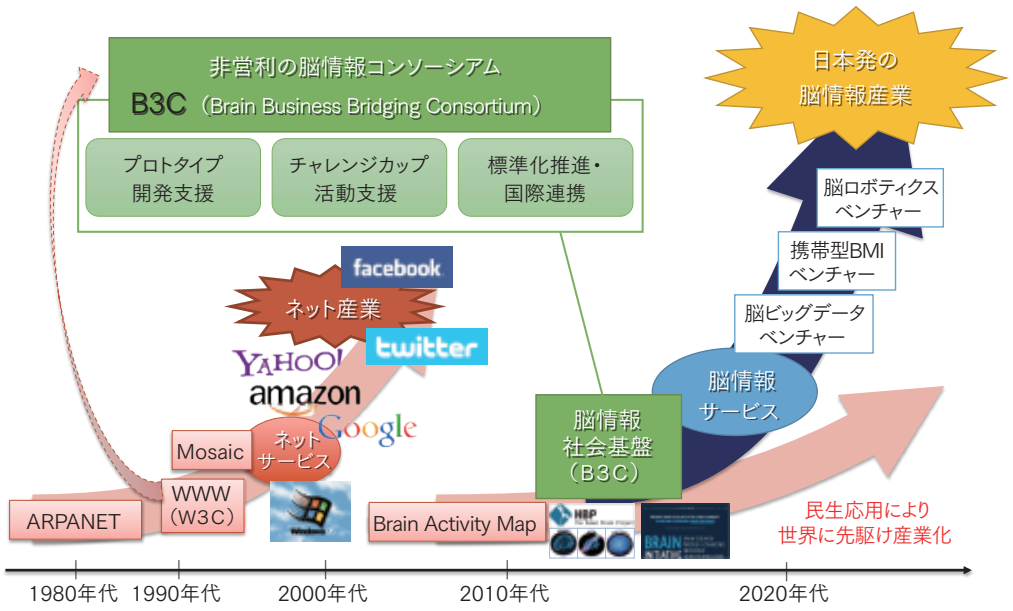


図5　脳情報産業創出に向けた国際標準化の位置づけ

脳の健康指標としては、MRIによる脳計測を用いて、脳の灰白質の厚みから求める脳の構造的萎縮度と、白質の線維の太さから導かれる脳のネットワークの健全度の2つをBHQ（Brain Healthcare Qutients）と規定した。これらのBHQを研究開発へ利用するに先立って、有効性と社会的なニーズを調べる取り組みとして、脳の健康に寄与すると考えられる民間企業の取り組みをオープンに発掘するBrain Healthcare チャレンジを実施している。これによって、たとえばダイエット効果を目的とした運動が認知機能を向上させたり、睡眠環境に配慮した住宅リフォームが社会性を向上させたりする可能性が発見され、脳の健康という観点から商材の価値を再定義することが可能となると考えている。すでに、多様な領域からの応募があり、コンセプトとしての独創性と、過去の脳科学の知見からの可能性の観点から入選作として12件選定した。現在、その中から5件選び、理化学研究所、京都大学、東京大学の協力を得て、1カ月ほどの実証トライアルを実施した。結果、ストレッチによって、神経線維が有意に太くなることが明らかになった。（図4）。この取り組みによって、現在進めている新しい技術を評価する軸を検証できるだけでなく、すでに存在している商材を評価することで、市場で受け入れる土壌を形成できると考えている。

従来の産学連携では、大学等での研究シーズを企業に渡すという一方向のものが多かったが、本プログラムでは、脳情報という融合技術の汎用性と可能性を踏まえ、企業が有する経験も活用し開かれた多面的な連携を通じて、技術を具体的な利用者の見えるサービスモデルへつなげる取り組みを進めている。

サービスモデルをプラットフォームへと展開する国際協調

産学連携の取り組みを加速させていく上では、測定・解析などに専門性を求められる脳情報を、企業や異分野の研究者にとっても簡易に活用できるためのインフラが求められる。そのため本プログラムでは、前述した異業種の民間企業からなるコンソーシアムを起点に、脳情報をより多くの人が活用できるためのプラットフォーム作りと、そのプラットフォームが日本だけに閉じないように国際標準化を進めている。

標準化活動として、国際連合の専門機関である国際電気通信連合の一部門であるITU-TのStudyGroup16が、近年WHOと連携してeHealthに関する標準化を進めており、その枠組みに対して脳の健康という位置づけで提案を進めている。標準化の対象領域については、より多くの企業や研究者、さらには生活者が安心して自由に脳情報を活用するため、インターネットの黎明期における標準化内容を参考に、脳情報へのアクセス管理、脳情報の交換プロトコル、脳情報の閲覧および編集の3つを選定した。これらの機能については、すでに、2015年10月に行われた会議にてITU-T SG16の正式なワークアイテムとして承認されており、現在、脳情報を共有・活用する際の公式文書としての発表準備を進めている。加えて、今後は、電子機器の標準化を行うIECや評価の標準化を行うISOなどの国際標準化機関や、それらを通じたさまざまな国々での実証などの連携も進める。

欧米を中心に脳科学研究が加速している状況を鑑みると、今後10年程度でそれらの研究成果が世界的に展開され、国際競争が展開されることが想定される。その中で、日本の取り組みがガラパゴス化し取り残されることがないように、研究開発の初期の段階からも国際標準化機関やそれを通じた諸国との連携を進めることで、脳情報の活用を促進するプラットフォームの構築を進めている。これらの取り組みが、ひいては日本の研究や企業の競争優位を保ち、日本発の脳情報産業を興す基盤になると考えている（図5）。

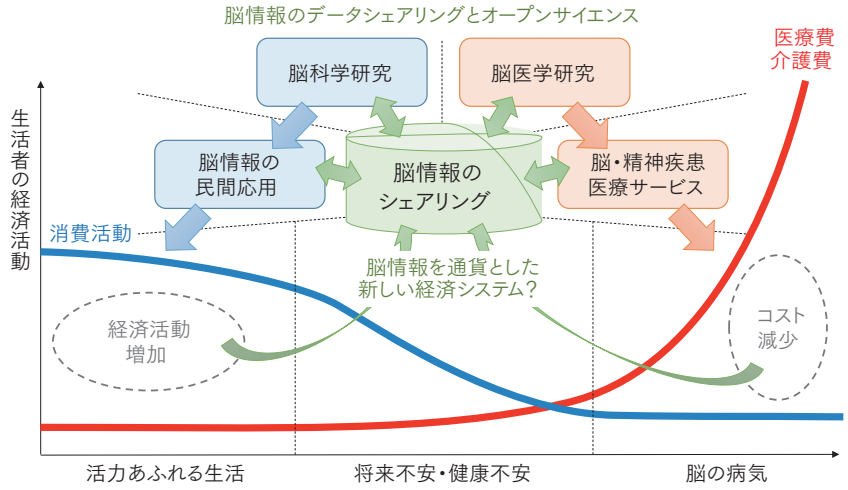


図6　脳情報のシェアリングを通じた新産業創出

プラットフォームをエコシステムへと醸成させる社会実装

科学技術政策を通じて新たな公共サービスやビジネスが社会に展開されていくためには、標準化されたプラットフォームを実際にさまざまな利用者を引き付けるものへと醸成させることが重要になる。そのため、現在進めている脳科学の研究開発についても、科学技術政策に留まらず医療や経済などの幅広い政策の扱う社会課題と連携することで、プラットフォームが異分野の研究者や起業家、さらには生活者を引き付け、数多くの新しいイノベーションを生む脳情報産業の生態系（エコシステム）へと醸成されると考えている。

これらの取り組みを進める上で、本プログラムでは科学技術政策と情報通信政策の交点となるオープンサイエンスやデータシェアリングを基に脳情報のシェアリングという新たな取り組みを推進している。脳情報のデータシェアリングを進めることで、医療福祉政策に対しては、脳精神疾患の医療費を抑制する新たなサービスの創出、情報通信政策に対しては、国際競争が激しさを増すAIやIoTについて脳の健康という付加価値をもたらす脳情報インフラの提供、といった政策をまたいだ連携による社会実装も考えられる。

このような政策的な連携は科学技術政策の社会実装を進める上で有力な青写真となるが、実際に進めることは非常に困難でもある。しかし、日本には世界でもまれな検診システムである脳ドックが存在し、年間数十万人の健康な人の脳情報が蓄積される環境がすでに整備されていることから、それらのインフラを用いることで脳情報のデータシェアリングを通じた政策連携も実現できるのではないかと考えている。すでにこれらのインフラが整備されている点は欧米の取り組みに対する競争優位になると考えられ、本プログラムでも脳ドック学会との実証取り組みを進めている。まだ仮説段階ではあるが、このような取り組みを進めることで、科学技術政策で対象としたイノベーションエコシステムを政策連携によって新産業を創出する社会インフラとして実装させることができないかと考えている（図6）。

まとめ

本稿では、脳情報に関する学際研究から産学連携、国際協調、社会実装と4つの橋渡しの取り組みについて、現在の取り組みを事例として紹介した。学際研究については、これまでの多くがさまざまな可能性を模索することが目的となり出口に向かわないことが多かったといえる。このような中でも出口を設定し、そのための連携を進めることが重要になると考えられる。産学連携については、逆に目先の目的に囚われてしまうことが多く、結果として産学連携をしなくても民間だけでできるようなことに陥りがちである。このときにこそ、開放的な精神の中で多面的な可能性を探索する必要があると考えられる。一方、社会に展開していく上で、国際協調には関係機関との網羅的な取り組みが、社会実装では目標を絞った選択的な取り組みが求められる。このように橋渡しにはさまざまなアプローチが必要であり、かつそれぞれが段階的に行われるだけではなく、同時並行的にも進むことから、非常に難しいものであるといえる（図7）。今回紹介した脳科学と公共政策の橋渡しが、できればロールモデルとして、さもなければ反面教師としてでも、参考になれば幸いである。

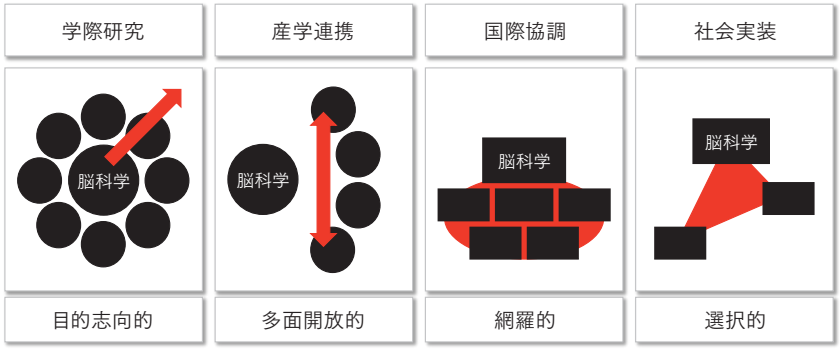


図7　橋渡しの4つのモデル

人生は平等じゃないが、こころは出会い、羽ばたく
——釜ヶ崎芸術大学・ココルームの日々と、友達になること

上田假奈代（詩人、NPO 法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表理事）
Kanayo UEDA

（写真　鈴木育郎）

1969年生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。1992年から詩のワークショップを手がける。2001年「詩業家宣言」を行い、さまざまなワークショップメソッドを開発し、全国で活動。2003年ココルームをたちあげ、「表現と自律と仕事と社会」をテーマに社会と表現の関わりをさぐる。2008年から西成区（通称・釜ヶ崎）で喫茶店のふりをしている。「ヨコハマトリエンナーレ2014」に釜ヶ崎芸術大学として参加。NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表。大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞。　www.cocoroom.org

地図にない街・釜ヶ崎

「釜ヶ崎はどこですか？」とよく聞かれる。「人によって違うようですよ、イメージなんですね」と答える。地図にはない。わたしは、釜ヶ崎とは状況なんじゃないかと思う。偏見にまみれ、不平等の人生を生きて、死んでいく街。日本に釜ヶ崎が増えてきたように思う。ちなみに「あいりん」も地図にはないが、それを指す簡易宿泊所街は0.62㎢の範囲である。人口は25,000人。人口密度、結核の多さ、寿命の短さなど、さまざまな日本一の記録を持つ。

現在の釜ヶ崎の地域としての性質を決めたものとして、1960年代からの「暴動」に対処するために採られた「あいりん対策」があげられよう。対策は家族を形成している労働者には釜ヶ崎からの分散化が行われ、単身男性の日雇労働者に対しては、逆に釜ヶ崎への流入を促進させた。労働力不足を補うための政策でもあったのだ。この政策の帰結として、釜ヶ崎は1950年代とはまったく異なる地域へと変容する。それまでは、女性や家族、子どもなど、多様な人々が、貧困のなかで集住し共存していた。「対策」を経た1970年代において、釜ヶ崎の人口のほとんどは男性の単身日雇労働者によって占められるようになった。

そして、1990年代、釜ヶ崎において日雇労働市場が縮小し、高齢化した日雇労働者が野宿生活を余儀なくされ、2000年頃から生活保護受給者となる人も増えたが、多くは家族をもたない単身者であるため孤住の傾向にある。

釜ヶ崎の地域内においては、コミュニティとしての統一性は阻まれ、むしろ分断されるという状態が再生産され続けた。1960年代以降、暴動

写真１　窓１つが１部屋。３畳一間のドヤ街。

写真2　今はないフェスティバルゲート。

写真3　フェスゲ時代のココルーム。舞台とカフェがあり、最大100人程収容できた。

の多発からメディアによって「釜ヶ崎」「西成」という地名にマイナスのイメージが付与され、地域全体が被差別状況に陥っていた。

その後も、2002年ホームレス自立支援法、2010年代の西成特区構想、高齢化、バックパッカーの宿泊増、中国人のカラオケ居酒屋の急増など、街は目まぐるしく変化している。

喫茶店のふりをしているアートNPOココルーム

ココルームは、浪速区にあるフェスティバルゲート（フェスゲ）という娯楽ビルの空き店舗を活用した大阪市の現代芸術拠点形成事業「新世界アーツパーク事業」に参画したことに端を発する。誘いを受けたわたしは「生きる現代文学」をしたいと願い、2003年4月に元中華料理屋に入居。翌年NPO法人化した。詩人として仕事を作りたかった。どうすればいいかはわからないから、走りながら考えることにした。そんな利己的な思いから始めたが、家賃水光熱費を行政が負担する公設地民営という変わった仕組みの中で、公共性について考える羽目になった。そこで、いろんな人に使ってもらえる場にすることで公共性を高めようと考えた。人件費も事業費もないから、カフェとライブや芝居のできる舞台を作り、毎日オープンすることを目指した。アート活動を生業としたい若者たちを仲間に迎え、毎日まかないご飯をスタッフとお客さんと食べた。少ないお給料で生きてゆくための工夫だった。そして、ご飯を一緒に食べたりする中で、いろんな人の話——悩み事やつぶやきを聞くことになり、それが事業のヒントになった。就労支援カフェや障害を持つ人との舞台活動などもおしゃべりの中から生まれた事業だ。こうした他分野に踏み込んだり、協働することはとても勉強になった。制度や仕組みが違うこともあり、共通言語がないこともある。そんな中で揺れながら、小さなパッチワークを編んでゆくことは、自分自身の弱さや情けなさを認め、ゆるしてゆくような、ほどけていくような感覚があった。

隣町は釜ヶ崎だった。20メートルほどしか離れていなかったが、人々がタブー視しているのはすぐにわかったし、そしてほんとうに行く用事がなかった。けれど、釜ヶ崎も変わり目を迎えていたようで、活動する人たちがココルームカフェをよく使ってくれるようになり、釜ヶ崎に関心を持ち、行き来が始まった。生活保護を受けながら紙芝居劇をするグループ、野宿しながら表現活動に関心を持つ人々のマネジメントも手伝った。ここでも、住まいやお金のない人たちとどのような関係を取り結ぶのか、悩みは尽きなかった。何かの制度を活用した事業でもなく、専門家でもないから、ただ出会った人としての振る舞いをするから、こうなるのだが。自分たちのことを「素人のプロ」と呼びながら、「多様性を大事に、と世間では言うけど、ほんまに多様を大事にするのは大変やな」と一人ごち、さまざまなトラブルに目を丸くし、悩む。それは今も変わらない。

そして、私が関心を持ったのは、釜ヶ崎の歴史と社会との関係、そしてこの街で生きてきた人たちのことばが次の社会への視座になるのではないかという直感だった。そして、それを思いついた時に、「ことばを聴く」とはどういうことか、と考え込んでしまった。質問すれば答えてもらえるものではないし、そもそも聞いてどうするのか。そう思うと躊躇してしまうのだが、でも聴きたい気持ちもまた正直なのだ。ココルームがカフェで聞いたことから事業を考えるという姿勢も聴くことから始まっている。また、わたしは詩作の手法を編み出し、ワークショップでも

写真４　ヨコハマトリエンナーレ2014で展示の前で集合した。

展開した。「こころのたねとして」と名づけた手法は2人1組のペアを作り、お互いに数分間取材をして聴いたことから詩を作るというものだ。

やがて2005年あたりから、大阪市の文化政策の迷走が始まり、2007年に新世界アーツパーク事業は検証もされず終了する。その間、政策や自治、文化政策、仕組みなどについて学び、個人の営みと社会の関わりについても考えるようになった。

釜ヶ崎で表現について学んだこと

2008年1月にココルームは釜ヶ崎の端っこにある動物園前商店街で喫茶店を開いた。釜ヶ崎にはNPOや諸活動はたくさんあるが、アート系がなかったので、もしかしたらできることがあるかも、という思いからだ。今度は、元スナックでカウンター6席と四畳半の畳の小上がりがある小さな空間。スタッフは全員退職し、新しいスタートとなった。やって来る人も変わった。多様性はさらに複雑になり、生きてるって奇跡なんだなあと思い、さらに「日々劇場」のような毎日となった。とびきりミラクルな瞬間も出会いもあれば、暴力、警察沙汰もある。

オープンの初日から毎日来るAさんというおじいさんがいる。1日に5、6回来ては、何も注文せず騒ぐ、店内にいるおとなしい人に絡む。毎日トラブル続きで、スタッフも堪りかねて「出入り禁止にしてほしい」と言うほど。なんとかスタッフには収めてもらう。わたしは店内で行っているワークショップに誘うが、「わしはいらん！」。1年半経った頃、「手紙を書く会」に、断られると思いながらも「Aさん、やってみーひん？」と誘うと「やる」と返事。わたしの横に座り、鉛筆を舐めながら書き始めた。やがて手が止まりひらがなの字の書き方を聞かれた。Aさんが字を書けなかったということにわたしは気づく。口が達者だったので、想像が及んでいなかった。手紙の宛先は赤ちゃんの頃から育った福祉施設の施設長さん。そのことも聞いたことはなかった。Aさんの気持ちを思うとこれまでワークショップを断ってきたのはよく分かる。自分が字を書けないことなんてバレてほしくない。でも、この場では字が書けないことが分かっても、誰も馬鹿にしないし、笑ったりもしないと、彼がそう思うまで問われつづけていた。表現が大事だと言ってきたけれど、表現の前に大切なことをAさんに教わった。そこにいる人が、自分の存在をみんなが認めてくれていると、心から思える場を作れているか、そういう他者として生きているか、ということ。

この手紙の会のあたりからAさんは変わった。これまで言えなかった「ありがとう」と「ごめんなさい」を言うようになった。やがて、ココルームでお金を払ってご飯を食べるようになり、すぐに感情的になり暴力を振るうのだが、前より少しは冷静を取り戻すのが早くなった。疑りぶかくてヘルパーがお金を盗むと言って何度もヘルパーをすぐクビにするのに、ココルームにお金を預けるようになった、など。しかし、この話が評価の対象になることにも違和感がある。Aさんとは今でも本気で喧嘩をするし、いい人になってもらいたくて、関わってきたのではないからだ。関係性の中にあることを評価の対象にはできない。なので、Aさ

んにはAさんならではの表現をしてもらって、わたしたちを笑わせてもらいたいと思っている。

商店街からまちの中へ

2008年の秋にリーマンショックがあり、年末年始に東京で年越し派遣村があった。その年から日本全体が釜ヶ崎化したと思う。そう見ると、日本のほうは個人が分断され、釜ヶ崎のほうはさまざまな知恵を集積しているように思えた。いろんな相談窓口、炊き出し、夜回り、シェルター、おせっかいな人たちも多い。この知恵を世間にもつなぎたいと思い、ささやかな窓口としての釜ヶ崎メディアセンターを作ろうと思った。助成金の採択も決まり、向かいの物件を借りることもできた。オープン2週間前に商店街の会長から「看板に『釜ヶ崎』を使うのをやめてほしい」と言われた。複雑な地域の事情が見える。わたしは地域と外をつなごうと考えていたが、さらに地域内の出会いなおしの場になることを願って「カマン！メディアセンター」と名づけた。商店街の中でココルームとカマン！は向かい合って、扉を開けて「日々劇場」を繰り広げていたが、2010年頃から商店街を歩く人が減った。高齢化だ。

待っていても仕方がないと思い、2つの事業に挑戦した。1つは地域内にある45室のマンションの管理業務。ほとんどが生活保護受給者で孤住だ。2年間携わったが、本当に大変だった。孤独死に数週間気づかなかったこともあった。もう1つは地域内の社会福祉法人に協力いただき、施設を会場にして月1回の表現ワークショップを9カ月連続で行うというもの。扉の向こうに野宿者の蒲団が敷いてあるような場所での実施だった。この時、断酒を始めたばかりのアルコール依存のおじさんが毎回参加し、「酒は抗酒剤でやめるんやない。生きてるんが楽しいと思わんと」と言った。そして「月1回というのが、とても長い。死んでるかもしれん」と言ったそうだ。この台詞を聞いたスタッフが、講座を生活のリズムになるように開催し、地域内の幾つかの施設を会場とすることでおじさんたちが行きやすい「釜ヶ崎芸術大学」（釜芸）というプロジェクトを思いついた。初年度は40講座を開催し、3年後に講座数は倍になり、「ヨコハマトリエンナーレ2014」（ヨコトリ）に参加することになった。

写真5　TAKIDASHIカフェ。みなとみらいにブルーシートの炊き出し小屋出現！

自分のことばで表すこと、旅する釜ヶ崎芸術大学

ヨコトリでは、出張講座を開いた。TAKIDASHIカフェでは2日間で1,100食を配食。日本の三大寄せ場のひとつ・コトブキにも声をかけ、普段は美術館には行かないような人たちと美術館の関係者たちがブルーシートのテントの中で食事をした。後にメールが届いた。釜芸の展示室の監視担当の方からだった。この日は休みを取って参加してくれたそうだ。美術館では日頃、働く部署が違うとなかなか話すこともない。清掃や警備担当の方や館長が一緒にカレーライスを食べている風景は釜芸の出会い直しに重なった、というものだった。

ヨコトリに参加してから、メディアの注目が高まった。その頃、わたしはなんだか浮かない顔をしていた。ばっくりとイメージづけられることへの違和感だった。そして、翌年ヨコトリのディレクターであり、釜芸の芸術の講師である森村泰昌さんと話をして「自分のことばで美を語る、釜ヶ崎から美を語る」という大学院美学学会を立ち上げることにした。研究会を開き、遠出をして講演会や展覧会などに行くことにした。釜ヶ崎から出て、おじさんたちと旅しようと考えた。おじさんたちはお金もあまり持ってないし、体調もすぐれないから、無茶ではあるのだけれど、旅するとおじさんたちは背筋が伸びるし、受け入れてくださった方たちも出会いが刺激になるようだし、わたしたちもおじさんたちと時間を過ごし、優しさに触れるのだった。友達のように。その後なんとかして、八戸、鳥取、吉野など、わたしたちは旅した。

幸せってなんだろうと思う。家族を捨て、あるいは捨てられ、仕事もなく、お金もなく、あてもなく生き、蔑まれ、墓もない。人生は不平等だと言う。旅の終着点はどこだろう。あの空なら、結構。空（くう）なら、なお良し。友達にそっと、小さなこころのたねを渡してくれる。

研究プロジェクト一覧（平成 26 年度）

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
からだ	身体疾患・症状に関する心理療法の研究	河合俊雄
	遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明	船橋新太郎
	対人相互作用に関わる認知・感情機能	吉川左紀子
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
	連携 MRI 研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
	環境要因が潜在的認知に及ぼす影響	上田祥行
きずな	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	地域の幸福プロジェクト（上廣こころ学部門　幸福感の総合研究）	内田由紀子
	組織文化とこころのあり方：日本における企業調査	内田由紀子
生き方	こころ観の研究	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究 —— 伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に	鎌田東二
	生態智の拠点としての聖地文化 —— こころ・場所・癒しの研究	鎌田東二
	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	子どもの発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	終末期に対する早期支援	カール・ベッカー
	出生をめぐる医療と倫理	カール・ベッカー
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	科学と思想・哲学との対話を通じたこころ観の再構築	熊谷誠慈
	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
	国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈
	孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究―京町家「くらしの学び庵」プロジェクト―	清家　理
	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家　理
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
身体と象徴：かたちとちから　ー力のでる形―	木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）
高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	積山薫（熊本大学文学部教授）
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究 III	大西宏志（京都造形芸術大学教授）
心理療法場面に見られる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	前川美行（東洋英和女学院大学准教授）
子どもの発達障害と作業療法	長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）
自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは：市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて	伊勢 武史（京都大学フィールド科学教育研究センター准教授）
甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	長谷川千紘（京都文教大学講師）

研究プロジェクト

身体疾患・症状に関する心理療法の研究

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

■研究目的

近年は、いわゆる心身症疾患だけでなく、小児科や産婦人科、ターミナルケア、遺伝子診療など、さまざまな医療分野において、患者の「こころ」に目を向けることの大切さが浸透しつつある。しかし、身体疾患治療における臨床心理学的アプローチは、疾患受容を目指した心理教育やストレスケアなどの一面的・限定的・操作的な方法が中心で、人間全存在への配慮と関心をもって語りに耳を傾けるという心理療法本来の姿勢とは遠く隔たったものが多いというのが現状である。

一方で、これまで報告されてきた身体疾患を抱えたクライエントとの心理療法実践のなかには、そうした症状やストレスへの対処にとどまらず、きわめて個別的で意義深い物語が展開されるものも少なくない。特に箱庭や夢などのイメージを用いた心理療法は、身体も含めた「こころ」の変容プロセスにおいて重要な役割を担いうることが示唆されている。こうした身体疾患・身体症状への、本来的な意味での心理療法の可能性を追究することは、よりよい援助体制を構築する上で重要なことだと思われる。

そこで、これまでに当センターで行ってきた一連の甲状腺疾患研究プロジェクトをさらに発展させ、甲状腺疾患だけでなく身体疾患一般や広い意味での身体症状に対する、従来の限定された役割にとどまらない心理療法的アプローチの有効性と可能性を模索するために、本プロジェクトは立ち上げられた。

■平成26年度の研究成果

1.事例検討会による臨床の知の集積

平成26年度は、医療現場において身体疾患へのすぐれた心理臨床実践を行っている、以下の4名の専門家を招いて事例検討会を開催し、1つ1つの事例の精緻な検討を積み重ねることで、臨床の知の集積をはかった。

第1回：坂井朋子（真生会富山病院心療内科、臨床心理士）
第2回：河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）
第3回：城谷仁美（城谷医院、心理士）
第4回：田中雄大（伊達赤十字病院、心理判定員）

こうした累積的事例研究により、（1）医療現場における心理療法の特徴、（2）身体疾患患者の語りやイメージの特徴、（3）心理療法実践におけるポイントを明らかにした。

第1回研究会：坂井朋子

第2回研究会：河合俊雄

第3回研究会：城谷仁美

第4回研究会：田中雄大

2.思春期男子の身体化に関する研究

特に思春期の年代においては身体を通じて問題が表現されることが多く、心理療法を行っていく上で彼らの示す身体症状に注目することは非常に重要である。さらに、言葉や身体との関わりという観点から、男子は女子に比して主体の確立が困難な状況にあることから、「こころ」が受け止められない事態を受け止めるための方途として身体化という形をとりやすい。こうした考えから、アトピーや喘息などの身体症状をきっかけに来談した思春期男子との心理療法事例をもとにして、彼らとの面接で何が問題となり、何がポイントとなるのかを検討した。

その検討から、彼らの身体化の背景には、主体の確立の問題が存在していることを指摘し、彼らとの心理療法においては、いかに主体の確立がなされるかが重要であるという治療的着眼点を見出した。そして、事例研究を通じて、身体化を示す思春期男子の心理療法の特徴を描き出すとともに、心理療法的接近を試みる上でどのような注意や工夫が必要となるかを明らかにした。この研究は、日本箱庭療法学会の会員による優れた論考を公刊していくシリーズ、「箱庭療法学モノグラフ」の第1弾として出版された（梅村高太郎『思春期男子の心理療法――身体化と主体の確立』創元社，2014年）。

梅村高太郎『思春期男子の心理療法 ―― 身体化と主体の確立』

■今後の展開

次年度は、引き続き事例検討会を開催してさらなる知見の集積と洗練をはかることで、身体疾患の心理療法についての新たな理論を構築することを試みる。加えて、事例検討から見えてきた身体化傾向をもつ者の心理的特徴を実証的に確認するために、身体化傾向を測る質問紙と描画課題（家屋画・室内画）を用いた調査を実施し、身体化傾向をもつ者の特徴を実証的にも明らかにしていきたいと考えている。

研究プロジェクト

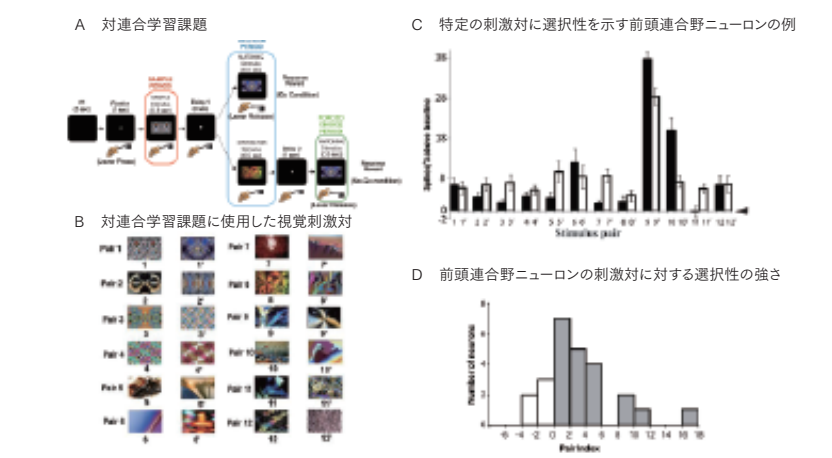
遂行機能の実行に関わる前頭葉ネットワークの解明

船橋新太郎（京都大学こころの未来研究センター教授、現京都大学名誉教授）

■研究の目的

前頭連合野が、頭頂連合野、側頭連合野などの大脳皮質の後部連合野、大脳辺縁系、大脳基底核や脳幹などで行われている情報処理過程を、遠心性の出力により制御していることはよく知られており、前頭連合野のこのような機能は「遂行機能」と総称されている。前頭連合野による遂行機能の理解には、前頭連合野で生成され、他の領野に伝達されてそこでの情報処理を制御するトップ・ダウン制御信号が重要な手がかりとなるが、トップ・ダウン信号の実態やその機能は明らかではない。

長期記憶に貯蔵されている情報の再生（再活性）には、前頭連合野の賦活が必要であり、前頭連合野から側頭連合野に送られるトップ・ダウン信号が重要な役割を演じていることが知られている。Miyashitaらの先行研究により、視覚刺激を用いた対連合学習課題を行っているサルの下側頭連合野で、特定の刺激対に対して選択的な応答を示す「対符号化ニューロン」、および、特定の見本刺激が提示されると、その後の遅延期に活動が漸増し、対となる刺激を想起していると思われる「対想起ニューロン」が観察されている。さらに彼らは、脳梁を切断したサルを用いて、これらのニューロンの活動が前頭連合野から発せられるトップ・ダウン信号によって調節されていることを明らかにした。しかし、このような対連合学習課題において前頭連合野のニューロンがどのような活動を示すのかは明らかでないと同時に、前頭連合野から発せられるトップ・ダウン制御信号の実態も明らかではない。そこで、ニホンザルを使用し、課題の遂行には長期記憶に貯蔵されている情報を必要とすると同時に、前頭連合野から下側頭葉に発せられるトップ・ダウン制御信号を必要とする課題である対連合学習課題を用いて、前頭連合野の重要な機能である遂行機能の神経メカニズムの解明を試みた。



■研究の方法

抽象的なパターンで構成された視覚刺激24種類を用いて12対の刺激対を作成し（図B）、2頭のニホンザルに対連合学習課題（図A）を訓練した。手前のレバーを押すと顔前のモニター中央に注視点が現れる。サルが注視点を1秒間注視していると、24の視覚刺激からランダムに選択された1つの刺激（見本刺激）が0.5秒間提示される。その後5秒間の遅延期間（第1遅延期）が挿入された後、別の刺激が提示される。この刺激が見本刺激と対になっている刺激であれば、素早く（0.5秒以内）レバーを離すとサルは報酬を得られる。しかし、見本刺激と対になっている刺激でない場合は、さらに1秒間（第2遅延期）レバーを押し続けていると対刺激が提示されるので、素早く（0.5秒以内）レバーを離すと報酬を得られる。

■研究の結果と次の課題

約400個の単一ニューロン活動を前頭連合野外側部から記録し、解析した。見本刺激呈示期の応答潜時の分布、視覚刺激に対する選択性、同一視覚刺激を見本刺激、参照刺激、妨害刺激として呈示した時の応答との比較など、応答特徴の詳細な解析を試みた。その結果、視覚刺激に対して選択性を示すと同時に、対となる刺激に対して選択的な応答（対符号化活動）を示すニューロン（図C）が存在していた。刺激対に対する選択性の強さを指標化(tuning index）し、その値の分布を調べたところ、正の値を示すニューロンが多数を占めること（図D）、ならびに、対となる刺激間には物理的な特徴の類似性が低いことから、対符号化活動は対連合学習の間に生成された活動であることが示された。一方、第1遅延期の活動については、活動の時間パターンの解析に加えて、見本刺激に対する選択性、対となる視覚刺激の情報を表象しているかどうか、あるいは、対となる視覚刺激の情報の想起に関わるかどうか等の解析・比較を試みている。前頭連合野外側部が後部連合野にトップ・ダウン信号を出力していることはよく知られているが、その実態や機能、生成されるメカニズムは明らかではない。対連合学習課題の遂行の間に観察されるニューロン活動のさらに詳細な解析により、前頭連合野外側部が出力するトップ・ダウン信号の実態とその機能を明らかにしていきたい。

研究プロジェクト

対人相互作用に関わる認知・感情機能：人はどのような顔に注目するのか── 顔知覚の潜在動機の予備的検討

吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター教授）＋上田祥行（同センター特定助教）

■顔に対する注意の配分

集合写真を見ているときのように、人が多数の人物の顔画像を自由に見ているときの視線の動きを観察すると、すべての顔を均等に眺めているわけではなく、長く見つめる顔や何度も見返す顔もあれば、ほとんど見ない顔もあることが分かる。人が特に目的を意識せずに何気なく複数の顔画像を見ているときの注視パターンを分析することを通して、顔に含まれるどのような情報が人の注意を引き付け、個々の顔の注視時間や注視回数を左右するのか、そうした行動指標に反映される、顔知覚の潜在動機を明らかにする研究を開始している。

■実験で検討したこと

今回の実験では、性別、表情、魅力度の異なる複数の顔画像を比較的長い時間、free passive viewing の状態で見ているときの知覚者の視線の動きを計測し、（1）視線が集まるのはどのような顔か、（2）顔を見始めてから早い時間帯と遅い時間帯では、視線が集まる顔に変化がみられるのかどうかを分析した。方法の概要は次のとおりである。

実験刺激として用いたのは20代の男女24名ずつの顔画像で、実験の各試行では12枚の顔画像がモニタ上に提示された（**図1**）。この12枚の画像中には、喜び、怒り、中性（真顔）表情の顔画像が4枚ずつ含まれている。また、これらの画像のうち6枚は事前に行われた魅力度評定（中性の顔画像で実施）の結果をもとに選択した高魅力度の顔画像であり、他の6枚は低魅力度の顔画像であった。実験参加者は20名の男女大学生、大学院生で、パソコンモニター上に同時に提示される12枚の顔画像を2分間、自由に見ているように教示し、その間の眼球運動を計測した（Eyelink1000, 500Hz）。1人の実験参加者について2試行行い、試行ごとに、もっとも多く視線が停留した顔画像、および総停留時間がもっとも長かった顔画像を抽出して、すべての実験参加者を通じてどのような顔画像がよく注視されていたか、視線が長く停留したかを分析した。

図1　モニターに提示された12枚の顔画像。個々の青い点は視線の停留位置を示す。1実験参加者がモニターを2分間注視しているときの視線の停留パターンの例。

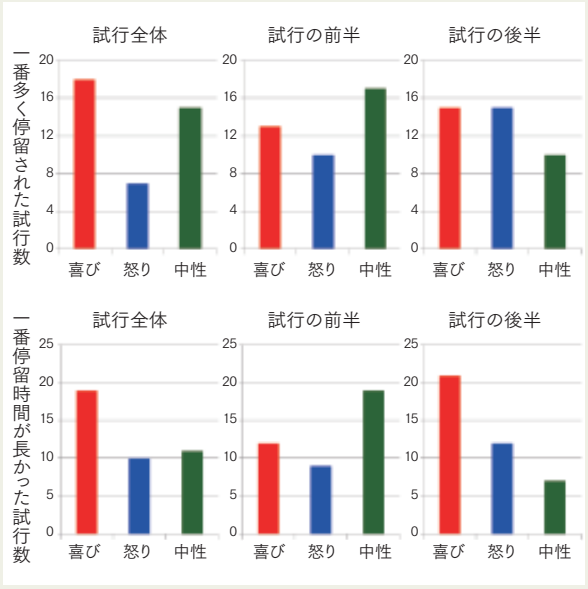


図2　顔画像に対する停留数（上）と停留時間（下）を喜び、怒り、中性の表情別に表した。

■結果と考察

視線の停留のパターンについて、1人の実験参加者の例を**図1**に青い点で示した。**図1**から分かるように、すべての顔画像に均等に視線が停留するのではなく、分布に偏りがあること、それぞれの顔画像のとくに目のあたりに注視が集まることなどが見てとれる。顔の表情別に、視線の停留回数と停留時間のそれぞれについて、2分間の試行全体、および試行の前半と後半に分けて全員のデータをまとめて示したのが**図2**である。**図2**から、全体として喜びの表情に視線が多く集まること、試行の前半は表情が中性の顔画像がよく注視されるが、後半になると喜びや怒りの表情に注視が集まることが示された。さらに、魅力度の高い顔画像は魅力度の低い顔画像に比べて、一貫して注視回数が多く、注視時間が長いことも分かった。

複数の顔画像を自由に知覚するときの眼球運動の計測と分析によって、「長く見たい」「何度も見たい」という潜在的な知覚の動機を喚起し、動機を持続させる顔情報の特性を明らかにできる可能性が示された。

研究プロジェクト

不正直な行動の神経生物学的基盤の研究

阿部修士（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■本プロジェクトの概要

本プロジェクトの主要な目的は、ヒトの不正直な行動、すなわち嘘に関わる神経基盤を明らかにすることである。先行研究の問題点として、嘘が極めて実験室的なものであり、実際の社会的状況下における嘘とは異なったものである点が挙げられる。本研究では実験パラダイムを工夫することで、より現実世界に近い状況でのヒトの不正直さに関わる神経基盤について検討している。

■研究方法

今年度は本研究プロジェクトの基礎となった、不正直さの個人差を規定する神経基盤についての論文を発表したので、その成果をここで報告する（Abe & Greene, 2014）。この研究では機能的磁気共鳴画像法（functional magnetic resonance imaging; fMRI）を用いて、1）金銭報酬遅延課題、2）コイントス課題、の2種類の課題を行った。

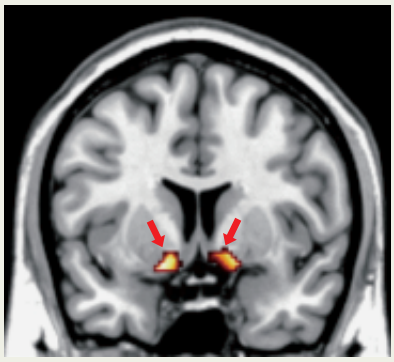
1）の金銭報酬遅延課題は、報酬（今回の研究ではお金）を期待する際の脳活動を調べるための課題である。この課題では、正方形が一瞬呈示され、その間にうまくボタンを押すことができれば、報酬を獲得することが可能である。正方形が呈示される前の時点での脳活動を解析すると、報酬を期待する際の脳活動、特に報酬情報の処理に重要な側坐核と呼ばれる領域の活動を特定することが可能となる。

2）のコイントス課題は、正直さ・不正直さを測定するための課題である。この課題で実験参加者は、コイントスの結果――コインが表か裏か――を予想する。予想に成功すると、お金による報酬が与えられるが、失敗するとお金が減ってしまう。この課題は2種類の条件――嘘をつくことができない「機会なし」条件と、嘘をつくことができる「機会あり」条件で構成されている。

「機会なし」条件では、実験参加者は自分のコイントスの予測、つまり表が出るか裏が出るかの予測を、ボタン押しによって記録する。一方、「機会あり」条件では、実験参加者は表が出るか裏が出るかを、自分の心の中でのみ予測する。そしてコイントスの結果が呈示された後、実験参加者は自分の予測が正しかったかどうかを、ボタン押しによって報告する。「機会なし」条件では、実験参加者があらかじめ記録した予測に基づいて、正解・不正解が決定される。しかし「機会あり」条件では、コイントスの予測が成功したかどうかは自己申告に基づくため、ズルをして嘘をつくことが可能になる。したがって、「機会あり」条件において、予測の正答率が偶然の確率を超えている場合は、その実験参加者はお金を得るために嘘をついているとみなすことができる。なお実験がすべて終了するまで、この課題が嘘をつくことに関わる脳のメカニズムを調べるための実験であることは、実験参加者には伝えられない。あらかじめ実験参加者には、ランダムなイベントを予測する能力に関する実験であるという内容が伝えられる。

■研究成果

今回の研究の主要な結果は以下の2つである。まず、金銭報酬遅延課題において測定した、報酬を期待する際の「側坐核」の活動が高い人ほど、コイントス課題において嘘をつく割合が高いことが明らかとなった。つまり、脳のレベルで報酬への反応性が高い人ほど嘘をついてしまったという結果である。さらに、金銭報酬遅延課題において測定した、側坐核の活動が高い人ほど、コイントス課題で嘘をつかずに正直な振る舞いをする際に、背外側前頭前野と呼ばれる領域の活動が高いことも明らかとなった。背外側前頭前野は、理性的な判断や行動の制御に重要な領域と考えられている。お金への誘惑に打ち勝って正直に振る舞うためには、報酬への反応性が高い人ほど、より強い前頭前野による制御が必要という可能性を示唆するものである。



脳の側坐核

今回の研究は、報酬への脳のレベルでの反応、つまり側坐核の活動の個人差によって、人間の正直さ・不正直さがある程度決まることを示した、世界的にも初の知見である。この成果は人間の「道徳性」を科学的に理解するための重要な一歩であると考えられる。

■今後の展望

上記の研究では、報酬への感受性が不正直さを促進する重要な要因の1つであることが明らかとなった。今後の研究により、不正直さを促進する他の要因、あるいは抑制する要因を明らかにするとともに、その神経基盤を明らかにしたいと考えている。

引用文献

Abe N, Greene JD (2014), Response to anticipated reward in the nucleus accumbens predicts behavior in an independent test of honesty, Journal of Neuroscience 34 (32): 10564-10572.

研究プロジェクト

連携 MRI 研究施設における認知神経科学の教育事業の展開

阿部修士（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■本プロジェクトの概要

平成24年３月のMRI装置の設置以降、こころの未来研究センター連携MRI研究施設の実験設備は、複数の部局の研究者によって幅広く利用されている。こうした最先端の研究設備を最大限利用するには、若い研究者が積極的に設備を利用できる環境・機会を提供することが必要である。

本研究プロジェクトでは、学部学生・大学院生・研究員を主なターゲットとして、認知神経科学の教育事業を実施する。こうした教育事業を継続的に実施することで、MRI装置利用のための環境を充実させ、若手研究者の積極的な研究への参加を促進できると考えられる。

■教育事業の概要

平成26年度は、（1）fMRI体験セミナー、（2）脳科学集中レクチャー、（3）fMRI解析セミナーを実施した。以下に、それぞれの事業の概要を記載する。

（1）fMRI体験セミナー

2014年９月29日・30日の２日間、fMRI体験セミナー2014をこころの未来研究センター連携MRI研究施設にて開催した。本セミナーは、これまでMRIを用いた研究経験のない若手研究者をターゲットに、fMRIを体験する機会を提供するために企画された。今年度は主に学内の大学院生・学部生・研究員を対象に、まず脳機能画像研究についての簡易的なレクチャーを実施した。その後、MRIを用いた実験を体験してもらい、自分の脳のデータ解析を行った。今後fMRI研究を行う若い研究者にとっては、実際のMRI研究を体感することで、スムーズに自身の研究に取り組める機会を提供できたと考えている。

（2）脳科学集中レクチャー

2014年12月25日・26日の２日間、こころの未来 脳科学集中レクチャー2014「脳損傷からみたこころ」を、稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師に森悦朗先生（東北大学大学院医学系研究科教授）をお迎えし、神経心理学の基礎から最新の脳画像研究についての知見までを網羅した内容で講義をお願いした。２日間にわたる集中講義では、言葉の障害である失語症や、記憶の障害である健忘症候群など、脳の損傷がもたらす心理過程の障害についての基礎知識を、最新の研究成果を交えながらお話しいただいた。また、人間の脳を研究する方法として、神経心理学が最も長い歴史をもつことなど、多岐にわたる研究の背景・動向などもご紹介いただき、参加者にとって実りあるレクチャーになったと考えられる。

（3）fMRI解析セミナー

2015年２月26日・27日の２日間、fMRI解析セミナー「resting-state fMRI」を稲盛財団記念館大会議室にて開催した。講師には、河内山隆紀先生（株式会社ATR-Promotions、脳活動イメージングセンタ）をお迎えし、安静時脳活動の画像解析のスキル獲得を目的とした講義及び実習を行った。講義では解析法の背景にある理論についての理解を深め、実習では参加者それぞれが持参したPCを用いて、自ら手を動かしながら実際のデータを解析した。安静時脳活動の解析は近年注目を集めている研究手法の１つであり、参加者にとっては先端的な画像解析の手法に習熟するための貴重なセミナーになったと考えられる。

■今後の展望

こころの未来研究センターに設置されたMRI装置は、文系・理系の研究者が学問分野の垣根を超えて「こころ」に関する研究を行う環境を提供している。学際融合的な研究を推進する上では、研究成果の発信のみならず、教育における有効利用もきわめて重要である。来年度以降も、本年度に実施した研究事業を継続的に実施することで、認知神経科学に関わる若手研究者に、最先端の知識及び技術獲得の機会を提供したいと考えている。

研究プロジェクト

環境要因が潜在的認知に及ぼす影響

上田祥行（京都大学こころの未来研究センター特定助教）

■研究の目的と方法

文化などの環境要因の違いが、視覚的注意をはじめとする視覚情報処理に影響を与えるかという問題はいまだ解決に至っていない（例えば、Masuda& Nisbett, 2001; Evans et al., 2009; Ueda & Komiya, 2012など）。異なった主張が得られる原因の1つとして、実験で用いられる刺激や課題の複雑さがある。この複雑さが実験参加者の戦略を課題特有のものにし、再現性を低下させていると思われる。そこで本研究では、単純な視覚刺激を用いて視覚探索課題を行い、視覚情報処理に環境要因が与える影響を検討した。視覚探索課題は、妨害刺激の中からターゲットをできるだけ早く正確に探す課題であり、視覚的注意の機能の測定によく用いられる。

さらに、視覚探索課題の中でも、探索非対称性という現象に注目した。探索非対称性とは、ターゲットと妨害刺激を入れ替えたときに探索の効率が著しく変化する現象である。たとえば、円の中から線分がついた円を探すほうが、その逆よりも簡単にターゲットを探すことができる（**図1参照**）。モチベーションが高いほど、反応時間が早く、正答率が上昇するが、探索非対称性の生起にはモチベーションは影響しない。このため、探索非対称性を扱うことで、実験参加者のモチベーションや戦略を排除して、視覚情報処理に環境が与える影響について検討できる。

■実験結果

京都大学、ミシガン大学、ブリティッシュコロンビア大学の学生に、同じ刺激を用いた実験を行ったところ、北米人の参加者では短い線分の中から長い線分を探すほうが、その逆よりも早くターゲットを見つけられた（探索非対称性が見られた）。これに対し、日本人の参加者ではどちらの探索も同じくらいの成績であった（探索非対称性は見られなかった）。刺激の密度や長さを変化させても、同様の文化差が見られた。また、円の中から線つきの円を探す探索、垂直線分の中から傾いた線分を探す探索、およびこれらのターゲットと妨害刺激を入れ替えた刺激で実験を行った（**図1参照**）ところ、円と線つきの円を用いた探索では、北米人の参加者は大きな探索非対称性を示し、垂直線分と傾いた線分を用いた探索では、日本人の参加者は大きな探索非対称性を示した。線分の傾きは脳の初期視覚野V1で主に処理されているのに対し、線分の有無や長さなどはV2以上の視覚野で処理される（Freeman et al., 2013; Rensink & Enns, 1995）。これを踏まえると、V2以上の視覚野が関与する線分の長さ探索や円と線つきの円の探索では北米人で非対称性が大きくなり、V1が関与する傾きの探索では日本人で非対称性が大きくなったと考えられる。

続く実験では、探索非対称性の大きさが初期視覚野の処理を反映している可能性を検討するために、探索非対称性を示す複数の刺激セットを用意し、その大きさの一貫性を測定した。探索非対称性の大きさが初期視覚野の処理を反映していれば、同じ領域で処理される特徴を持つ刺激セット間では、同じ程度の探索非対称性が見られると予想される。実験の結果、同じ領域で処理される特徴を持つ刺激セットは同程度の探索非対称性を示した。

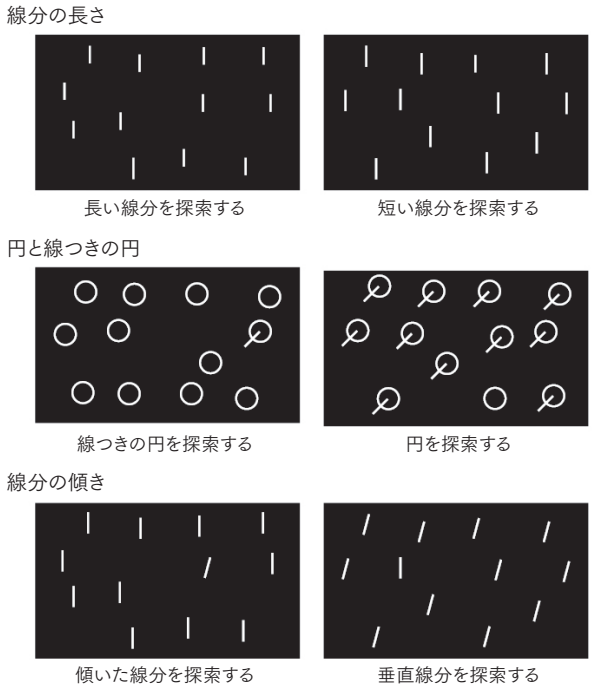


図1　探索非対称性を示す刺激セットの例
それぞれ左側に示した探索のほうが右側に示した探索よりも容易である。

■今後の課題

線や円といった単純な刺激を用いた課題でも、視覚情報処理が環境要因の影響を受けていることが示された。しかし、具体的に環境の中の何が我々の視覚情報処理を変容させたのかは明らかではない。Miyamoto et al.（2006）やUeda & Komiya（2012）では、普段目にする風景が、異なった注意の処理を引き起こす可能性が示されている。そのため、目にする文字や人工物、これらの並び方などが視覚情報処理を環境特有のものにしているかもしれない。今後は、風景の分析などを交えて、情報処理を変容させる具体的な要因を明らかにしていく。

研究プロジェクト

農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授）＋ 竹村幸祐（滋賀大学准教授）

■研究の目的

本研究では、地域コミュニティの特性と、住民の心理・行動傾向の関係を検証した。地域コミュニティの特性として、とくに、社会関係資本と、地域の主たる生業に注目した。本研究の目的は、以下の2つの柱にまとめられる。

1）コミュニティにおける社会関係資本の生成

これまでの研究においてわれわれは農業・漁業コミュニティにおける普及指導員の役割に注目してきた。普及指導員を対象とした調査を通じて、コミュニティの社会関係資本（たとえば、成員同士の信頼関係）に普及指導員が及ぼす影響を検討してきた。本研究では、普及指導員に加えて、農業・漁業コミュニティの成員を対象とした調査を実施することで、農業者・漁業者の視点から社会関係資本に普及活動が及ぼす影響を検討することを目的とした。

2）地域コミュニティの生業と住民の心理・行動傾向

地域コミュニティと一口に言っても、実際にはそのあり方は多様である。本研究では、過去の文化心理学の知見に立脚しつつ、地域コミュニティの主たる生業が、そのコミュニティの社会関係や住民の心理・行動に影響するメカニズムの解明を目指した。

■調査の実施とこれまでの知見

上述の目的に向け、調査（前年度実施）データの整理・結合・分析、ならびに、既存のアーカイブデータ（たとえば国勢調査データ）との結合を行った。加えて、地域コミュニティでの聞き取り・フィールド調査を実施した。主たる知見は以下のとおりである。

調査1：農業者グループ・漁業者グループのリーダーおよび担当普及指導員の調査

近畿・中国・四国を中心としたエリアの農業者グループ・漁業者グループのリーダー的立場にある人々を対象とした調査データを分析した。この調査には、グループの社会関係資本、ならびに農業者・漁業者の視点から見た普及活動の役割・効果を検討するための項目などが含まれていた。同時に、各グループを担当する普及指導員を対象とした調査も実施し、農業者・漁業者視点に加えて、普及員視点からの分析も可能とするデータベースを構築した。

調査1のこれまでの分析（農業者グループのデータを中心とした分析）から、普及指導員が社会関係の「コーディネーター」としての機能を担っており、農業者同士の信頼関係に影響力を持っていることが示された。主な知見を挙げると、第一に、農業者グループ内の信頼関係を高めやすい普及指導員は、「決断力がある」「将来に向けてのビジョンを提言する」「問題解決又は目標達成のために必要な取組を、順序立てて企画する」「周囲と連携してチームワークを形成する」などの特徴を持っていた。第二に、グループの状態（たとえば、メンバーの相互扶助の程度）について、グループのリーダーと担当普及員が一致した認識を持っているときに、グループ内の信頼関係が高まりやすかった。第三に、リーダーと担当普及員の認識が一致しやすいのは、担当普及員のキャリア年数が高いときや、リーダーの年齢が高いとき、また、リーダーがグループの外とも積極的に関わっているときであることが示された。

調査2：農業地域・漁業地域住民を対象とした郵送調査

近畿・中国・四国・東海地方の一部を対象地域として、そこから無作為抽出された412集落で実施された郵送調査データを分析した。分析では、住民1人1人の生業（とくに、農業と漁業）の影響に注目すると同時に、地域コミュニティ（集落）で農業・漁業がどれだけ盛んに行われているかにも注目した。ここでは、住民の心理傾向、とくに、「相互協調性」への影響を主に検討した。相互協調性はこれまでの比較文化研究で、欧米より東アジアで強く見られることが示されてきた心理傾向である。

分析の結果、農業・漁業といった生業が、個人の心理傾向に影響していることが示された。ただし、農業と漁業では、その影響の在り方に違いが見られた。農業の場合、個人が農業を営んでいるかどうかの影響を超えて、地域コミュニティ内で農業が盛んであるときに、相互協調性が促進される、という効果が見られた。一方漁業は、地域コミュニティのレベルでの影響は見られなかった。代わりに、個人が漁業を営んでいるときに、自尊心とリスク回避傾向がともに高まっていた。さらなる分析の結果、農業と漁業で影響の在り方が異なる原因のひとつとして、コミュニティ内の社会関係の特徴が挙げられることが示された。農業が盛んなコミュニティでは、農業者だけではなく、非農業者も様々な集合活動（たとえば年中行事）に参加するようになり、このことが、農業者だけでなく非農業者の相互協調性を促進させていた。

以上の知見は、生業によってコミュニティ内部に形成される社会関係の在り方が変化してくること、また、それによって、住民の心理傾向にも違いが生じることを示している。

研究プロジェクト

地域の幸福プロジェクト（上廣こころ学研究部門　幸福感の総合研究）

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授）＋ 福島慎太郎（青山学院大学助教）

■はじめに

日本社会の幸福においては、他者や地域との関係性が主要な役割を果たすことが理論的・実証的に示されている（Hitokoto & Uchida, 2014; Uchida & Ogihara, 2012）。そして、周囲の他者との協調により実現される幸福を捉える際には、独立した個人を前提とした「個人単位の幸福」だけではなく、他者との関係や集団・地域に存在する「集団・地域単位の幸福」が重要な意味を持つ（Uchida, Ogihara, & Fukushima, 2015）。

本プロジェクトでは、主観的幸福が個人を超えて地域を単位として成立するメカニズムを探るために、A「本人が感じる幸福感（自分がどの程度幸せだと感じるか）が地域住民の幸福に対する認知（地域住民がどの程度幸せを感じていると思うか）と不可分になっている」という個人の心理プロセスが、B「住民同士の人間関係が豊かな地域に居住する」ことを通して地域単位の社会プロセスと連動して集合的に成立していることを究明するための研究活動を実施してきた。ここでは、プロジェクトの2つの研究活動の柱であるI. 質問紙調査とII. フィールド調査から得られた知見の概略を紹介したい。

■調査方法と結果

I. 質問紙調査

方法：本プロジェクトでは、2013年度に近畿地方・中国地方・四国地方における412の地域コミュニティ群を対象として質問紙を配布し、計7,295人から有効回答を得た。2014年度は、質問紙から得られたデータを整備し、分析を実施した。質問紙には、個人の主観的幸福感とともに、地域住民の幸福度に対する認知をたずねる項目ならびに社会関係資本に関する項目を設けた。この他、個人の基本属性に関する項目（性別、年齢、居住年数、最終学歴、世帯収入、婚姻状態）を尋ねた。

結果：本人の幸福度と地域住民の幸福度に対する認知との相関分析の結果、同じ町内（集落）に住む地域住民の幸福度が高いと認知している人は、本人の幸福度も高いという現象が示され、主観的な幸福は、地域住民の幸福に対する認知と関連していることを確認した。

続いて、この「地域内の他者の幸福に対する認知」と「自分の幸福」が連動する状態を促進させる要因（個人要因ならびに地域要因）を検証するためにマルチレベル分析を実施した。その結果、個人の基本属性（性別、年齢、居住年数、学歴、所得、婚姻状態）や集団・地域の基本属性（人口密度、農業者比率、漁業者比率）は要因として関与していなかった。一方で、住民間に形成された社会関係資本が密な地域に居住することで、地域住民の幸福と自らの幸福が連動するような心理状態は生じやすい、という知見を得た。

II. フィールド調査

[滋賀県世継集落におけるフィールド調査]

本プロジェクトでは、2013年4月より、定期的に滋賀県世継（よつぎ）集落の農業組合役員会に参加してきた。そして、農地だけでなく集落共有資源の維持・管理を含めた「農村」「コミュニティ」をどのようにして継承していくか、という議題に関する体制づくりならびに枠組みの構築を行う意思決定の場に、農業集落のコーディネーターとしての役割を果たす農業普及指導員（内田・竹村，2014）とともに参加してきた。

2014年度は、あらたに農家ならびに土地持ち非農家で構成される農業組合の会員だけでなく、広く集落住民を取り込んだ「世継農用地保全検討委員会」を発足するためのルール構築を行う場に立ち会った。また、世継集落における農業との触れ合いならびに農家・非農家との定期的な交流を目的とした農業収穫祭の企画に携わった。

これら一連の社会活動に参加することを通して、集落外部の人（農業普及指導員など）による再評価や枠組み構築の場への参画が、住民の役割や関係性、ならびに住民1人1人の認知・行動の枠組みや制度そのものを徐々に変容させ、時代の要請に応じた地域の幸福を達成する要となっていることを確認した。

[近畿・中国・四国地方の農村・漁村フィールド調査]

2014年度は、京都府の4つの漁村、ならびに香川県の2つの農村を訪問した。京都府の漁村においては、主産業である定置網漁における資源の共同管理という資源管理特性と相まって、運命共同体としての集落特性があることが確認された。それに伴い漁業者リーダーの特性として、定置網漁や延縄漁に携わる従業員を集団としてまとめると同時に、組織の経営を担う役割を果たしていた。また、香川県における農村は、古くから近隣の愛媛県や岡山県と同時に、ため池用水の水源地域である高知県や徳島県とも密なかかわりを有してきた地域であり、農業普及指導員の外向性や農村における外国人従業者の受け入れを開放的に行っていた。

これらの農村・漁村の比較検討から、地域の幸福を捉える際には、個人や社会の特性と同時に、それを取り巻く地理的特性、生業や地域風土、そして地域の歴史に根付いて形成されてきた地域文化との関わり合いの中で総合的に捉える必要性を感じた。

研究プロジェクト

組織文化とこころのあり方：日本における企業調査

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授）

■研究の目的

企業従業者の心のあり方については、職場におけるソーシャル・キャピタル研究や、社会階層と健康についての疫学的知見などから、検討が行われてきた。一方で従業員のメンタルヘルスとそれを支える組織の風土についての検証は十分ではない。大きく変化しつつある日本社会の行く末を考えるにあたり、グローバル化する組織文化と伝統的な日本文化との相克を検討することは、現代日本社会における喫緊の課題である。

本研究の目的は文化の多層性に焦点を当て、日本文化における社会関係の基盤を解明することにある。その際、第1層としての「日本文化」と、第2層としての「組織文化」に着目する。他者との協調的な関係が幸福の主要な源であるとされてきた日本において、（1）第2層（組織レベル）の文化間に見られる共通性と差異及び第1層と第2層の間に生じる相克を検証、（2）個人レベルの要因（社会関係の認知等）とマクロレベルの要因（組織風土）を同時に分析、文化が心の働きに影響を与えるメカニズムを精査する。これらを通じて日本の企業内でどのような社会関係が幸福をもたらすのかを明らかにし、心の健康と安寧促進に資する知見を提示すると同時に、社会科学における新たな理論展開を目指す。

協調的な他者との関わりが幸福感に寄与する、というこれまで日本で一般化されてきた特性が、日本文化の第1層全体で共有されているのか、あるいはとくに日本型企業など、移動が少なく分配と協力が求められるところにおいて強く見られる特性なのかを検証することにより、大小分類なく「文化」と一括りにされてきた国・地域・企業組織などのうち、いずれが心理的に影響をもたらす文化の範囲として有効なのかを明らかにする。日本の第1層の文化が持つ価値観（たとえば相互協調性）と第2層の文化が持つ価値観（たとえば企業が推進する個人主義）が不一致である場合に、そこに生きる人が経験する心理的相克の検証も行う。

調査参画企業を幅広く、そして数十社集めることにより、これまでの産業メンタルヘルスや疫学調査で主に検証されてきた「個人レベルの要因（たとえば社会関係や賃金など）」だけではなく「マクロレベルの要因（たとえば企業の中の階層構造や企業サイズ、成果主義の導入有無などの企業要因）」を同時に扱い、マルチレベル分析を用いて実証的に従業員の幸福に資する要件を同定、「人が育つ組織」とはどのようなものであるかを検証する試みである。

そこで、関西（主に京都府、兵庫県）と四国（高知県）の様々な企業に協力を仰ぎ、調査を実施する。組織（企業）ごとに内部で共有されている文化（「第2層の文化」）が、従業員の対人関係と幸福感にどのように関わっているのかを明らかにする。

■研究の方法

1）聞き取り調査の実施ならびに研究会の実施

NPO法人ミラツクならびに株式会社ウエダ本社と協力し、「人が育つ組織」研究会を実施、企業の育つ力向上に向けた取り組みを産学連携して実施した。研究会は当初2回をオープン型セミナー形式とし、何が「人が育つ組織」のキーワードとなっているのかを参加者とともに検討、その後はクローズドディスカッションを行い、様々なタイプの企業へのインタビュー調査などを通して、現代日本社会における企業組織の類型化とそれぞれに対応した形への「人の育ち方」について検討を行った。研究会の経緯は上の表のとおりである。

人が育つ組織研究会の概要

第1回 2014.5.27 オープン形式	講演：小田理一郎（チェンジエージェント）鼎談：太刀川英輔・内田由紀子他 キーワード：学習する組織、組織システムと個人の相互発展、組織並びに個々の主体性、つながりへの先行投資、多様性
第2回 2014.7.10 オープン形式	講演：大屋智浩（富士通総研）　鼎談：太刀川英輔・内田由紀子他 キーワード：暗黙知と形式知の創造、SECIモデル、実践の場としての職場、主体性
第3回 2014.8.7 クローズドディスカッション	キーワード：経営者と従業員のズレ、組織と個人のマッチング、組織の成長のあり方、組織の物語と個人の物語、場の可塑性、人が育つ組織のはかり方、組織風土の類型
第4回 2014.9.19 クローズドディスカッション	関西A社（製造業、従業員数60名）へのインタビュー調査結果の共有 キーワード：組織規模と「人の育ち方」の関連、主体的意思決定とその人他らしさの肯定、マクロな風土・制度とマイクロな個人半判断のリンク、企業風土の内在化プロセス、年功序列vs. 成果主義
第5回 2014.11.21 クローズドディスカッション	関西B社（製造業、従業員数3000名）へのインタビュー調査結果の共有 キーワード：リーダーのマネージメント、モティベーションの高め方（表彰制度）、研修プロセス、人事機能と「つながり」の育成
第6回 2015.1.29 クローズドディスカッション	関東C社（製造業、グローバル大企業）へのインタビュー結果調査結果の共有 キーワード：中途採用者など組織の流動性、合併等組織文化の変化への対応、社外との連携、企業成長モデルによる類型可能性（個人中心―会社中心の軸、社会関係資本高低の軸）
第7回 2015.3.9 クローズドディスカッション	類型モデルの精査 個人の自立・主体性―会社への依存の軸、社会関係資本の高低の軸による2次元モデルの作成。自立性が高くても社会関係資本が低ければ成果主義のみの個人商店化が起こりがち。一方で自立性が低く高社会関係資本になると、村的コミュニティとなり、創造性に乏しくなる。どのようにして個人の主体的意思決定とコミットメントを担保させながら社会関係資本を高く保てるかを問うモデルに。

2）調査

調査1：京都府、兵庫県、高知県での企業従業員各150名、合計450名へのウェブ調査を実施。組織内のつながりのあり方や、仕事上の満足度、企業風土について尋ねた。現在分析中である。

調査2：京都経済同友会、土佐経済同友会の協力のもと、組織風土と幸福に関する組織単位での調査を実施。最終目標は各地域15社から20社で実施し、マルチレベル分析を実施する予定である。平成26年度は2社での先行調査を実施。 幸福感と職場でのつながり、思考様式、企業内の組織風土や職場環境、職場内の制度などの文化・環境因子を企業毎に調査し、参加企業にはフィードバックを行っていく。マネージメント層と一般従業員での企業理念の浸透度や互いへの理解の一致度なども調査していく予定である。

研究プロジェクト

こころ観の研究

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーフケア研究所特任教授）

■「こころの荒廃」の突破口としての「身心変容技法」

本プロジェクトの目的は、今日の社会が抱え込んでいる「こころの荒廃」の問題から抜け出す道を探るため、学問や芸能に蓄積され伝えられてきた宗教的リソース（技術と知恵）に着目し、現代の学術的・社会的文脈の可能性を開くことにある。これまで鎌田研究室では、多様な思想的バックグラウンドにおける「こころ」の捉え方を整理し、「こころ観」の俯瞰的な地図の作成に取り組んできた。それと並行して、さまざまな芸道や宗教的伝統が培ってきた修行・修養・変容の技法を「身心変容技法」として捉え直し、神秘思想における瞑想、仏教における止観や禅や密教の瞑想、修験道の奥駆けや峰入り、滝行、合気道や気功や太極拳などにわたり、さまざまな実践の諸相（特色）と構造（文法）を明らかにしてきた。前年度はここに神経科学的手法を導入したが、2014年度は、これまで重ねてきた思想研究とフィールド調査、神経科学的手法を活かし、理論的研究と実証的研究を対話させながら、各々の宗教的伝統における根源的な「こころの変容」を解明した。

■研究会の概要

宗教的実践における「こころ」、および言語学における「こころ」の諸相を明らかにすることを目標として、定期的にさまざまな分野の研究者・実践家を招き内部研究会を開いた。

棚次正和氏（京都府立医科大学教授・宗教哲学）を招いた研究会では、「ベルクソン哲学」を補助線として活用することによって、心身問題を決して「心脳問題」に矮小化し還元してしまうことなく、「魂の死後存続」や「身体からの魂の独立」の問題をも視野に入れ議論する必要性が論じられた。棚次氏は、人間存在が「死の不可避性」＝身体的次元と「不死性」＝霊の次元の両面に同時にまたがっている事態をトータルに考え、「人は死ぬ（Man is mortal.）」が「人は死なない（Man is immortal.）」という一見相矛盾する二つの命題を統一的に理解しうる視点を再獲得しようと問題提起した。この観点は、現代の死生観、宗教観を広く問い直し、生活感覚から導き出される生身に生きられた素朴な生命倫理を医療現場に還元する重要な参照点となるであろう。

能楽師（ワキ方）の安田登氏を招いた研究会では、舞の実践家の立場から身心変容技法研究という課題へのアプローチをうかがうことができた。ワキは「分く」という言葉を語源としており、能ではワキだけが「幽霊」と出会うことができると言われている。ワキは、生者でもなく、死者でもなく、媒介である。つまりそれは「見せる存在」である。また、ワキとは、特に行き方定めぬ旅人である。その土地の自然物と交感し、気が付くと時間が変わり「今は昔」になっている。社会生活においては、少なくともある一定の限りにおいて、決まりきった枠組みで生きること、数値や固定概念をもって表現することが否応なく迫られる。そのような中で、ワキ方の旅人的な時間、漂流し、あるがままの自然と出会い、木や花と歌を歌う在り様は、大切な生の側面に思い至らせてくれるだろう。一連の論考に続き、安田氏は「夢十夜」の「第三夜」の語りの実演を行った。バイオリンと石笛・能管・横笛が囃子方として、身心変容の実践を見せてくれた。

■シンポジウム

身心変容技法研究の成果報告として、2014年11月には二日間にわたり「大荒行シンポジウム」を行った。1日目のシンポジウムでは、大学関係者のみならず一般市民の関心を集め、立ち見を含め170名ほどの参加を得た。田中利典氏（大峯金峯山修験本宗宗務総長・金峯山寺執行長）、星野尚文氏（本名：文紘、羽黒修験道松聖・所司役）、高木亮英氏（西国三十三所一番札所那智山青岸渡寺副住職）、戸田日晨氏（日蓮宗大荒行堂遠壽院住職・傳師）という「修験道」に身を置いている行者たちを招聘し、具体的な行の実践と問題点、可能性を明らかにした。報告を受け、指定討論者である倉島哲氏（関西学院大学教授／社会学）は行における「垂直軸」と「水平軸」を設定し、「聖」と「俗」との分かち難い関わりを解きほぐすきっかけを提案した。これらの議論によって、荒行がもつ現代的意義や可能性、学術的考察への道が開かれた。2日目のシンポジウムでは、吉野修験道、羽黒修験道、日蓮宗の荒行の行者を招き、それぞれの実践における技法と、身心の変容過程について、研究者たちとのディスカッションを通じて考察を深めた。修験道は、神道、仏教、道教、シャーマニズム、祭祀、民間信仰等、複数の要素を組み込みながら、総合化している1つの一大曼荼羅のような世界である。その学術的な考察を、行者の方々の実践感覚にぶつけ、新たに議論を開くことの重要性と可能性が示された。

大荒行シンポジウムポスター

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

―― 伝統芸能・武道における心技体の研究を中心に

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーフケア研究所特任教授）

■ワザ学

「ワザ（技・業・術）」とは、物の世界に形を与え、人間世界に広がりと深みをもたらすことを可能にする、こころと物との媒介通路を意味する。人間はこれまでに、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かなワザを創造、継承、改変してきた。現代の生活は、豊かな物に囲まれ非常に便利になっているが、生活感が満たされ豊かであるとは言い難い面が少なくない。そこで、古来伝わってきた様々なワザに着目し、文献を通した理論的観点と、実演を介した実践的観点とを交えつつ、人間のこころと物や道具、観念世界などとの相互関係を結び直すことで、「物は豊かだがこころは貧しい」と言われる今日に、こころと物とのつながりを取り戻し、生の豊かさを切り拓く道を模索する。

■世阿弥研究会

観世流能楽師河村博重氏を交え、毎月2回、世阿弥『風姿花伝』に添い、ワザを言葉によって読み解くことを目標としている。身体的活動を言葉によって表現するための語彙・文体を取り出すことができれば、達人の芸術的・宗教的境地を、一般的な教育の活動へと取り入れることが可能となる。世阿弥の知恵は、能という1つの活動の枠を越えて、今日における身体活動全般にとって、また日本の思想にとっても重要な参照点と捉えられる。

開催	テキスト	キーワード
4月	『風姿花伝』 第三問條々	花 陰・陽 序破急
4-5月	第四神儀云	申楽 神代の始まり 秦河勝
5-7月	第五奥儀讃歎云	寿福増長の基 遐齢延年
9-11月	第六花修云	音曲 風情 言葉
12-3月	第七別紙口伝	花 面白き 珍しき 似せぬ位

世阿弥研究会の活動

■国際会議・ワークショップ参加

奥井遼研究員は、国際会議IHSRC（The 33rd International Human Science Research Conference、於・聖フランシス・ザビエル大学、カナダ、8月）および事前ワークショップPhenomenology of Practiceに出席し、研究成果を発表することで、海外における先端的な研究者と交流し、国際的な視野で研鑽を積んだ。

また、フランスより「身体の哲学」のパイオニアであるベルナール・アンドリュー（Bernard Andrieu）ルーアン大学スポーツ学部教授をお招きし、国際会議「1st Research Meeting of Philosophy of the Body: Dialogue between French and Japanese tradition of bodily performance」を開催した。講演は刺激的で、多方面から議論が展開された。基本的な立場としては、神経科学の成果を哲学に取り入れようとするもので、フッサールやメルロ＝ポンティといった、心理学の成果を取り入れた初期の現象学者たちのスタイルを引き継ぐものである。ただ、サーカス団員の体感目線を撮影し、身体的行為の現れを捉えるべく哲学的考察に活かすなど、思索の手法には非常に画期的であった。当分野の研究者を召くのはおそらく初めての機会であり、この機会は日仏の研究者の交流、発展を促すきっかけになったと考えられる。

フォーラム「ワザとこころ　能の伝承～稽古と修行と教育」のちらし

■一般公開シンポジウム

2015年1月には、こころを整えるフォーラム「ワザとこころ　能の伝承～稽古と修行と教育」を観世能楽堂において開催した。世阿弥は『風姿花伝』「第一年来稽古條々」で、能役者の成長過程を7期に分け、それぞれの段階の特徴と課題と芸境を明確に示している。

当日は、観世清河寿、観世三郎太両氏をお招きし、芸事を引き継ぐ「家」に生まれ「学び」（真似び）を重ねる在り様を尋ね、教育学者西平直氏（京都大学教育学研究科教授）と心理学者で臨床心理士である河合俊雄氏（こころの未来研究センター教授）とともに、このような伝統的「稽古」や能楽修行の問題を現代の教育につなげ、比較・検討する道筋を再考した。続いて、舞囃子の実演が行われ、稽古哲学が培う伝統のワザを鑑賞することができた。

当日は150名前後の一般市民の参加を得て、大きな反響を呼んだ。

研究プロジェクト

生態智の拠点としての聖地文化――こころ・場所・癒しの研究

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーフケア研究所特任教授）

■癒し空間の特色

これまでの研究では、（1）こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究、（2）負の感情研究――怨霊から嫉妬まで、および（3）癒し空間についての研究を行ってきた。2014年度は、現代社会の「こころ」をめぐる諸問題を打破するさらなる突破口を模索するために、「場所に宿るこころ」という観点を導入し、調査を行った。西田哲学の「場」の理論や「拡張された心」理論が述べるように、「こころ」はモノや場所との関わりの中でつねに移ろいながら想起され、人間が生きる場自体に映し出され続けるものである。本研究では、寺社や聖地などの「癒し空間」、負の感情を昇華させる装置としての「祭」などに蓄積されている「場所の記憶」や「場所の力」を、宗教学的・哲学的・芸術的・社会学的観点から多角的に分析する。そして、「場所」において立ち現れる「こころ」の諸相を呈示し、社会生活のなかに記憶・感情・崇高さを想起させる場の特色と、その心的メカニズムに光を当てる。

■フィールド調査、学部生向け教育フィールドワーク

◎フィールド調査

①第７回東北被災地追跡調査：2014年４月29日～５月３日

②第１回芦生原生林調査：2014年11月４日～５日

原生林には、太古より人間が触れ合い人間となってきた音や匂いや感覚が息づいている。そのような環境に現代人が身を置くことで、身心はどのように変化し、何が生まれるのか。本調査では、その問いを深めていくきっかけとして、人間のこころに生じる宗教性と芸術性の関連という観点を得た。

③春日大社おん祭調査：2014年12月17日

「1156年に起こった保元の乱以後、『おん祭』はまさに『乱世』を鎮める祭りとして斎行されてきた。若宮を鎮撫するその神楽・芸能の奉納は、実に美しく絢爛豪華でありパワフルである。とりわけ、深更、100人近くの榊を手にした白衣姿の神職に囲まれて若宮神の御神体が『オーッ！　オーッ！』と野太い警蹕の声に護られるように動座していくさまは圧巻である。（手記より）」

古より伝え奉じられている神話的時間は、人間のなかの力強い野生の感覚に訴え、洗練された貴族文化と荒々しい野生の文化の融合を見せてくれる。それは、神道の聖地と祭祀の一つの原型であり、現代の生の在り様を捉え直す手がかりとなる。

④第４回羽黒修験道「松例祭」調査：2014年12月30日～１月１日

⑤天河大辨財天社例大祭・鬼の宿・節分祭・立春祭調査：2015年２月２日～４日

◎久高島研究フィールドワーク（京都大学学部１回生対象）

日時　2014年９月12日-16日

調査地　沖縄県久高島

参加者　京都大学学部１回生９名、TA２名

概要　学部１回生への教育活動の一環として、久高島への５泊のフィールドワークを開催した。久高島では、島の聖地を自分たちの足で歩き、また島の人たちに話を聞くことによって、「神の島 久高島」の来歴と現状、および可能性を深く掘り下げることができた。また、９月14日の日曜日は、島の子どもたちと共に「久高大運動会」に参加し、大いに盛り上がりを見せた。伝統が色濃く息づく島でフィールドワークを行った上で、島民のイベントにともに全力投球することで、久高島の神々の歴史と現在の生活とが自ら融合され、島の時間を奥行きと立体感をもって体感することができた。運動会では前日と

当日の朝の準備から手伝い、最初の行進・開会式から最後の閉会式までフル参加し、一部の競技では学生が大活躍した。

■京都大学学際研究着想コンテスト最優秀賞受賞

「人はなぜ、森で感動するのか」をテーマとした学際的研究案が、「京都大学学際研究着想コンテスト」において最優秀賞を受賞した。伊勢武史氏（フィールド科学教育研究センター）、銅金裕司氏（京都造形芸術大学）、小松正史氏（京都精華大学）と共に、宗教・芸術・音楽という感覚を人間が獲得した意味を探るアイデアである。人間が森を心地よく感じ、愛しく敬う感覚は宗教やアートの源と言える。今回は着想のかたちで提示したが、この延長に森で感動が起こるメカニズムを探ることは、現代人が自然の一員として生きる在り様につながると考えられる。

研究プロジェクト

東日本大震災関連プロジェクト――こころの再生に向けて

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授、現上智大学グリーフケア研究所特任教授）

2011年3月11日、東日本大震災という未曾有の事態が発生し、日本における価値観、社会関係のあり方は、被災地に留まらずその他の地域においても変化した。本研究プロジェクトは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学・心理学の学際的アプローチから、こころの再生に寄り添い、より良い生のかたちに向けて調査・検討を行うことを目的としている。

■本プロジェクトのアプローチ

本プロジェクトでは、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局の「心の相談室」、島薗進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲葉圭信氏が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら調査を行っている。より具体的な視点は、①伝統文化のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザインの在り様である。前年の調査では、被災地に鎮座している神社が、東北地方に独特の宗教的風土を醸し出し、襲来する自然災害に対する防災・安心・安全装置として機能していることが明らかとなった。今日では、生活から培い出されてきた宗教的「世直し」思想と実践事例を解明し、日本文明の位置とあり方を問い直すことが大きな課題となっている。そこで2014年度は、伝統文化の継承と活用、自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再評価と再構築、安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方などに焦点を当て考察した。

■フィールド調査

2014年度は、4月から5月にかけて、須田郡司氏（写真家）とともにフィールド調査を行った。そこで明らかとなったのは、「想定外」の事態に対処してゆく術を考える際に、その土地に暮らす地域住民の声を頼りに「復興」への道筋を探る重要性である。今回は以下の日程で、福島県相馬から青森八戸までを辿り、地域住民と対話するなかで、海際の復興の在り様と課題点を調査した。

1日目：4月29日　鎌田東二＋須田郡司　福島・相馬・浪江町・閖上・仙台

2日目：4月30日　鎌田東二＋須田郡司　仙台・荒浜・七ヶ浜・塩竈神社・石巻・女川・熊野神社・釣石神社・雄勝町・葉山神社

3日目：5月1日　鎌田東二＋須田郡司　雄勝・陸前階上・気仙沼・大島

4日目：5月2日　鎌田東二＋須田郡司　気仙沼・大船渡・陸前高田・釜石・大槌町・宮古

5日目：5月3日　鎌田東二＋須田郡司　宮古・田老町・野田村・久慈・八戸

地域住民とともに公民館などに集まり、手仕事や作業の時間をともにすることで、現地に暮らす人々の直近の生活における必要事項と、国や県の対策とがすれ違う問題が明らかとなり、改めて今その間をつなぐ研究・調査の必要性が感じられる。

■シンポジウム

研究会の成果報告として、「東日本大震災関連プロジェクト――こころの再生に向けて」第5回シンポジウム（2014年7月22日）を行った。「震災後の自然と社会」をテーマに基調講演を受け、震災後の被災地復興に向け、「いのちの循環」を断ち切らない持続可能なコミュニティを模索した。田中克氏（京都大学名誉教授・森里海連環学）は「震災後の自然環境の変化」について、国や県が津波対策案とする巨大な防波堤設置案に対し、地域住民や研究者より、①景観破壊、②生態系破壊、③コミュニティ破壊の3点より、反対意見が寄せられていることを指摘し、海と陸との生活の循環と連環の重要性を訴えた。また、草島進一氏（山形県議会議員・羽黒山伏）は、「震災後の社会と持続可能な未来」をテーマに、地域住民の実生活に添った「復興」の在り様と、少子高齢化社会が進行する現状に則した問題解決の在り様を提起した。

■展示活動＆フォーラム

2015年3月には、北野天満宮において「悲とアニマ――モノ学・感覚価値研究会」展を開催し、自然に根差したアニミズム的感覚に特徴づけられる「日本的感性」の今日的意味を表現した。活動には、東日本大震災における「悲」を「アニマ（霊魂・霊性）」に触れることにより生きる力に変えようとの願いが込められており、そうした企画意図に関わる芸術作品を展示した。

また、震災4年目にあたる3月11日には、天満宮境内において鎮魂茶会を開催し、夕方6時より、やなぎみわ氏（京都造形芸術大学教授・現代芸術作家）の移動舞台車上で、河村博重氏（能楽師）とコラボレーションするかたちで鎮魂舞台を上演した。寒空の下多くの関係者、市民の方々の参加を得、4年前の惨事に身を寄せながら、鎮魂の祈りを奉納した。展示期間には、「悲とアニマ」展公開シンポジウムを2回開催し、研究者とアーティストの交流の場を開くとともに、宗教・芸術に関心のある一般市民の多くの参加を得て、現代社会における宗教性・芸術性を問い直す機会となった。

研究プロジェクト

こころの古層と現代の意識

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

■研究目的

本プロジェクトは、現代人のもつ隠れた素地としての「こころの古層」と、時代に応じて移り変わる「現代の意識」という2つの視点から日本人のこころの特性について検討を行うものである。こころの古層研究では、日本古代の存在様式を探る人類学、さらにはそれを精緻化したと考えられる仏教思想、その後の文学作品等を素材に研究を進めるが、これらは単に歴史的な観点から検討されるのではなく、まさに現在、現代の意識の基盤としての働きを捉えようとするものである。また、現代の意識研究では、ユングの『赤の書』、村上春樹に代表される現代の文学作品、心理療法事例や心理学的調査研究、あるいは震災後のこころのケア活動の中で見出された知見等を素材とする。そして、現代においてどのようにこころの古層への通路が開くかという契機について検討するとともに、いにしえのこころが現代を生きる我々に与えてくれる生き方のヒントやヴィジョンを見いだしていくことを目指している。

■平成26年度の研究成果

ⅰ. こころの古層を探る

平成26年度には、こころの未来研究センター准教授の熊谷誠慈氏の発表「仏教はこころをどうとらえてきたか――存在論的・認識論的観点から」をもとに議論を深めた。河合隼雄が『ユング心理学と仏教』などの著書を通じ、仏教思想をベースに心理療法論を深めているように、日本の心理療法を考える際には仏教的思想は切り離すことができないものである。たとえば、negativityのとらえ方について、心理学では欲求や欲望などの“煩悩”を自我の機能を強めるものとして重要なものとみなすが、仏教は逆である。また、仏教の認識論においてこころは緻密に細分化されて捉えられてきたにもかかわらず、精神分析で中核的に扱われる「罪悪感」というカテゴリーはみられない等、興味深い相違がみられる。しかしながら、ユングの前期思想においては自我を中心に立てているために自我／自己、意識／無意識とこころが二世界的に捉えられるいっぽう、ユングの後期の思想においてはほとんど自我と自己の違いは見いだせないように、仏教とユング心理学が到達する地点は共通しているところがある。明恵上人と聖フランチェスコという2人の宗教上の偉人がほぼ同時代を生きていたことにも示されるように、中世における仏教の展開は、仏教がグローバル化するための素地を示してくれるものと考えられるだろう。今後は華厳思想などを視野に入れつつ、引き続き議論を深めていきたい。

ⅱ. 現代の意識を探る

平成26年度は、村上春樹に関するすぐれた評論で知られ、早稲田大学名誉教授・文芸評論家である加藤典洋先生をお迎えし、「世界から一人が滅ること、そして、することもしないこともできる人たちのことなど」という演題で講演をしていただいた。加藤氏は、ラカンの思想などをベースに、「『ないこと』がある」という事態と「『ないこと』がない」という事態の違いについて述べ、そこには言語が関わること、その地と図の反転が現代における有限性の問題を考える際に重要であることを指摘した。世界が無限であった時代において、自由はわかりやすくシンプルであったのに対し、原発事故に象徴されるように否が応でも世界の有限性をつきつけられる現代では、自由は圧力からの解放のようなシンプルなイメージで捉えられるものではない。「することもできるがしないこともできる」という猶予を含んだ状態をベースにもった、より高度な自由が実現されつつあり、そのためにさまざまな変化が起こりつつあるということが示唆された。これは、センターの大人の発達障害についてのプロジェクトで、畑中千紘助教が現代の大学生がロールシャッハ・テストにおいて不確定な反応を示すことを指摘したこととも重なり、興味深い。

The International Society for Psychology as the Discipline of Interiority第2回大会での基調講演

その他にも、大学生の意識のあり方を捉えるために描画研究を開始した。大学生150名を対象に、対人関係と自己に関連した質問紙と、①家の絵、②その家のなかの一室、という2枚の絵を描いてもらう「室内画」を実施した。その結果、質問紙で他者への協調的な意識が高い群では、絵に「中庭」「ベランダ」などの中間領域を有意に多く描いている等の結果が得られた。これは、自分の領域を象徴する家の内側と、その外側との間に、内でも外でもあるようなマイルドな空間をイメージできることが、現代のポジティブな対人意識において大きな役割を果たしていることを示唆している。これについては、次年度により精緻な分析を行い、引き続き成果を発信していく予定である。

その他、継続的に行ってきた震災後のこころのケアの活動としての宮城県石巻市への訪問は26年度も続けられ、それらの活動の成果は国内外において発信された。

研究プロジェクト

子どもの発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

■研究の概要

発達障害をめぐっては、脳科学領域の研究が著しく進展しつつある今日では、それを何らかの中枢神経系の障害から生じる認知発達の問題として捉える見方が主流となっている。従来、発達障害の子どもに対しても、セラピストとの遊びを通じた心理療法であるプレイセラピーが行われてきたが、こうした昨今の潮流から、発達障害の対応においてプレイセラピーの有効性を否定する立場も存在し、薬物療法と並行して具体的なスキルの獲得を目標とした療育やガイダンスが行われることが多い。その一方で、発達障害の子どもへの心理療法によるアプローチが成果をもたらすことは、多くの臨床家の実践知として確かなものであり、プレイセラピーが奏功した事例研究も多数報告されてきた。

しかしながら、具体的にプレイセラピーがどのような点で有効であり、子どもにどのような変化もたらすことが期待できるのかについては不明なことも多く、客観的指標を用いた検討まではなされていない。発達障害への社会的関心が高まるとともに、それへの対応が急務となっている現在においては、心理療法の専門家を対象にした事例研究だけでなく、医療・教育関係者など隣接領域の専門家にも認められる客観的・実証的な形で、プレイセラピーの有効性と意義を発信していくことが重要であろう。

こうした背景から、平成22年度より発足した本プロジェクトでは、発達障害の診断を受けた子どもに対して6カ月間のプレイセラピーを行い、子どもにどのような変化が見られるのかを発達検査などの客観的・数量的指標をもとに検討してきた。その成果はすでに、学会発表、論文、書籍という形での学術発信のほか、講演会やセミナーの形で社会に還元してきている。

また、本プロジェクトは、専門の訓練を受けたセラピストによって心理療法が実施されるため、研究そのものが実践的な発達障害への支援であるところに大きな特色と意義がある。平成26年度には、新たにインターネットを通じた研究協力者の募集を開始し、新規に12ケースの申し込みがあった。1つの事例につき6カ月という期間を要する地道な実践研究であるが、平成27年3月現在で受け入れた子どもの数は延べ28名に上っている。

■平成26年度の研究成果

他機関で発達障害という診断を受けて訪れる子どものなかには、プレイセラピーや検査の関わりを通じて見ると、発達障害とは異なるのではないかと思われる子が決して少なくない。これは「発達障害」という見方がある種ブームとなって過剰診断が蔓延しているためとも考えられるが、専門家でさえも判断を誤りやすいようなグレーゾーンの子どもたちが数多く存在することの裏返しでもあるのだろう。こうした問題がある現状では、「発達障害と思われてしまう子ども」にはどのような特徴があり、真性の発達障害とはどう異なるのか、そして、そのプレイセラピーにおいて何がポイントになるのかといったことを解明することは、重要な意味をもつと思われる。そこで平成26年度に、発達障害の診断を受けた研究協力者のなかから「発達障害と見立てられない子ども」のケースを取り出し、複数事例の分析を重ね合わせることで、上記の点について考察を試みた。

その結果、発達障害と見立てられない事例は、確かに言葉の遅れや抑制のきかなさなどの発達障害に由来するとも考えられる状態像を示していた。だが、そうした特性は必ずしも発達障害だけに特異的なものではないし、それらが比較的恒常的な発達障害の場合と異なり、家族や学校環境などの関係性の影響を受けて生じているものであると考えられた。また、「障害」の範疇ではないにしても、親との関係や担当セラピストとの関係、あるいはプレイセラピーのなかで展開される遊びにおいて、「分離の弱さ」や「狭い世界での循環・停滞」といった発達面でのアンバランスも認められた。実際に治療的進展が見られた事例においては、プレイセラピーを通して「分離」の作業が展開されていたことが見出された。こうした「分離」によって、他者と異なる「私」という中心軸が成立することで、環境に揺さぶられることが少なくなり、停滞していた言語・社会的能力の成長も生じていたと考えられた。

■今後の展開

今後もプレイセラピーの受け入れを継続し、発達障害の子どもに対する心理療法の機会を提供していく（プレイセラピーを希望される方はセンターウェブサイト「センターからの募集」欄 http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/recruitment/2014/04/play_therapy.html をご覧いただきたい）。そうした実践を通じてデータの蓄積をはかり、これまで得られた知見をさらに定量的に裏付けていきたい。また、研究実践の積み重ねから、6カ月を超えてセラピーを継続した長期事例も複数得られてきた。そうした長期事例をもとに、長期的なセラピーが何をもたらしうるのかということを、プレイセラピーのプロセスと発達検査の検討から明らかにしたいと考えている。

研究プロジェクト

終末期に対する早期支援

沖永隆子（京都大学人間・環境学研究科博士後期）＋ カール・ベッカー（京都大学こころの未来研究センター教授）

■事前要望書ACPとは

日本の超高齢者には、延命が可能となった反面、多くの延命措置が実施されるため、逆に患者や家族の望む終末期を迎えられないケースが目立つ。そこで判断能力を喪失する前に意思決定を行う必要がある。意思決定に際して、以下の４種類の論理的課題があると考えられる。

1. 患者は、望む医療やケアが受けられない。自然死がかなわない。
2. 家族は、患者に代わって医療の内容決定を突然迫られ、混乱を来たす。
3. 医療者は、延命が最善なのか、誰の思いを尊重させるのか、混乱を来たす。
4. 国民（納税者）は、過剰な医療に伴う医療保険料負担の増加を余儀なくされる。

患者本人の尊厳を遵守するためには、人生の終焉を見据えた人生設計や、意思決定内容の確認を包含する事前要望書・事前計画書(Advance Care Planning, 以下ACP）がある。2014年度は、意思決定とその支援に関する大がかりなアンケート調査を試みてきた。近畿一円で行われた「終末期の生き方」という講演会において、20～80代の男女、総計1,000名以上の聴衆に対し、講演終了後にアンケート調査を実施した。本年度の研究の位置づけは、次年度の「ACPの試作化と利用の検証」に向けて、日本人の文化に即したACPの開発のための土台となる。以下、事前要望書作成に関する調査の分析結果を紹介する。

■事前要望書の調査分析

近畿在住975名の回答者は、男女はほぼ同数、平均年齢は55.5歳で、回答者の95%は自分の要望を作成しておらず、作成した人はわずか5%に留まった。実際の医療現場では、ほとんどの入院患者は事前要望書等を所有していないが、本調査でも同様の結果が得られた。意思決定支援を促進させるために、この原因を今後明らかにしていく必要がある。

本調査の自由記載欄には、ほとんどの回答者が意思表示をしておく必要性を強く感じる一方、実行に移していない等の記述が散見された。作成に肯定的・積極的な立場と、作成に否定的・消極的な立場の代表的な意見を以下に紹介したい。

〈作成に肯定的〉

作成したい・更新（変更）したい:「人生の節目、たとえば誕生日や記念日などに定期的に作成したい」「気持ちの変化があればその都度定期的に書き替え更新させたい」「要望をエンディングノートに書き、そのつど書き直しを行っている。70歳になったら作成したい」「満80歳になったら作成するつもり」など、具体的に何歳になったら作成したいといった記述があった。

社会への要望としては、「ACPの定形を書物にして公刊してほしい」「日本の病院で入院時に事前要望書の記入を義務化してほしい」「どの病院でも統一して記入するようになれば、皆が対応してくれると思う」「この問題をマスコミで多く取り上げてほしい」等の記述があった。

〈作成に否定的〉

情報不足:「どういう医療措置があるのか知らない」「どこまで何を決めたら良いのかわからない」「要望書、代理人決定書の法的効力について知らない」という終末期医療に対する無知が目立った。また切迫感・危機感がないという回答としては、「死を身近に感じた時でなければ、作成には至らない」「事前要望書は事後に確認できないのではないか」「書き替えることが多くなりそう」と不安がる表現も目立った。

死のタブーとしては、「縁起でもない」「事前指示書を書こうと思ったことはあるが、死から逃げたいために、先延ばしにしている」「82歳の義母を嫌な気持ちにさせてしまいそうで話しづらい」といって、死の話を遠ざける傾向にあった。

さらに、要望書を書いても、実行してもらえない不安としては、「家族が実行してくれるか不安」「家族で話し合っても価値観に差があり実行困難なのでは」「要望書があっても活用されないかも」「自分ひとりで考えることに限界があると思う。自分自身が医療診断を受けたとき、正常な精神で作成できるかが心配」「相談した人（相手）と自分の考えが一致しないとき、どこまで歩み寄れるのかが疑問」などの意見が山積した。一見「否定的」に見える意見も、「決定した方が良い」とにおわせながらも、情報不足や縁起が悪いという感情などによって、実行に移せない背景が見えてきたのである。

■考察

今回の調査結果より、回答者の大多数が事前要望書の必要性を感じながらも未作成の実態が確認され、その原因が主に手続きに関する情報不足、サポート不足、相談相手やファシリテーター役を担う専門家不足などの問題が、質的分析により明らかになった。また、終末期全般に対する回答者（一般市民）の切迫感のなさや意識の低さ、「縁起が悪い」とする文化的背景の問題、さらには、勉強不足や誤解などの問題も浮き彫りになった。

上記の問題解決に向けて、今後も妨げとなる原因を心理学的に分析し、医療機関や教育機関などの協力を得て、事前要望書の理解と実践を普及させていきたい。

研究プロジェクト

出生をめぐる医療と倫理

赤塚京子（京都大学人間・環境学研究科博士後期）＋ カール・ベッカー（京都大学こころの未来研究センター教授）

■「生殖の善行」原則

近年の幹細胞研究の進展や生殖補助医療技術（ART）の高度化により、生殖のあり方が大きく変わってきている。また、社会的に不妊症の存在が認知されるようになり、人工授精や体外受精（IVF）は、ポピュラーな技術の1つとして選択されるようになってきた。さらに、最近では従来の診断技術よりも侵襲性の低い新型出生前診断が登場したことで、より安全かつ手軽に胎児の健康状態を把握することが可能となり、生殖の場における親（カップル）の選択肢が広がっている。

今後、日本で高度な生殖補助医療をめぐる倫理的問題を議論していくにあたり、海外での議論を参照しておくことは有益であると言えよう。そこで、本研究プロジェクトでは、英米圏を中心に、近年活発に議論されている「生殖の善行」原則（夫婦が持ち得る子どもの中から、最善の人生を送ることが期待される子どもを選択すべきという考え方。以下 “Principle of Procreative Beneficence” =PPBという）をめぐる議論の批判的分析を行った。

■批判的分析

本研究の対象となった56件の論文をジャーナル別、出版年別に分析した結果、ジャーナル別では、PPBが発表された論文を掲載したBioethicsが22件と最も多かった。これに次いで、生命倫理学分野で最もインパクト・ファクターが高く、PPB提唱者であるサヴァレスキュJulian Savulescuが編集長を務めるJournal of Medical Ethicsも11件ヒットした。

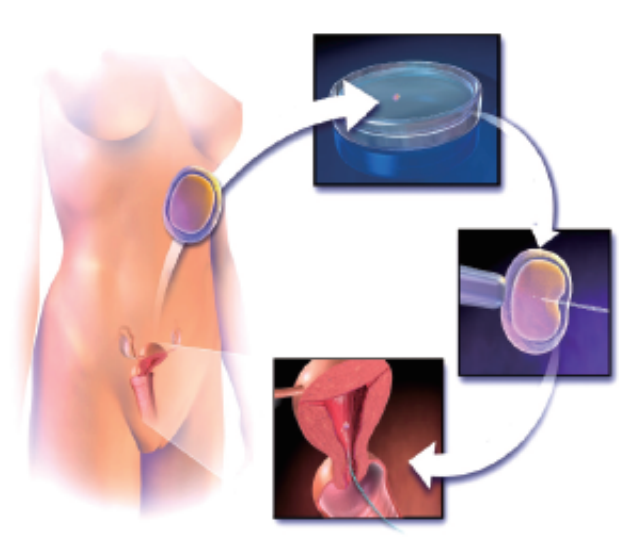
年代別では、年によって多少のバラつきはあるものの、2001年のPPB論文の出版以来、おおむね右肩上がりに変動している。そのなかでも特に、パーカーMichael ParkerによるPPB批判とそれについてのサヴァレスキュの応答論文が発表された2007年以降、PPBへの注目はいっそう高まっており、近年ではほぼ安定して毎年10件弱ほどの論文が発表されている。出版から10年以上経た現在でもなお、PPBに対する注目度が高いことを示していると言えよう。

議論の内容そのものについては、先述したパーカーに代表されるようなPPB批判を中心とするものが多く見られたが、2009年にサヴァレスキュとカヘーン Guy KahaneがPPBを再弁明したことを受けて、これまでPPBに対して行われてきた賛否の議論がどの程度妥当なものであったのかを検証するようなメタ分析も出てきている。

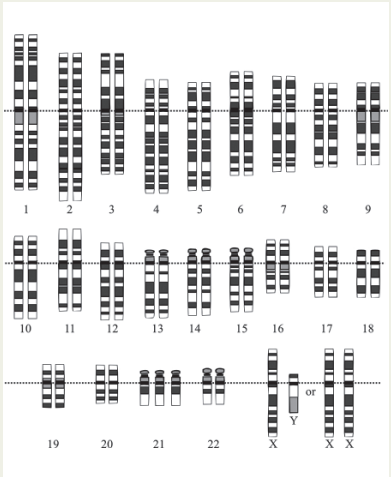
■サヴァレスキュの論文

本プロジェクトの学術的貢献として、2015年3月末に、サヴァレスキュによる論文（“Procreative Beneficence: Why We Should Select the Best Children”）の日本語訳（「生殖の善行――私たちが最善の子どもを選ぶべき理由」）をオープン・アクセス・ジャーナルとして掲載している。従来、同論文は欧米の哲学・倫理学領域において注目を浴び、活発な議論が展開されてきた。上記のような形で同論文の翻訳が出版されて、今後、日本においても少なからず注目を浴びるであろう。

また翻訳論文の出版に伴い、「解説――生殖の善行原則について」も掲載される予定である。2007年以降、PPBは理論として洗練され、PPB批判も精緻になってきている。翻訳論文を目にする者にPPB議論の動向もあわせて提示することは、今後の生殖をめぐる倫理的議論にとって一助となるであろう。



人工受精は侵襲性を伴い、体外で「最善」の受精卵を選んで戻すべきかは、議論を呼び起こしている。



DNA分析によって、生まれる前に胎児のさまざまな特徴を事前に読めるようになっている。

研究プロジェクト

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

磯村朋子（京都大学霊長類研究所博士課程大学院生）＋小川詩乃（京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会特別研究員 PD）＋吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター教授）

本研究プロジェクトでは、発達障害の子どもを対象に、継続的な学習支援・コミュニケーション支援を実践として行いながら、発達障害の認知的特性を実験的に検討する基礎研究を行っている。以下に、その一例を紹介する。

■自動的な表情弁別と行動反応に関する実験的検討

他者の表情は、私たちの生活のなかで最も重要な社会的手がかりのひとつである。他者の表情を読みとり、相手の感情を認知的に理解することはもちろん重要であるが、より無意識的で自動的な表情処理も私たちの円滑な社会相互作用の形成に重要な役割を果たしていると考えられている。そのような潜在的な機能の障害あるいは特性が、発達障害をもつ子どもにおいて日常場面での社会的やり取りの難しさに影響している可能性が十分に考えられる。今回、本プロジェクトに参加している自閉症スペクトラムをもつ児童を対象に、自動的な表情弁別とそれに基づく行動反応について実験的検討を行った。

様々な表情のなかでも、「怒り顔」は脅威・危険のシグナルであり、いち早く発見しなければならない。そのため、怒り顔のような脅威のシグナルに対して、無意識のうちに視線を迅速に向けられるように私たちの視覚システムは進化してきたと考えられている。このような現象を「怒り顔優位性効果」と呼び、無意識的・自動的な表情処理が行動に反映されるために生じると考えられる。私たちは生まれつき、あるいは生後かなり早い段階でそのような効果を示すようになると言われている。

今回、自閉症スペクトラム児においてその機能がどのように働いているかを調べるため、自閉症をもつ／もたない児童を対象に、たくさんある線画表情の中からひとつだけある怒り顔または笑い顔をできるだけ速く見つけてもらうという課題を行い（図1）、児童が怒り顔または笑い顔を検出するのにかかる時間を測定した。その結果、自閉症スペクトラムをもたない児童（7〜10歳）では、怒り顔を笑い顔よりも速く発見するという怒り顔優位性効果が顕著に見られた。一方、同年齢の自閉症スペクトラム児では、そのような効果を示さない児童が多く見られた（図2、Isomura et al., 2014）。しかし、自閉症スペクトラム児では、年齢が上がるにつれて効果が増してくるという発達的な変化が見られ、さらにその変化は児童のソーシャルスキルの向上と関連がある可能性が示唆された。

これらの結果から、自閉症スペクトラム児において、自閉症スペクトラムをもたない児童と同様のメカニズムではないかもしれないが、表情処理の力が発達過程で向上する可能性が示唆された。また、怒り顔優位性効果の大きさはソーシャルスキルの高さと関連性をもったことから、表情に対する知覚の向上は、彼らのソーシャルスキルの向上、ひいては円滑な社会的相互作用の形成に寄与することが考えられた。

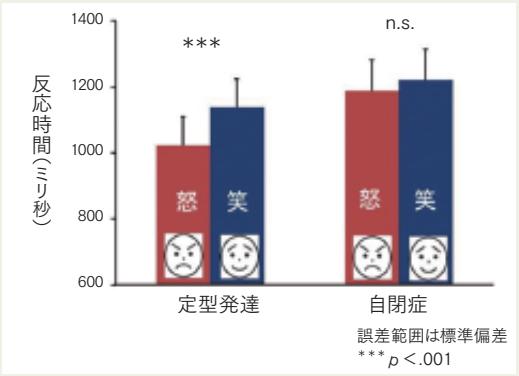


図2　結果
自閉症スペクトラムをもたない児童（左）ともつ児童（右）における怒り顔（赤）と笑い顔（青）の検出時間（Isomura et al., 2014より改変）

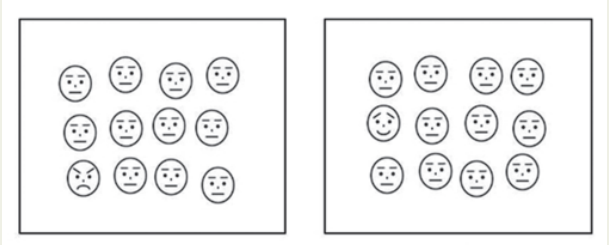


図1　課題の例
標的刺激として怒り顔が呈示されている場面（左）と笑い顔が呈示されている場面（右）

■今後の展開

今後は、支援と研究が融合している本プロジェクトの特徴を活かし、実験場面だけではわからない児童ひとりひとりの実態に即した研究の展開を目指したい。これまでにも実験的データに基づく児童の特性を保護者の方にフィードバックすることで、より客観的な視点から子どもを理解することにつながるという意見をいただいているが、今後も積極的に保護者とのやり取りを重ねていきたいと考えている。同時に、こうした基礎研究の結果から支援内容を見直し、より体系的な支援の構築を目指している。

引用文献
Tomoko Isomura, Hiroyasu Ito, Shino Ogawa, & Nobuo Masataka “Absence of Predispositional Attentional Sensitivity to Angry Faces in Children with Autism Spectrum Disorders”. Scientific Reports, 4, 2014.

研究プロジェクト

科学と思想・哲学との対話を通じたこころ観の再構築

熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

わが国は敗戦による壊滅の中から奇跡的な復興を遂げ、一躍、世界に冠たる経済・技術大国となった。その中で、経済・技術面のみならず、健康、教育、文化など、あらゆる側面で、わが国は長足の進歩を遂げたかに見える。しかしながら、それはおおよそ物質面に限定されており、精神的な側面では、進歩どころか大きな後退・混乱が認められるのではないか。物質的・経済的には満ち足りているように見える一方で、自殺率が毎年世界トップクラスを記録し、学校でのいじめや、若者の引きこもりが問題化していることなどは、表面的な物質的繁栄の陰で、国民の精神面がないがしろにされてきた何よりの証左であろう。しかし、2011年3月11日の東日本大震災や、それに続く福島の原発事故を経て、過度な物質主義や個人主義を反省し、「人と人との繋がり」や「絆」などの精神性や伝統的価値を再評価する流れも起こり始めている。

こうした背景から、本プロジェクトでは、閉塞した現代社会にとって真に望まれる新たな価値基準の創出に向けて、国内外の科学者や思想家、宗教家たちが対話と議論を重ねることで、「東洋と西洋」、「科学と宗教」などの多様な視点から「こころ」について再考し、これからの研究のあるべき方向性を模索する。加えて、科学者、思想家、宗教家間のネットワーク構築を進めた。

■研究の方法

ワークショップやセミナー、シンポジウムを開催する中で、異分野の研究者や宗教者で議論および情報交換を行い、精神性、こころについて多角的に検証を行うとともに、これからの学術研究の意義やあり方について考察した。

■研究会・ワークショップ

2014年4月11日、12日、京都ホテルオークラにて、こころの未来研究センターとMind and Life Instituteにより共催された国際会議『Mapping the Mind（こころの再定義）』（科学者・宗教者とダライラマ法王との対話）において、シニア研究者とシニア宗教者による学際的な対話が行われた。本プロジェクトは、同国際会議の事務局を担い、企画運営をサポートした。

◎4月11日（土）

開会式

開会挨拶1　アーサー・ザイエンス（アマースト大学名誉教授／Mind & Life Institute代表）

開会挨拶2　吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター長）

セッション1　モデレーター：アーサー・ザイエンス

ダライ・ラマ法王14世による基調講演

今枝由郎（元フランス国立科学研究センター研究ディレクター）「初期仏教におけるこころ」

トゥプテン・ジンパ（マギル大学兼任教授）「仏教心理学と瞑想実践に関する考察」

リチャード・デヴィッドソン（ウィスコンシン大学教授）「こころを変えて脳を変える：瞑想の脳科学的研究」

セッション2　モデレーター：入来篤史（理化学研究所シニア・チームリーダー／京都大学こころの未来研究センター特任教授）

ジェイ・ガーフィールド（イェールNUS教授）「認識の錯覚：仏教瑜伽行学派の観点から」

アーサー・ザイエンス「量子物理学におけるこころの役割」

森重文（京都大学数理科学研究所所長／教授）「芸術との比較における数学：求めるものは応用か、真理か、それとも美か？」

◎4月12日（日）

セッション3　モデレーター：入来篤史

北山忍（ミシガン大学教授／京都大学こころの未来研究センター特任教授）「文化神経脳科学：文化・脳・遺伝子をつなぐ」

ジョアン・ハリファックス（ウパーヤ禅センター長・創立者／老師）「プロセスベースによる慈悲の位置づけと、慈悲の修練におけるその影響」

下條信輔（カリフォルニア工科大学教授／京都大学こころの未来研究センター特任教授）「潜在的なこころ、共感、そしてリアリティの共有」

セッション4　モデレーター：アーサー・ザイエンス

バリー・ケルジン（ヒューマンバリュー総合研究所所長）「情動の可塑性：健全な社会の構築に向けて」

松見淳子（関西学院大学文学研究科長／教授）「子どものこころを探り、ポジティブな学校環境を創る：心理学におけるエビデンスベースの実践」

長尾真（京都大学元総長）「コンピュータはどこまで人間に近づけるか」

総合司会：熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

マルク＝ヘンリ・デロッシュ（京都大学白眉センター特定助教）

■今後の展望

近年の学術界においては、可視化・定量化に特化した研究成果を大量に提示することが第一義となりつつあるが、人類や社会のためにいかなる意味を持つかといった本質的な問いを設定して、学術研究における問いと回答の質を高めていく必要性があるという結論に至った。今後さらに、学術領域間の壁を、さらには学術と社会との垣根を越えた対話を進めていきたい。

研究プロジェクト

ヒマラヤ宗教精神の研究

熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

1989年にダライラマ14世がノーベル平和賞を受賞し、1997年にはブラッド・ピット主演のハリウッド映画『セブンイヤーズ・イン・チベット』がヒットしたことなどにより、チベットは世界的注目を集めるようになった。また、ヒマラヤの小国ブータンも、GNH（国民総幸福）という特徴的な政策により近年、世界的注目を集め、2011年の国王来日以降は、わが国でも注目度が高まっている。しかし、現在のヒマラヤ関連の情報の多くは、ヒマラヤ地域が現代の国際社会においてどのような政治性を持っているか、という点に着目したものに限られており、同地域の文化的特性、とりわけその精神性についての理解はいまだ十分とは言い難いのが現状である。

以上のような背景から、本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域の文化・精神の象徴的な位置を占める「チベット仏教」と「ボン教」という2大宗教を中心として、同地域の宗教・伝統的精神性の調査を進めてきた。なお、「チベット仏教」は7世紀以後、ブータン、ネパール、シッキム、ラダック、北東インド、中国西部、さらにはモンゴルにまで広汎に伝播し、それぞれの地域で独自の展開を遂げている。一方、「ボン教」についてはいまだ謎に包まれている部分が多く、今後の詳細な調査を待たねばならないが、これらの地域の大半に、仏教ほどの浸透度はないものの、ほぼ同様の広がりを見せているのではないかと予想される。そこで、本研究は、これら2大宗教の伝播と地域化に焦点を当てることによって、広くヒマラヤ文化圏全般における宗教精神の普遍性・共通性と、地域性・個別性の双方を理解することを目指し研究を推進した。

■研究の方法・内容

本プロジェクトでは、「ヒマラヤ宗教研究会」を定期開催し、「仏教」と「ボン教」というヒマラヤ文化圏の2大宗教を中心として、同地域における宗教的精神のありようを、宗教哲学、歴史学、文化人類学などの視点を通して、多角的・包括的に検証してきた。

「仏教」については、1.「チベット仏教」、2.「モンゴル仏教」、3.「ブータン仏教」、4.「その他ヒマラヤ地域の仏教」、と区分し、「ボン教」については、1.「チベットのボン教」、2.「ブータンのボン教」、3.「その他ヒマラヤ地域のボン教」、と区分する。

このうち、「ブータン仏教」と「ブータンのボン教」の研究については、別途推進している「ブータン仏教研究プロジェクト」と連動させた。

平成26年度には、ブータン仏教の少数宗派（サキャ派・ゲルク派）の歴史と現状を解明するために、ブータンにおいてフィールドワークを行った。サキャ派の歴史と現状についての研究成果は、論文として公表することができた。また、ボン教典籍Srid pa'i mdzod phugの精読に基づき、ボン教が仏教の範疇論を参考にして独自の教義を作り上げたことを特定した。特に心や心の作用の分類について、ボン教教義と仏教教義を比較し、その考察結果を国際仏教学会で発表した。また、安田章紀研究員はブータン仏教の二大宗派であるニンマ派の著作群についての研究成果を、松下賀和研究員はブータン仏教の二大宗派であるカギュ派のマハームドラー理論についての研究成果を、それぞれ論文として公表した。

■研究会・ワークショップ

◎第2回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時　2014年6月2日（月）16:30〜18:00
場所　京都大学こころの未来研究センター225会議室
発表者　安田章紀（京都大学こころの未来研究センター研究員）「ゾクチェン概論」

◎第3・4回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時　2014年10月6日（月）16:30〜18:00／2014年11月17日（月）17:00〜18:30
場所　京都大学こころの未来研究センター225会議室
発表者　小西賢吾（京都大学こころの未来研究センター研究員）「フィールドからみるボン教研究――ボン教の地域性に着目して」

◎第5回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時　2015年1月19日（月）17:00〜18:30
場所　京都大学こころの未来研究センター225会議室
発表者　松下賀和（京都大学こころの未来研究センター研究員）「チベット仏教僧院における生活」

◎第6回京都大学ヒマラヤ宗教研究会
日時　2015年3月25日（水）17:00〜18:30
場所　京都大学こころの未来研究センター225会議室
発表者　山口周子（中村元東方研究所専属研究員）「モンゴルの文字と精神文化――ヒマラヤを超えた文字と教え」

■今後の展望

平成27年度からは、研究題目を「ヒマラヤの宗教精神とその現代的意義」と一部変更する。平成26年度同様、古典文献の研究を継続するとともに、現地調査をより意識的に行い、また異分野間の研究連携を進めることで、現代的な視点をより意識的に取り込んでいく予定である。

研究プロジェクト

国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究

熊谷誠慈（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

■研究の背景・目的

GNH（国民総幸福）という概念は、1970年代に、ジクミシンゲ・ワンチュク第4代ブータン国王により提唱され、ブータンの国策の主軸に据えられた。以後、GNHはブータンの代名詞となり、各国の幸福政策のモデルの1つとなっている。世界的な注目が高まる中、2012年には国連において「世界幸福デー（International Day of Happiness, 3月20日）」が制定されるに至った。

第二次大戦終結後、ブータン研究を担ったのは主に歴史学や人類学であったが、1990年代の「王立ブータン研究所」（Centre for Bhutan Studies）設立以降、国際GNH学会の開催などによってGNH研究は一気に加速し、現在まで経済学者や心理学者、開発学者などが中心的な役割を果たしてきている。

ただ、ここで忘れてはならないのはブータンが仏教国だということである。国民総幸福を含む同国の先進的政策が、あくまでその基盤を同国に深く根付いた独自の宗教的倫理観の上に置いている事実は看過されがちである。この点を無視して、ブータンの本当の理解には到達し得ない。そこで本研究では、国民総幸福という広く知られた概念の根底に存在する倫理観および宗教観の仕組みについて、広くチベット・ヒマラヤ文化圏全体を視野に収めつつ、多角的に検証してきた。

■研究の方法・研究内容

今年度は、以下の3つの柱に沿って研究を進めてきた。

1．文献研究

文献学的手法に基づいて古文書を解析することで、ブータン仏教の思想や幸福観、倫理観の解明を進めた。特に、ブータンの国教的位置づけにあるドゥク派の開祖ツァンパギャレー全集のクリティカルエディションならびに試訳を目下作成中である。同全集はブータンの国家的アイデンティティの基底をなすものでありながら、文献へのアクセスが困難であったために、これまで研究がなされてこなかったことから、その内容解明は今後のブータン精神史研究に大きく寄与することとなる。

2．フィールド研究

本プロジェクトでは、ブータン仏教の多数派（ドゥク派・ニンマ派）よりも、少数派（サキャ派・ゲルク派）に焦点を当てて現地調査を行った。理由としては、少数派の伝統は途絶えつつあるため、情報の回収を急ぐ必要があるからである。今年度の調査により、サキャ派の伝統はすでに途絶えてしまい、ゲルク派の伝統も存亡の危機にあることが判明し、論文として公表した。今後は、両宗派の歴史、現状、課題について、隣国の事情とも比較しながら考察を進めていく予定である。

3．学際的研究

今年度は、ブータン研究会等を通じて、異分野のブータン研究者間で情報交換・共同研究を進めた。ブータン王国憲法や国民総幸福政策のみならず、同国の産業や医療、農村開発などにおいて、仏教的理念が重んじられていることを確認できた。

以上の3領域を繋ぐ研究成果として、Bhutanese Buddhism and Its Culture（Seiji KUMAGAI, Kathmandu: Vajra Publications, 2014）を出版した。同書の出版祝賀記念会（2015年2月27日）には、ダムチョ・ドルジ内務大臣が臨席しニュースでも放送されるなど、ブータン国内においても大きく取り上げられた。

■研究会・講演・シンポジウム

1．ブータン文化講座

第5回「『関係性』から読み解くGNH（国民総幸福）」上田晶子（名古屋大学大学院開発学研究科）2015年12月4日

上は熊谷の編著書*Bhutanese Buddhism and Its Culture*を紹介するブータン国営放送のニュース、下は出版祝賀記念式典にて、同書を紹介するダムチョ・ドルジ内務大臣

2．京都大学ブータン研究会

第9回「サムテガンBasic Health Unit（BHU）からの報告」藤澤道子（京都大学東南アジア研究所研究員）2014年5月15日

第10回「ブータンの新生児に寄り添って：3年間の活動報告と今後の展望」西澤和子（京都大学霊長類研究所研究員）2014年7月17日

第11回「ブータンにおける高齢者ケアの実践」坂本龍太（京都大学白眉センター特定助教）2015年1月20日

■今後の展望

今後は、「ヒマラヤ宗教研究プロジェクト」（連携研究プロジェクト）や「ブータン仏教研究プロジェクト」（科研）などとも連携し、より多角的な視点からGNHの概念を捉えなおす予定である。また、京都大学ブータン研究会では、研究者のみならず学生の発表も歓迎することにし、若手研究者の育成にも力を注いでいく予定である。

研究プロジェクト

孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究

――京町家「くらしの学び庵」プロジェクト

清家　理（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教）

■研究背景と目的

〈研究目的〉

本研究では、地域住民の孤立や孤立に伴う心身・社会活動面の不健康や障害予防を目的に、「からだ」「こころ」「社会活動」三側面からの健康づくりによる互助・自助強化を図る、双方向型学習プログラム開発を実施する。

〈研究の必要性――研究の背景〉

日本は、超高齢社会を迎え、地域社会や家族単位が大きく変化した。以前は、多世代の同居や交流が多く、介護等の生活問題を互助・自助で解決する術が地域コミュニティに内在していた。しかし現在は、老老世帯、独居世帯、高齢両親と独身実子世帯等、家族単位の縮小化、就労困難による経済活動の停滞で、閉じこもり・孤独・貧困に象徴される閉鎖的な様相――孤立・無縁――を見せている。そのため、生活上の問題（健康・経済・介護等）が発生しても、外部には見えない形で問題が悪化し、最悪の場合は、孤独死を迎える事例が増加している。つまり、地域コミュニティの互助・自助力に限界が生じていると言える。

そこで本研究プロジェクトでは、地域住民の孤立や孤立に伴う、心身・社会活動の不健康や障害予防を目標とした、「からだ」「こころ」「社会活動」三側面における健康づくりによる互助・自助強化を図る、双方向型学習プログラム開発を実施した。

表1　平成26年度プログラム概要

座学（講義）＋フィードバック（相互交流・意見交換会）＋よろず相談会（個別相談・悩みの共有）
初級1期：H26.10.1～H26.12.17（6回）／初級2期：H27.1.17～H27.3.28（6回）

	講義テーマ	コンテンツ	よろず相談
第1講 医学	毎日できる運動で衰え知らず！	①腰痛の仕組みと予防 ②関節の痛みとのつきあい方 ③若々しさを保つ姿勢と痛み予防 ④いつでもどこでもできるエクササイズ	
第2講 医学	老化と病気の予防で錆び知らず！	①自分の健康は自分で守る（生活習慣病予防） ②老化とフレイル ③認知症とは ④人生の最終段階を考える	○
第3講 栄養学	毎日できる栄養管理で病気知らず！	①サクセスフルエイジングと健康寿命 ②行動と食習慣の見直し（Q&A） ③噛むことの重要性 ④食べる順番を考えること ⑤ちょこまか運動のススメ	
第4講 心理学	健やかなこころで暮らす知恵	①健やかなこころで暮らすこと －おだやかに、きげんよく、たのしく、いきいきと－ ②ブータンの幸せ ③日本人の幸せ ④健やかなこころで暮らすために ・お手本の人、楽しみ探し、自分らしく生きる、習慣（学び、よかったことメモ）	○
第5講 社会福祉学・保健	介護って何？	①介護が必要になるとき ②介護や支援を必要としている人のキャッチ方法 ③介護を必要としている人のお手伝いのために	
第6講 経済・社会保障	老後の備えって？ ～アリとキリギリス物語～	①老後に必要な経費と準備 ②相続とは ③相続のシュミレーション	○

■平成26年度の実践

（1）プログラム

平成26年度は、多職種、多機関が、講師や相談支援を担う、ステップアップ方式の双方向型学習プログラムを地域住民に提供した（表1）。従来、地域での学習は、1回シリーズ、もしくは複数回シリーズであっても、座学形式が多い状況であった。ステップアップ方式の中で、段階が進むにつれ、グループワークやフィールドワーク等、講義参加者の主体的参加が可能になる仕掛けにより、双方向型学びスタイルを通じた、新しい人間関係の構築もねらいとしている。

（2）参加者属性

平成26年度は、72名の参加者がおり、修了者（3回以上参加者）は50名（69.4％）であった。参加者の年齢は、後期高齢者に該当しており、家族と同居している者が80％以上を占めた。地域で世話役を担っている人も半数を超え、家族および家族以外の人とのつながりも有している状況であった。

（3）学びの成果

学んだことを生活にどの程度活用したい意向を有しているか、講義毎に自記式アンケートで調査したところ、医学（予防医学）・心理・福祉領域を中心に、高い活用意向度が確認された。一方で、学んだことを他者のためにどの程度活用したい意向を有しているか、同じく講義毎に調査したところ、医学（運動・理学療法）・心理・福祉・貯蓄などで高い意向度が確認された。この結果は、よりよい生活の術になりうる具体的な方法や手段を他者に伝えやすいことが考えられる。学びの成果を学習当事者のみならず、他者にも伝えようとされている意識が確認され、本プロジェクトの意義達成に一歩近づいている結果だと言える。

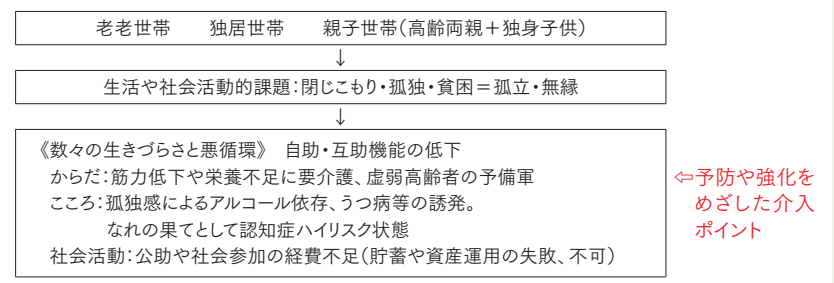


図1　プロジェクトの背景

研究プロジェクト

倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善

清家　理（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教）

■研究背景と目的

本研究の目的は、認知症に特化した家族介護者のWell-beingを測定し、適切な支援介入もしくはセルフケアの時期と量を専門職、介護当事者が把握・確認できる尺度の開発である。

これまでの介護負担に関する尺度は、ネガティブな側面を測定するものが主流であった。ZBIを基軸にプラスアルファの要素を盛り込み、因子分析を経て、α値で妥当性・信頼性を検証することに終始していたと言える。家族介護者にとって、尺度を用いた測定結果が、よりよい介護の契機にならなければ、尺度は無用の長物である。過去、30年間の反省点は、介護実施者の行動心理の多面性、社会性が包括的に考慮されていなかったことである。

■段階的研究結果の反映：転帰調査における質的データの変数化作業

本研究では、まず介護者の介護に伴う1年間の身体的・心理的・社会的変容を追い（転帰）、その結果を新尺度の変数に変換させるプロセスを経た。1年間の転帰では、作業1：喜怒哀楽の感情に伴う介護エピソードの内容分析→作業2：介護者の発話を18カテゴリー（1カテゴリーにつき、肯定的reaction、否定的reactionに二分化）コーディング→作業3：介護者の全発話数に占める各カテゴリーに該当する発話の割合を算出（各カテゴリーの生起率）、以上3段階を経てデータ分析を実施した。このうち、各カテゴリーの肯定的reaction、否定的reactionの操作的定義を以下のように実施した。

A：肯定的reaction（できた、よかった、嬉しかった、たのしい、やってみよう）

B：否定的reaction（できない、だめ、無能、悲しかった、怒ってしまう、無駄）

18カテゴリーのうち、肯定的変化があったものは、以下のカテゴリーであった（**表1**）。

■平成27年度の計画：尺度開発で用いる理論

本研究では、家族介護者の包括的な「健康」を捉えるものとして、WHOの健康定義を採用するが、その根拠を以下に述べる。

介護者の状況を測定する先行研究の傾向は、二分化傾向で説明できる。（Walker, 1996, Picot, 1997, 石井, 2003, 広瀬, 2004）。それは、介護体験やそれに伴う行動心理変容が肯定的か、否定的かというものであり、介護者のある側面を特化したものとなっている。つまり、介護者を断片的に把握しているものである。

しかし、介護者を多角的に把握するものとして、『介護に対する評価』(Hunt, 2003)や『認知症を有する在宅高齢者を介護する主介護者の精神的健康に関する研究』（土井,尾方, 2000）が出てきた。Hunt（2003）の研究は、介護に対する評価を肯定的、否定的、中立的に分け、介護に対する意味づけを明確化している。中立的評価が分かりにくいが、ここでは先の見通しが立たない将来への不安、制度や行政への意見や考えを挙げているため、介護者個人の価値観や情動次第でいかようにも（肯定的or否定的）捉えられるものと考えられる。

次に、土井、尾方（2000）の研究は、主介護者の精神的健康と関連する要因を①主介護者要因（要介護者よりも、介護者の年齢が低い〔20歳～49歳〕）、②要介護者要因（常時介護が必要、介護年数が数年未満で浅い）、③調整介在要因（介護者の支援者がいない、経済的に余裕がない）に分けている。

二研究ともに共通するのは、介護に伴う行動・情動評価、精神的健康状況を多角的に分析する切り口であり、本研究でも採用する点である。しかし、いずれも、「こころ・からだ・つながり（社会性）」をトータルに把握した、人間の「真の健康」を測定したものではない。過去、介護負担感、抑うつ、不安などをアウトカムにした、負の精神状態を測定したものは数多くある。介護を通じて自身の人生を豊かにし、人間的成長や満足感、幸福感を感じたというアウトカム、つまり、介護に伴うwell-being向上をアウトカムにする尺度は不足している。

そこで本研究では、介護によるアウトカムについて、「こころ・からだ・つながり（社会性）」をトータルに把握し、well-being向上を図った「真の健康」とするために、WHOの健康定義“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”を採用する。そして、次年度は、転帰調査結果の生起率カテゴリーを変数化したものと併せて、新尺度の試作化、妥当性検証研究へと進めていく。

表1　肯定的変化があったカテゴリー

A：肯定的発話生起率が上昇したもの
コード1：認知症症状への対応
コード6：協力体制づくり（近隣）
コード9：人間関係（近隣）
コード10：支え合い・セルフヘルプ
コード12：介護者自身の将来のこと
コード15：周囲からの情報獲得
コード17：介護者自身のセルフケア
B：否定的発話の生起率が低下したもの
コード2：認知症の人や症状の受容
コード3：認知症の治療
コード4：協力体制づくり（家族）
コード7：人間関係（家族）
コード8：人間関係（専門家）
コード10：支えあい・セルフヘルプ
コード16：介護者の過去の介護体験

研究プロジェクト

大人の発達障害への心理療法的アプローチ

畑中千紘（京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教）

■研究目的

2000年代以降、「大人の発達障害」への社会的関心が高まり、本プロジェクトではこれに対し、理論的・実践的立場から多角的に研究を進めてきた。しかしながら、たとえばDSM-5が改訂されて発達障害の診断基準に変更が加えられるなど、発達障害をめぐる状況は常に変化しており、それに応じて研究の照準も変化させていく必要がある。特に大人の事例にとっては、これまで多くが該当とされてきた「特定不能の広汎性発達障害」といった曖昧な枠組みが廃止されたことが大きいのではなかろうか。

発達障害に注目が集まってからほぼ15年経過した現在、典型的に発達障害らしい特性を示す事例はむしろ減ってきているという臨床家の印象がきかれる。しかしながら、「自分はADHDではないか？　きちんと検査をしてほしい」などの訴えをもって臨床現場を訪れる人は今も絶えない。社会が提示する「発達障害」という枠組みと、人々のこころの変化との微妙な重なりとすれ違いが発達障害という概念をめぐって展開されているように思われる。

本プロジェクトでは、発達障害という概念を出発点として、それらしい特性を示す人たちを本質的に理解するためにどのような視点が有効であるか、また、そうした人々にどのような心理療法的アプローチが有効であるかについて、臨床事例研究や調査研究をベースにして明らかにすることを目指している。さらには、発達障害が照らし出す現代社会のあり方についても検討し、これからのビジョンを提示していきたいと考えている。

■平成26年度の研究内容とその成果

平成25年度には、プロジェクトのこれまでの成果を「理論」「事例研究」「アセスメント研究」「社会・文化的アプローチ」と4つの視点から論じた書籍を刊行した（河合俊雄・田中康裕編『大人の発達障害の見立てと心理療法』創元社，2013年）。これに引き続き、26年度は、特に診断ができるかどうか微妙なケースを中心に、事例研究を重ねてきた。それらはいずれも発達障害という視点から捉えることが可能であるが、現在の診断枠からすれば該当しないとも考えられる微妙なケースであり、まさに現在の発達障害臨床の現状を象徴するような事例といえるものであった。

2014年、研究会の様子

たとえば、成績優秀で大学院まで進学してきたものの、人とはほとんど目も合わせられず、まともに言葉を交わすことも難しいというように、コミュニケーション能力の乏しさとのギャップが非常に大きいケースがみられた。また、別のケースでは自らのことを振り返る内省的な意識や、自分を変えたいという気持ちや努力は感じられるものの、他者についてはいまだ個別の名前を持たない「人間」として自分から遠いものと体験されている（逆に言えば、自身が「人間」未満のものとして体験されている）ようであった。しかし、心理療法で絵を通じたやりとりをしてみると、意外にも相手から取り入れる力がみられたり、セラピストのやりとりの中で初めて他者の存在を体験しているような様子がみられるなど、これまで眠っていたクライエントの力が開花していくような印象を受けるものが少なくなかった。

このような事例を検討していくと、コミュニケーションやイマジネーションに関する弱さがみられるのは確かであるが、それは脳機能の障害によるものというよりもむしろ、発達の機会を得られないままに成長してきたがゆえの発達障害的様相であることがうかがえる。このような人たちは、現実適応の難しさゆえに、能力が低いとか、ともすれば意志が弱く努力を怠っているとみられることも多い。また、引きこもっていたり、ネットの世界に耽溺しているなどで現実に直面しない状況で、変化に対して敏感になっていることもある。このような場合、心理療法家であっても、スキルを教えたり元気づけたりしたくなることも多い。しかし、心理療法の場でていねいに本人の語りをきいていくと、クライエントの中に未熟ながらもピュアなエネルギーが生まれてくる展開の可能性を事例研究は示してくれる。心理療法はコミュニケーションスキルを鍛える訓練的方法ではないのだが、このような場合、スキルのベースとなる本人の主体的な動きが活性化されてくるのに伴って、現実的な適応もよくなってくることが示唆されている。現在ではクリアな目標に向かって段階的に進むようなわかりやすい方法論がもてはやされる傾向があるが、そうではない方法で、実際に成果が出ていることを社会に示していく必要があるだろう。

これらの成果については、次年度以降に調査研究によって補完され、引き続き書籍や論文の形で発表していく予定である。

研究プロジェクト

こころ学創生――教育プロジェクト

吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター教授）

■「こころの科学集中レクチャー」

センターでは毎年、3名の講師による3日間の連続講義と討議「こころの科学集中レクチャー」を行っている。2015年3月4日から6日の3日間で実施された、2014年度の集中レクチャーのテーマは「こころの謎：遺伝から脳、そして主観」。講師は、センターの特任教授であり本レクチャーのコーディネータでもある北山忍ミシガン大学教授、同じくセンターの特任教授である下條信輔カリフォルニア工科大学教授、入来篤史理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダーで、各講義後のディスカッションの進行は内田由紀子准教授によって行われた。

「こころの科学集中レクチャー」の様子

■講義の概要

3日間の講義の概要は以下のとおりである。

講義1　ポストディクション（後付け再構成）、意識、自由意思（下條信輔）

意思決定をした「後」の心理・神経過程が最近注目されており、それを指すポストディクションという語は、プレディクション（予測）からの造語だが、感覚・知覚研究の領域ですでに術語となり、神経過程の解明がすすんでいる。このプロセスを吟味することを通じて、自発性、能動性、自由といった概念について再考する。

講義2　クオリア（感覚の絶対質）とシェアド・リアリティ：「感覚代行」を入り口に（下條信輔）

クオリア（感覚の絶対質）に関する考察は、こころについての思索にとって不可欠だが容易に独我論に陥ってしまう。「シェアド・リアリティ（心理リアリティの共有）」を可能にする心理・神経基盤についての議論と考察によりこころを孤立から救い出すことを試みる。

講義3　不協和の社会・生物モデル：脳神経科学と動物行動学からの知見を中心に（北山忍）

近年の脳神経科学、動物行動学の知見をもとに、意思決定後に生じる認知的葛藤を説明する「認知的不協和の理論」を批判的に検討し、不協和に関する社会・生物モデルを概説する。

講義4　一般的他者のイメージと不協和：文化脳神経科学のアプローチ（北山忍）

文化心理学の枠組では、個の独立を重んじる西洋文化では、一般的他者のイメージは「安心」と結びつき、集団への所属を重んじる東洋文化では「不安」と結びついていると仮定している。この知見を講義3の「不協和の社会・生物モデル」に適用して、その理論的予測とそれを検証する脳波・行動実験を紹介し、今後の方向性を探る。

講義5　ニッチ構築・境界と道具（入来篤史）

人類進化は、道具の使用や言語獲得などの新たな高次認知能力の継続的な逐次付加過程の繰り返しであり、新たな脳領域の出現に伴う脳の拡大がその基盤となっている。本講義では人間の活動を環境ニッチ構築、神経ニッチ構築、認知ニッチ構築という3種のニッチ構築の円環的プロセスとみなす考え方を論じる。

講義6　勘と心の曖昧さ・西洋科学と東洋文化の交差（入来篤史）

近代科学の基本的手法では、まずある現象が成立する「境界条件」を設定してその中で還元される要素を吟味・分析・精緻化して現象を理解することを試みる。しかしこの「境界条件」の設定自体が、要素を再統合し全体を理解するうえで障害となっており、現代科学に閉塞感をもたらしている。こころの研究には、この「境界条件」の横断的融合によって生まれる「高次の拡張された境界条件」を探究する仕組みが求められる。講義ではそれに必要な新たな科学概念や東西の世界観の融合的刷新について考察する。

■受講生の感想から

講義の後には、「こころというテーマに対して様々なアプローチから研究している先生方の話は非常におもしろいと思います。質問やディスカッションの内容や議論が普段とは次元の違うレベルで展開されており、非常に刺激を受けました。（大学院生）」、「今回は神経科学の話題が中心で、心の研究における潮流を感じました。印象的だったのは、話者の先生方が終始示しておられた研究者としての誠実さでした。こうした懐の深い、そして極めて刺激的な議論の場は大変貴重です。（学部生）」など、講義内容や研究に対する講師の姿勢、討議について、多くの感想が寄せられた。

研究プロジェクト

身体と象徴：かたちとちから――力のでる形

木村はるみ（山梨大学大学院教育学研究科准教授）

■行為とかたち

行為は世界への働きかけであり、刻印である。その可視化にはさまざまな次元がある。舞踊もそのひとつである。生き物が描く形姿は、人間が人為的に生産するものばかりではない。鉱物・植物・動物と自然界にはさまざまな形が現れる。人間の視覚に限定されてはいるがミクロ・マクロに常に形は現れている。

たとえば空間上に十字を切るという所作には、宗教的意識以前にその形姿が持つ力があり、その形を取り巻く多次元の空間がある。円形を辿る繰り返しの旋回には意識を超えた（あるいは脱自の）体験が起こり、観る者にもある種の体験を引き起こす。

■コオロコオロと回す

イザナギ・イザナミの国生み神話は、混沌の世界に矛を立てて回す。この二神は天の御柱を回り言葉を交わす。現存する神事の中でも回る行為は珍しくない。また世界にはさまざまな旋回舞踊がある。スーフィーのように自らの背骨を回転軸として自力で回転するもの、イザイホーのように集団で三重の円形をとる舞踊、中心に向かい収縮し拡散を繰り返す舞踊や、中心に火を焚き、あるいは棒を立てて回る集団舞踊もある。日本の古舞踊を見ると、舞楽には「大輪」と呼ばれる舞名目があるが、神聖な二匹の獅子が左右の階段から登壇し、ゆっくりと交差しながら舞台を一周するだけである。「大和舞」では手に持つ榊はゆっくりと円形を描き天を仰ぎ地を払う。「東遊び」の舞人4人は旋回しながら円形に配置を変えてゆき、またもとの位置にもどる。民俗芸能でも早池峰神楽などの山伏たちは激しく跳びながら回り踊る。子どもたちの伝承遊戯にも各地で行われる盆踊りなどにも円形は歌や楽とともに現われる。

本研究でフィールド調査した京都市大田神社の巫女神楽では、立位垂直軸で左回3回、右回3回、左回3回の計9回の間に、太鼓に合わせた鈴振り37回が入る。終了時には鈴を小刻みに鳴らす。出雲大社では、巫女は神への拝礼後、円形にゆっくりと歩く。時計回りに2周しすぐに反時計回りで2周、そして太鼓のリズムが変わると鈴を打ち鳴らしながらさらに同様に2周ずつ巡る。この素朴な神の前での円形演技は両者とも祝詞奏上の後に行われる。舞の原型であり、白衣に緋袴装束での女性の立位の回転、旋回、鈴の音のゆっくりとした連打の響きは共通する。一般に処女の奉仕とされる舞が、大田神社では閉経後の女性であることは興味深い。御田植神事などの早乙女舞は初潮前の女子が奉仕する。女性のカラダと力の出る形のひとつの象徴をここに見ることができる。

■芸能とホト

女性の生殖器官とその機能は、現存する神事での力と形にも反映し、日本神話における「ホト」は、生死に関わる女神のカラダの至聖所である。内蔵する器であり境界、わが国の芸能神であるアメノウズメノミコトは、植物を身に纏い、ホトに裳紐を垂れて岩戸の前で太陽再生のワザオギ（俳優）を行い、神々は咲（わら）い世界は明るくなる。傀儡（くぐつ）族に伝わる神話でもホトはその力を伝える。筑紫舞研究者、鈴鹿千代乃氏によれば、「タケルのミコが海を渡れるようにオトタチバナ姫は海神にホトを見せ、くしげを抜いて海に沈める。海は鎮まりミコは無事に渡れたが、タケル様以外にホトを見せた姫は妃でいられなくなり身を隠す。この代身（だいみ）の舞は人々のために海を鎮める時にのみ舞われ、けっして自分のために舞ってはならず、この舞を舞ったものは引退し3年間は神前に出られない」。ホトを持つカラダは、世界変容をもたらす力を秘めながら芸能という形で伝えられる。

■古代の叡智に学ぶ

修行により変容した人のカラダは人々を動かし大きなムーブメントとなる。行基は青年期に十数年間山林修行をし、仏の教えを通して菩薩と言われるまでの霊力をもった人である。通常の人の力をはるかに超える彼に賛同する者は多く、当時の先端技術を持つ渡来系氏族や貴賤を問わず人生の苦に悩む婦女子も巻き込み、多くの救済と社会事業が展開された。

ホトを持つカラダも、修行により霊力を得るカラダも、利他心あって初めてその力を健全な形へと展開する。巫女や行者ほどではなくとも日常の我々に働くカラダの叡智を再発見することは意味深い。

■「かたちとちから」の体験教育

本研究では奥井遼研究員の協力を得て教育臨床場面における集団で作る形の学習を行った。各個人は1つの形を通して全体とつながる自分を感じ、他者との連動・同調・響合を感じた。また、井上ウィマラ氏の協力で、呼吸と意識の体験を行った。遠い過去の記憶から始まり、己の内で言葉が立ち上がるより短時間の記憶の浮上体験を通して意識の構造を予感した後、受講者の「自分」の捉え方は変わった。ペアワークでは自由な呼吸で同調する二人の即興ダンスとなり、様々な流れるようないのちの形姿が現れた。

本研究にご理解・ご協力を賜りました京都大学こころの未来研究センター鎌田東二名誉教授、国立民族学博物館中牧弘允名誉教授に心より御礼申し上げます。

研究プロジェクト

高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響

積山　薫（熊本大学文学部教授）

■研究の背景・目的

運動習慣のある高齢者は認知症のリスクが低いことが知られているが、運動がヒトの神経基盤に及ぼす影響の詳細なメカニズムは、ほとんど報告されていない。本研究では、運動が認知機能に及ぼす影響を、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳画像を用いて調べることにした。今回のfMRI研究では地域在住高齢者を対象として、運動介入による認知脳機能改善効果を3カ月の体操教室への参加前後で比較する縦断的検討を行うとともに（研究1）、介入前のデータに関して、視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動で運動能力と関連する活動を見出す横断的検討（研究2）、前期高齢者と後期高齢者で脳活動を比較する横断的検討（研究3）を行った。

■方法

シルバー人材センターを通じて募集した、地域在住高齢者52名（平均73.6歳）を対象に実験を行った。脳血管障害、変形性関節症、関節リウマチなどの身体機能障害を有する者、および顕著な認知機能低下など精神・心理機能低下の認められる者は含まれていなかった。

全体としては、運動介入を基軸とした地域在住高齢者の縦断的研究である。まず、介入前測定として、参加者の認知機能と運動機能の評価を行うとともに、ワーキングメモリ課題中の脳活動を撮像するfMRIを実施した（Pre測定）。fMRIでは、顔または位置の画像を次々と提示し、1個前に見たものと同じかどうか判断してもらう（1-back）ワーキングメモリ課題を行った。

介入前測定を参加者全員が終えると、層化無作為割り付け法によって参加者を介入群と非介入群の2群に分け、12週間の介入期間に移行した。介入として、ストレッチング、筋力トレーニング、二重課題下ステップ・トレーニング（座位・立位）などを行う体操教室を、約90分、週1回実施した。さらに介入群に対しては、介入期間中、歩数計を携帯してもらい、教室出席時に各週の平均歩数をフィードバックし、活動量の向上を促した。

介入期間の終了後、介入前測定と同じ項目について、再評価を行った。

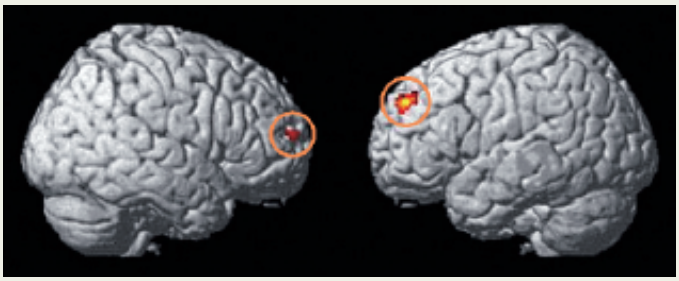


図1　介入効果がみられた脳部位

■結果と考察

医師によるMRI構造画像の読影を経て、脳病変が認められた2名を解析から除外した。

研究1：運動介入の効果

脳病変のないMMSE24点以上の参加者を解析対象とし、各群24名ずつのデータを解析した。介入群では非介入群に比して、1日の歩数が有意に上昇するとともに、TMT（実行機能）、WMS-R（エピソード記憶）など、多くの認知機能評価項目において、有意な介入効果が認められた。視覚性ワーキングメモリ課題中の脳活動（1-back − 0-back）では、介入後に活動が減少している部位が前頭前野に見出され、これらの部位で処理の効率が高まったことが示唆された（図1）。これらのことから、運動介入は、行動レベルの成績にも脳活動にも、効果があるといえる。

研究2：運動能力と相関する視覚性ワーキングメモリ中の脳活動

Pre測定のデータから、脳病変のないMMSE27点以上であった参加者を解析対象とした。顔と位置をこみにしたfMRIデータ（1-back − rest）を解析し、運動機能（Timed-Up & Go Test: TUG）と相関する視覚性ワーキングメモリ中の脳活動を探した。その結果、左前頭前野にTUG成績と逆相関する部位が、右視床・大脳基底核や両側小脳などの内側部に正相関する部位が見出された。これらの結果から、運動機能の低下している高齢者では、内側部の脳活動が低下しており、それを前頭前野で補っている可能性が考えられる。

研究3：前期高齢者と後期高齢者の脳活動の違い

Pre測定のデータから、脳病変のないMMSE24点以上であった参加者を解析対象とし、前期高齢者群（61-70歳）と後期高齢者群（77-82歳）を比較した。ここでは、若年者と比べて高齢者で課題中に脳の過活動がみられるという先行研究の結果が、高齢者内での年齢の増大によってもみられるかどうか、また、それは処理の種類によって異なるかどうかを検討した。顔と位置の刺激を分けてワーキングメモリ課題中のfMRIデータ（1-back − 0-back）を解析した結果、高齢者内でも年齢の増大によって脳の過活動がみられることが分かった。またそれは、ワーキングメモリに関わる右背外側前頭前野と、刺激処理に特異的である紡錘状回（顔）と頭頂連合野（位置）の2つのレベルの活動に確認された。

研究プロジェクト

被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究 III

大西宏志（京都造形芸術大学教授）

■石巻・雄勝の訪問とヒアリング

2014年6月13日から16日にかけて石巻、南三陸、雄勝を訪問した。石巻では香積寺住職でNPO法人しらうめ理事長の川村昭光氏、雄勝では葉山神社・石神社の宮司千葉秀司氏、また南三陸では地元の方から地域の様子をうかがった。そこから、1．仕事と住宅の復興が遅れているため若者や子育て世代が仙台などに流出している、2．土木と漁業関連（南三陸ではホテルも）以外の産業が育っていない、3．瓦礫や倒壊した建物の撤去が進むなか震災の記憶をとどめる取り組みが始まっていることなどが分かった。

■雄勝の海を活用した観光開発

旧雄勝町にある浜や港の景観調査では、旧雄勝町にある浜と港をまわってパノラマ写真に納めた。1941年（昭和16）まで、雄勝地区は十五浜村と呼ばれており、その名のとおり15の浜の連合体が雄勝である。浜ごとに気候・風土が異なり住んでいる人の気質も違う。

雄勝で観光ホテルが成り立つか、周辺地域の観光業に詳しい方にお話をうかがった。「雄勝は震災で人口が900人程度まで減ってしまった。浜ごとの個性を活かすというアイデアは口で言うほど簡単ではない。残った住民が1カ所に集まって新しい町を作るなど大胆な発想が必要だ。雄勝のそばには南三陸ホテル観洋がある。同じようなことをしても競争できない。目的がハッキリした文化イベントを継続的に行い、雄勝の文化的価値を高めて行くことが必要だ。アカデミックでユニークな何か、例えばパグウォッシュ会議のようなことができたら面白い」とのご意見が聞けた。

Google「海からのストリートビュープロジェクト」に葉山神社（千葉秀司宮司）と京都造形芸術大学（大西）の連名で申し込み採択された。宮城県漁業協同組合雄勝湾支所長の阿部貴之氏、漁師の青木祐次氏、京都造形芸術大学情報デザイン学科副手の楢舘はるか氏らの助力を得て9月9日に撮影を行い、10月20日に全世界に公開された。http://googlejapan.blogspot.jp/2014/06/tohokuseasv.html

雄勝の撮影範囲

■硯石の粉末の活用

原田憲一研究員のコーディネートで山形大学理学部地球環境学教室の中島和夫教授に硯石の分析を依頼し、化学分析（XRF）と鉱物分析（XRD）、そして放射能分析（セシウム）を実施した。中島教授からは「硯石の分析結果が出ました。添付の表の化学分析シートが化学組成の分析結果です。放射性物質測定シートにゲルマニウム半導体検出器で測定した放射能の結果がありますが、検出されていません。全く問題ありません。鉱物分析（XRD）の結果、含まれるのは石英、黒雲母、緑泥石が大量にあり、少量の斜長石、という結果でした。専門的には、きれいな粘板岩という印象です」とのコメントをいただいた。

日本画家で京都造形芸術大学の松生歩教授に、硯石の粉末をウサギ膠溶液で溶かし、1回塗り、2回塗り、3回塗りでどのような風合いになるか試していただいた。松生氏からは「使い心地は良好だが、ところどころ粒子の大きな『ダマ』が混ざっているので絵の具として使う場合はもっと念入りに粒子を細かくしておく必要がある」とのコメントをいただいた。黒い絵の具は良いものが少なく、粒子の課題をクリアできれば雄勝石の絵の具がこの分野に参入する余地はある。

■総括と今後の計画

2014年12月3日、京都大学稲盛財団記念館会議室で研究会を実施した。近藤高弘研究員は、今年も宮城県七ヶ宿の土を使って地元の人々と共に器を作り仮設住宅に配る「命の器プロジェクト」を実施した。また、同じ土を使って作った作品『Reduction』を、名取市の閖上海岸に置いてビデオ撮影を行い、パリ日本文化会館で2015年1月に行う『「うつわ（器）」と「うつし（写）」』展に出品した。岡田修二研究員からは、『自然学』（ナカニシヤ出版）に関する報告があった。また、来年アートステージ・シンガポールというイベントに絵画作品を出品するとの報告もあった。秋丸知貴研究員からは、3月にパラソフィア京都国際芸術祭に合わせて北野天満宮で実施する「悲とアニマ」展について報告があった。鎌田東二教授監修のもと秋丸研究員が企画を行い、上林壮一郎研究員、岡田研究員、大西研究代表らが出品し、追悼茶会に近藤研究員が参加する。

自由討議では、2015年度の活動について意見交換を行い、5月に予定されている葉山神社の遷座祭の時期に合わせて雄勝石を手がかりにして地域の未来を考えるイベントを開催することを決めた。鎌田教授から「雄勝石から未来を考える〜来たるべき自然力と自然観〜」というテーマが提案された。

研究プロジェクト

心理療法場面に見られる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究

前川美行（東洋英和女学院大学准教授）

■研究の目的

心理療法において表現されるメタファーや夢・箱庭・描画などに、自閉症スペクトラムと同様の平板化・羅列化傾向などが増えているという指摘がある。そのようなイメージ表現は、従来の内容的理解や形式面の心理的成熟度理解の視点のみでは把握しきれない特徴があるのではないだろうか。

Panofsky, E.（1964）、諏訪（1998）、辻（2005）らの描画分析から西洋の透視図法と日本古来の描画文化を比較すると、日本古来の特徴として、①視点の移動と多視点、②奥行や陰影を意識しないこと、③高い地平線と地面の強調が挙げられる。特に、諏訪の述べる「絶対的空間表現の獲得は必要ではなく、風景の中に自分が入り込んで対象を捉える関係」と「自由に視点を移動して入り込んで描く視点」という特徴は、透視図法的空間構成を心理的成熟とする考えと矛盾するものである。また、平成25年度以前の描画分析研究を行った東洋英和女学院大学研究助成による研究では、透視図的な空間構成が必ずしも心理的成熟度を推測しうるものとは言えない可能性が示唆されていた。さらに、視点移動的な描画は日本古来の意識のあり方の特徴でもあると考えられる。

以上のような観点から、本研究では心理療法におけるイメージ表現を、自験例から経過とともに整理・分析し、考察を行う。イメージ表現の現代的特徴の描出により、心理療法におけるイメージ表現の理解を深めることが期待される。

■平成26年度の研究内容と結果

平成25年度は先行研究から得られた理論的視点のまとめと、描画・箱庭・夢を用いた心理療法自験例の記録とデータの整理を行った。平成26年度は、自験例の分析を進めた。対象は、10年以上の経過を持ち、1つの転換点を通過し区切りを迎えているとの認識が得られた心理療法過程である。研究倫理的配慮として、心理臨床学会の倫理基準に従い、本人の研究発表許諾を得て分析した。

〈事例〉

「ADHD成人女性との約12年間の経過」　本事例では、自閉症スペクトラム的イメージ表現の特徴を分析・検討した（なお、本事例は現在も継続中であるが、ご本人から転換点を経過したとの認識と許可を得ている）。

「足に力が入らない」との問題で来談されたAさんの面接開始前の心理テストの結果や面接初期の様子からは、パターン的な状況対応や常識的な固定観念を身に付けることで適応してきたこと、人への関心が低く細やかな情緒的交流が乏しいこと、体験を語れないことが特徴として挙げられた。身体表現性障害の特徴であるアレキシサイミアも視野に入れ、面接では感情表現を促す働きかけとして、言語のみではなく箱庭療法や夢・描画などイメージ表現を媒介にする心理療法を開始した。面接過程はⅠ～Ⅲ期に分けて考察した。

Ⅰ期：話がわかりにくく、聞いている筆者には感情や状況が理解しにくい。例えば、急に泣き出したので〈なぜ？〉と尋ねると全く関係のない話が展開し、なぜその話になったのかと尋ねても、「何を聞かれたんでしたっけ」と混乱するなどである。次第に自分の体験が自分の中で残らず消えてしまうことや、感情がつながらず、場違いな感情を感じていることに気づき始める。Ⅱ期：ADHDの特徴が面接場面で顕著に報告され始めた。Ⅲ期：山積みの服や持ち物に対して、「出来事や感情は自分の中に繋ぎとめられないが、『物』に自分を感じるのかもしれない」と語り、独特の世界が夢や描画にも表現された。例えば、なぐり描きされた線から何かの形を見出して絵を描く「スクイグル」（図1）を行ったところ、輪郭や目・口などの典型的な配置を持たない「顔」の絵を描いた。あまりの形態の崩れにAさん自身も驚き、視覚的に確認できる描画を通して、Aさん自身も自分に対する理解が深まっていった。その後、次第に感情表現が増え、客観的に自己を語る視点が生じ、話が分かりやすくなっている。経過から得られた考察は以下のとおりである。

図1　スクイグル作品

①ADHDの持つ「まとまりのなさ」「語れなさ」は、「文脈のなさ」と関連すること

②その特徴は、文脈を要請する言語表現よりも、具象的なイメージ表現媒体により、表現が促されやすいこと

③「バラバラ」にこぼれおちる思考や体験が、描画や夢などの具象的表現により繋ぎとめられることで自己感が浮かび上がり、文脈が生まれること

本事例研究は平成27年度に学会発表の予定である。

文献

Panofsky, E.（1964）, Die Perspektive als “Symbolische Form,”Verlag Bruno Hessling, Berlin. 木田元監訳，川戸れい子・上村清雄訳（1993/2009）『〈象徴形式〉としての遠近法』ちくま学芸文庫。

諏訪春雄（1998）『日本人と遠近法』ちくま新書。

辻惟雄（2005）『日本美術の歴史』東京大学出版会。

研究プロジェクト

子どもの発達障害と作業療法

長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）

■目的

発達障害を持つ子どもの支援の1つとして作業療法が行われている。本プロジェクトの目的は、作業療法におけるセラピストの関わりの特徴を実証的に明らかにすることである。作業療法学の研究者と認知心理学の研究者とが一緒になって研究を進めてきた。

感覚統合理論に基づく作業療法では、特に、治療活動として感覚・運動の要素を含んだ遊びが用いられる。事前にプログラムされている遊びをするのではなく、子どもとセラピストの1対1の相互の関わりから創発された遊びが治療目的に応じて展開されるのだ。そこでは、子どもが、主体的に動いて楽しそうに遊んだり、ちょっと失敗しても挫けずやり直したりする様子が見られる。セラピーを見学に来た学校の先生方は、子どもの様子が、学校でふだん見られるものとずいぶん違うことに驚くそうだ。

では、セラピストのどのような関わり方が子どもを変えているのだろうか。遊び自体の楽しさに加え、それを増幅・補強させるのに似た働きがセラピストによって創りだされているように見える。ただし、子どもとの関わりの質はセラピストの技量によって異なっているように見え、実際、その治療効果が十分に示されていない事例も存在するようだ。

そこで、「熟達したセラピストと、そうでない人とでは、関わり方にどのような違いがあるのか」という問いを立て、それを調べるために次の検討を行った。

■セラピストの声かけ

自閉症と診断された子ども1名に対して、熟達者が施行したセッションと非熟達者が施行したセッション、加えて、異なる子どもに異なる熟達者が施行したセッションを、ビデオカメラで収録し分析対象とし、セラピストの声かけを切り口に分析した。各セッションにおけるセラピストの発話の意味内容を書き出し、KJ法の手順で分類し、10種類のコードを作成した。ビデオを見ながら、各セッションにおけるセラピストの発話のコード化を行った。本稿では、1名の子どもに対する、熟達者と非熟達者のセッションの比較を紹介する。

分析の結果、子どもが同じような作業活動をしているときでさえ、熟達者と非熟達者とで声かけの仕方が異なることが示された。熟達者の特徴は、子どもが動き始める直前までに、子どもに次の動きを考えさせること（「計画要求」）、子どもが動くのに合わせて実況したり合図したりすること（「合図」）、子どもの作業がいったん終わったところで子どもに感覚や状況を振り返らせること（「省察欲求」）と言える（**表1**）。対照的に、非熟達者は、「計画要求」の代わりに次の動きを具体的に伝え誘導すること（「誘導」）が多く、また「合図」が欠けていた。

一般に、子どもの学習に際して、自分がすることを計画しモニタリングしてコントロールすること、すなわち、自らの学習をメタ認知することは、学習への取り組みや学業成績を向上させる。本結果が示す「計画要求」―「合図」―「内省要求」の声かけは、子どものメタ認知の代行とみなすことができるかもしれない。とすると、子どもは慣れない作業に取り組むのに精一杯なので、セラピストが声掛けしてメタ認知を補助することによって、子どもは作業に専念でき目標達成できていると推測される。その意味で、セラピストは、子どもに手を貸したり遊びの環境を整えたりして物理的に作業をともにしているばかりでなく、子どものメタ認知の代行として認知的にも作業をともにする役割を果たしていると言えるかもしれない。現在、本成果を報告すべく準備中であるとともに、異なる熟達者や異なる子どもの事例の分析に着手している。

表1　熟達したセラピストと子どものやりとりの一例
（Ch. はブランコの上に立ってブランコを揺らしながら、ブランコ前方のセラピストの方を見ている。Ch. はこれまでにブランコから跳んで前方のロープをつかんでぶら下がることを何度か試みた。）

話者 a)	逐語（状況や動作の説明）	コード
Th.	ここ、ここ、ここ（ロープを示しながら）。どれがいい？　1番、2番、3番、何番がいい？　1番、2番、3番。1番と2番でもいいし…2つでもいいし。何番がいい？	誘導 計画要求
Ch.	3	
Th.	3番?!　3番?!　（笑）お、じゃ、3番ね。（ブランコ横に戻りブランコを揺らす）ちょっと待って3番、○○先生（自身を指して）、3番の方に行きます。3番ですね、はい、わかりました。…3番。	計画要求 環境設定
Th.	いち、にいー（ブランコの横からブランコの紐を持ってブランコを揺らす）…いけ！	合図
Ch.	（ブランコに揺られ、ロープ〈吊り輪の位置〉に近づくと、片手でロープをつかもうとする。これを2回繰り返す）	
Th.	うはへへへー。だんだん前になってるで。	感動表出 省察要求

a) Ch. は子ども、Th. はセラピストを示す。

研究プロジェクト

自然のもつ文化的・教育的・芸術的価値とは
――市民の価値判断を反映したマネジメントに向けて

伊勢武史（京都大学フィールド科学教育研究センター准教授）

■本研究の目的

自然保護区域はその性質上、環境保全のために利用を制限すべきか、それとも教育や娯楽など市民の福利のために利用を推進すべきか、という対立しがちな2つの目的の両立を迫られている。従来、このバランスは管理者の主観的な判断に委ねられることが多かったが、本プロジェクトでは、市民の享受する「自然の価値」を文化的生態系サービスの側面から評価し、これを最大化するマネジメントの提言を行うことを目的としている。

■調査方法

本研究では、自然保護区域における「環境保全」と「利用の推進」という対立しがちな2つの管理目的の両立と科学的根拠の確立を目指し、市民環境意識などの社会科学的調査と、最新の機材を用いた心理学的調査を実施した。京都大学芦生研究林を中心的なフィールドとしてケーススタディとして行っている。

本研究の成果として、自然の保護と利用という対立しがちなマネジメント方針の最適なバランスを、客観的・科学的に決定するヒントを出すこと、市民の享受する「自然の価値」とは何かを生物学の切り口から提示し、それを最適化する提言を行うことを目指している。

人間が生活していくために欠かせない「自然の恵み」には、さまざまなものがある。もちろん、すぐにお金に換算できる価値（食料や材木などの生産）もあるが、それだけではなく、長くて広い視点で見たときに人々のくらしに非常に役立つ、治水・生物多様性の保護・炭素の蓄積・教育・娯楽などの価値も忘れてはならない。

近年、このような生態系から得られるさまざまな価値を総合して「生態系サービス」と呼ぶようになり、この概念を用いた生態系の総合的な理解を進めようとする動きがある。生態系の価値を総合的に認識することにより、「森の木を切って売ればいくらになる」という単純な考えから進歩して、将来も末永く生態系の恵みを受けようとする考え方に関心が寄せられるようになってきた。しかし、これまでのところ、生態系サービスは、その多様さゆえに定量的・総合的な価値判断が遅れており、市民や政府が正しい判断を下すための材料としての価値は決して高くなかった。

ウェアラブルカメラを2台同時に用いる

本研究では、人間が自然から享受する生態系サービスを、（1）至近要因、および（2）究極要因の2つの観点から分析することを試みた。

（1）至近要因

至近要因については、来訪者が自然体験中に受ける感情の動きについて、「刺激→反応」の関係を調べる生物学の手法を応用した。具体的には、被験者にヘルメット搭載型小型ビデオカメラ（ウェアラブルカメラ）を2台同時に装着し（右図参照）、GPS装置を携行させて研究林内を歩行させ、いつ・どの場所で・何を見・何を聞いたかを記録し、その際の被験者の表情や発話をパソコンで再生しながら特定の要素を目視で観測し、感情の変化を分析する（たとえば興奮するとまばたきの回数が減ることや声のトーンが上がることが知られている）という手法を用いた。その感情特性の生じた場所の地形や植生を地理情報（GIS）ソフトで解析し、さらに調査の時間帯・季節・天候を考慮することで、特定の反応を引き起こす森林環境を定量的に分析し、人の感情を左右する至近要因の解明を目指している。

（2）究極要因

究極要因に関しては、芸術学および美学に関する調査を実施した。芸術に関する学問に自然美学・環境美学があり、自然のうつくしさと、それが人の感情や精神に与える影響についての考察を行っている。これらの視点から見た芦生研究林の美的価値を評価するため専門家を招聘し、聞き取り調査および行動調査を行った。どの場所に美的価値を見出したか、そこに法則性はあるのかを明らかにしようとしている。たとえば写真家は森のどこで感情が動いたのか。GPSとデジタルカメラの撮影時刻の記録をとった。宗教哲学に関しては、フィールド調査で畏怖の念が得られた場所と時間帯などの環境要因を抽出し、巨木や巨石など人類に普遍的に見られるアミニズム（自然崇拝）の対象物がどのような心的効果を持つかを定量的に評価する。得られた結果を生物進化の概念、特に進化心理学で考察し、現代人にも残る生来の欲求を満たす自然環境とはどのようなものか、普遍性と法則性を見出そうとしている。

研究プロジェクト

甲状腺疾患におけるこころの働きとケア

長谷川千紘（京都文教大学臨床心理学部講師）

■問題・目的

本プロジェクトは、甲状腺疾患専門病院におけるカウンセリングの実践から立ち上げられたもので、甲状腺疾患におけるこころの働きを検討し、それによって心身にわたるよりよいケアのあり方を探るものである。甲状腺疾患は、古くから精神症状を伴う症例が報告され、心理的な問題と関連深いことが示唆されてきた。専門病院に併設されたカウンセリング室では様々な来談者が自らの心理的テーマに取り組んでいる。一方で、精神症状に苦しんでいるのに自発的なカウンセリングには至らず、身体治療のみを続ける患者もまた多い。特に手術という決定的な身体変化を迎える場合には心理面の影響も大きいことが推測されるが、その詳細については不明な部分が大きい。心身双方を見据えたケアにつなげていくための第一歩として、本プロジェクトでは手術前後にわたって心理査定を行い、身体的変化に伴う心理指標の変化を明らかにすることを試みる。

■方法

1）調査協力者：甲状腺疾患4群（バセドウ病初診・バセドウ病手術・結節性甲状腺腫・乳頭癌）に加えて、比較2群（神経症・健常）の計6群。いずれも予後の比較的良好な疾患で、協力者と主治医双方に同意を得ている。

2）手続き：3種類の心理査定①TAS-20質問紙、②バウムテスト、③半構造化面接を試行した。

■結果・考察

本年度はバウムテストに焦点を当てて、その分析結果を報告する。

1）疾患群間の差異の検討：バウムの形態に関する79指標についてフィッシャーの直接確率検定を用いて6群間で出現率を比較した結果、39指標に有意差、及び有意傾向が見られた。その特徴を整理する（**表1**）。

表1　バウムの形態の群間比較

甲状腺疾患群と比較群の差異	① 幹先端処理：「開放系」が多い。 ② 包冠線：「なし」が多い。 ③ 部位接続・空間使用：「不自然な形態」が多い。
甲状腺疾患群内の差異	④ バセドウ病系2群と甲状腺腫瘍系2群は，同系疾患内でそれぞれ類似の傾向を示す。 ⑤ バセドウ病系2群の方が，甲状腺腫瘍系2群よりも自我境界・統合性ともに安定している。
手術群と初診群の差異	⑥ 幹先端処理：バセドウ病系・腫瘍系ともに初診群に開放系が目立つ。 ⑦ 部位接続・空間使用：バセドウ病系では，初診群において統合性良好。

表2　手術前後のバウムの形態比較

バセドウ病群 手術前後の差異	① 幹先端処理：手術後，「開放系」への移行が見られる。 ② 部位接続・空間使用：手術後，「不自然な形態」への移行が見られる。 ③ 一線枝：手術後，増加。
乳頭癌群 手術前後の差異	④ 部位接続・空間使用：手術後，一部「不自然な形態」への移行が見られる。

一般群・神経症群と比較すると、甲状腺疾患群のバウムは自我境界の脆弱性・統合的視点の持ちにくさなど不安定な形態を示した。

甲状腺疾患群内の差異に着目すると、従来心身相関の指摘されてきたバセドウ病よりも純粋な身体疾患とされてきた甲状腺腫瘍において、この傾向は顕著であった。神経症水準よりも、心身症の水準、身体疾患の水準になるにつれて深い心理的問題が示唆される結果となった。甲状腺疾患においては表面化しないも深い次元において苦しみを抱えている可能性が推測された。

2）バセドウ病・乳頭癌における手術前後の検討：バウムの形態に関する79指標についてフィッシャーの直接確率検定を用いて、バセドウ病・乳頭癌それぞれ手術前後の出現率を比較した結果、バセドウ病7指標・乳頭癌1指標に有意差、及び有意傾向が見られた。その特徴を整理する（**表2**）。

手術後、バセドウ病群は自我境界・統合性ともに不安定な形態に移行し、乳頭癌群はほぼ変化がなかった。心身症水準のバセドウ病では、決定的な身体変容とともに心理的な変容も生じつつあり、いったん心理的に不安定になる可能性がある。半構造化面接では、手術を契機にこれまでの自らのあり方を振り返り、「悩み」始める者が見られ、心身の同期的変化がうかがわれる。一方、甲状腺乳頭癌では、手術は身体のことに留まり、そこから自らを振り返るような心理的動きは起こりにくい。身体のこととこころのことがより遠く離れていると考えられる。ただ手術前バウムに見られる形態の不安定さは解消されたわけではないため、自覚されない深い次元で心理的な苦しみを抱えている可能性があり、留意が必要だろう。

謝辞：本プロジェクトは、神甲会隈病院の協力のもと、行われた。

吉川左紀子

論文

Nishiguchi, S., Yamada, M., Tanigawa T., Sekiyama, K., Kawagoe T., Suzuki, M., Yoshikawa, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. (2015) "12-Week Physical and Cognitive Exercise Program Can Improve Cognitive Function and Neural Efficiency in Community-Dwelling Older Adults: A Randomized Controlled Trial." *Journal of the American Geriatrics Society*, 63(7), 1355-1363. DOI: 10.1111/jgs.13481.

長岡千賀，加藤寿宏，松島佳苗，吉川左紀子（2015）「子どもへの作業療法におけるセラピストの専門的技法――セラピストの声掛けに関わる分析手法の検討」『電子情報通信学会技術研究報告』115（35），227-232，IEICE-HCS2015-34.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, K. (2015) "Brain activation during visual working memory correlates with behavioral mobility performance in older adults." *Frontiers in Aging Neuroscience*, 7, 186. DOI: 10.3389/fnagi.2015.00186.

長岡千賀，矢野裕理，小山内秀和，松島佳苗，吉川左紀子，加藤寿宏（2016）「子どもへの作業療法におけるセラピストの専門的技法――Event Segmentation を用いた定量的検討」『電子情報通信学会技術研究報告』115（418），97-100，IEICE-HCS2015-75.

著書

吉川左紀子（2016）「こころ学の効用」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，219-240.

吉川左紀子（2016）「コラム 1　こころの未来」子安増生，楠見孝，齊藤智，野村理朗（編）『教育認知心理学の展望』ナカニシヤ出版，16.

吉川左紀子（2016）「感情心理学――人と人が出会うとき」内田伸子，板倉昭二（編）『高校生のための心理学講座――こころの不思議を解き明かそう』誠信書房，77-92.

学会発表

布井雅人，吉川左紀子「顔画像の選好判断に他者の数と表情が及ぼす影響」日本認知心理学会第13回大会（東京都）2015.7.5.

Minemoto, K. & Yoshikawa, S. "Intensity of the facial expressions influences the aftereffect of facial expressions." The 38th European Conference on Visual Perception (ECVP 2015). Liverpool University (Liverpool, U.K.) 2015.8.24.

長岡千賀，松島佳苗，吉川左紀子，加藤寿宏「セラピストの声掛けに関する予備的検討」第33回日本感覚統合学会研究大会（アステールプラザ，広島市）2015.11.1.

講演等

吉川左紀子「こころを知り、未来を考える：日本人の幸福感」夜の森の教室（法然院，京都市）2015.5.9.

吉川左紀子「組織の文化と人間関係：幸福感を育む」第29回近畿女性施設長フォーラム（奈良ホテル，奈良市）2015.6.16.

吉川左紀子「基礎科学の知を実践地とつなぐ――作業療法への期待」作業療法神経科学研究会第 1 回学術集会基調講演（北海道大学学術交流会館，札幌市）2015.7.25.

吉川左紀子「認知心理学――顔・表情認知を中心に」日本心理学会公開シンポジウム 高校生のための心理学講座シリーズ関西地区「心理学と社会――こころの不思議さを解き明かす」（京都女子大学，京都市）2015.8.8.

吉川左紀子「共感と信頼が生まれるコミュニケーション」花王講話（茅場町花王本社ビル，東京都）2015.9.28.

吉川左紀子「こころの研究」第 1 回先端研フロンティア講座（パナソニック株式会社先端研究本部西門真地区 A 棟，門真市）2015.10.1.

吉川左紀子「くらしの豊かさとこころの豊かさ」特別講義（甲賀探求講演会）（水口東高等学校，甲賀市）2015.10.19.

吉川左紀子「人間関係とコミュニケーション」京都府看護協会実習指導者講習会（京都府看護協会研修センター，京都市）2015.10.28.

吉川左紀子「心理学からみた作業療法の熟達」第35回近畿作業療法学会特別講演（京都テルサ，京都市）2015.11.22.

吉川左紀子「『より良い生』により添って聴く」温もりの電話 平成27年度第 2 回全体研修会（ハートンホテル京都，京都市）2016.1.15.

吉川左紀子　京都大学デザイン学大学院シンポジウム「心のデザイン」指定討論（京都大学百周年時計台記念館大ホール，京都市）2016.3.25.

社会活動等

日本認知心理学会理事.

文部科学省研究成果展開事業「センター・オブ・イノベーションプログラム」構造化チーム委員.

文部科学省大学設置・学校法人審議会（大学設置分科会）専門委員.

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員.

京都市社会教育委員.

（公）ひと・健康・未来研究財団理事.

船橋新太郎

論文

船橋新太郎（2015）「実行機能と前頭連合野の関与」『心理学評論』58（ 1 ），55-71.

船橋新太郎（2015）「書評　小野武年著『情動と記憶――しくみとはたらき』」『比較生理生化学』32（ 1 ），49.

船橋新太郎（2015）「巻頭言　前頭連合野研究とワーキングメモリ仮説」『日本神経回路学会誌』22（ 1 ），1 - 2 .

Funahashi, S. (2015) Functions of delay-period activity in the prefrontal cortex and mnemonic scotomas revisited. *Frontiers in Systems Neuroscience*, 9, 2. DOI:10.3389/fnsys.2015.00002.

Watanabe, K. & Funahashi, S. (2015) Primate model of interference control. *Current Opinion in Behavioral Sciences* 1, 9 -16. DOI:10.1016/j.cobeha.2014.07.004.

Ichihara-Takeda, S., Yazawa, S., Murahara, T., Toyoshima, T., Shinozaki, J., Ishiguro, M., Shiraishi, H., Ikeda, N., Matsuyama, K., Funahashi, S., & Nagamine, T. (2015) Modulation of alpha activity in the parieto-occipital area by distractors during a visuospatial working memory task: a magnetoencepharographic study. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 27, 453-463. DOI:10.1162/jocn_a_00718.

Li, B.-M. & Funahashi, S. (2015) A step forward in the understanding of prefrontal cortical functions. *Neuroscience Bulletin*, 31, 61-163. DOI:10.1007/s12264-015-1516-2.

Watanabe, K. & Funahashi, S. (2015) A dual-task paradigm for behavioral and neurobiological studies in nonhuman primates. *Journal of Neuroscience Methods*, 246, 1 -12. DOI:10.1016/j.jneumeth.2015.03.006.

船橋新太郎（2015）「同時に 2 つのことをうまくできないのはなぜか」『医学のあゆみ』253（ 8 ），659-670.

渡邉慶，船橋新太郎（2015）「二重課題の神経生物学――二重課題干渉効果と前頭連合野の役割」『霊長類研究』31，87-100. DOI:10.2354/psj.31.009.

船橋新太郎（2015）「視覚刺激に対する嗜好性と前頭葉眼窩部の関与」『Brain and Nerve（神経研究の進歩）』67（ 6 ），711-722.

渡邉慶，船橋新太郎（2015）「２つのことを同時にうまくできないのはなぜか――二重課題干渉を生じるメカニズム」『Brain and Nerve（神経研究の進歩）』67（10），1215-1229.
船橋新太郎（2015）「意思決定に及ぼす情動の影響――前頭連合野眼窩部の機能を中心に」渡邊正孝，船橋新太郎（編）『情動と意思決定』朝倉書店，164-194.
竹田里江，山下聖子，宮田友樹，竹田和良，池田望，松山清治，船橋新太郎（2015）「日常生活場面を取り入れたコンピュータを用いたワーキングメモリ訓練の効果」『精神科治療学』30（12），1641-1647.
Funahashi, S. (2015) Neural mechanism of dual-task interference. *Kyoto University Research Activities*, 5 (3),22.
Funahashi, S. (2015) Developing a new model for working memory. *Kyoto University Research Activities*, 5 (3),17.

著書

船橋新太郎（2016）「脳の働きを通して，こころを探る」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，9 -45.

学会発表

Mochizuki, K. & Funahashi, S. Miniature fixational eye movements reflect spatial decision-making process during a memory-guided saccade task. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions"（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.8.01.
Mochizuki, K. & Funahashi, S. Opposing history effect of decision and action revealed by a free choice memory-guided saccade paradigm. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions"（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.8.01.
Mochizuki, K. & Funahashi, S. Fluctuation of spatial representation and the dynamics of decision-making in prefrontal neuronal network. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions"（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.8.01.
Funahashi, S. & Nakamoto, W. Monkey's preference for visual items and orbitofrontal neural activities. Japan-China Joint Symposium "Understanding Cortical Cognitive Functions"（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.8.01.
Funahashi, S. & Nakamoto, W. Preference judgment of visual items and contribution of the orbitofrontal cortex in monkeys. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.18.
Spaak, E., Watanabe, K., Funahashi, S., & Stokes, M. Stable and dynamic coding for working memory in primate prefrontal cortex. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.19.
Durnez, M., Constantinidis, C., Funahashi, S., Hansel, H., & Mongillo, G. Persistent activity as a result of stimulus-driven network-wide re-organization of the pattern of firing rates. Society for Neuroscience Meeting (Neuroscience 2015) (Chicago, USA) 2015.10.19.
船橋新太郎「前頭連合野の意思決定への関与」科学技術振興機構さきがけ研究21「知と構成」領域第16回懇話会（グランドホテル白山，白山市）2015.10.31.-11.01.
船橋新太郎，中本若奈「質感の変化による選好性の変化と前頭葉眼窩部の役割」第５回日本情動学会（学習院大学，東京都）2015.11.29.
柴田柚香，桑原彩，小川詩乃，船曳康子，正高信男，船橋新太郎「左前頭葉脳腫瘍を摘出した児童の遂行機能の検討（１）――Frontal Assessment Batteryと後出し勝ちじゃんけんを用いて」第13回日本ワーキングメモリ学会（京都大学，京都市）2015.12.19.
桑原彩，柴田柚香，小川詩乃，正高信男，船曳康子，船橋新太郎「左前頭葉脳腫瘍を摘出した児童の遂行機能の検討（２）――Stroopテスト、Trail Makingテストおよびカード並べ課題を用いて」第13回日本ワーキングメモリ学会（京都大学，京都市）2015.12.19.
船橋新太郎「動物の脳からヒトのこころを探る」京都大学こころの未来研究センター研究報告会2015（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.12.20.

カール・ベッカー

著書

カール・ベッカー（編著）駒田安紀（監訳）（2015）『愛する者は死なない――東洋の知恵に学ぶ癒し』晃洋書房.
カール・ベッカー，奥野元子（編著）（2015）『愛する者をストレスから守る――瞑想の力』晃洋書房.
カール・ベッカー（2016）「理想的な終焉と仏教の役割」『仏教講座講義録　こころのめざめ』22，長野市南長野仏教会，77-114.
カール・ベッカー（2016）「ケア現場の『こころ学創成』」『こころの未来』15，24-27
カール・ベッカー（2016）「『こころ学』を考える―― ３つの側面と３つの研究プロジェクト」吉川左紀子・河合俊雄編『こころ学への挑戦』創元社，129-166.

講演

カール・ベッカー「医療従事者の死生観と日本人の経験智」天理医療大学公開講演会（天理医療大学，天理市）2015.5.9.
カール・ベッカー「日本人の生死観と寺院の存在」ビハーラ・福岡公開講座（専立寺，福岡市）2015.5.23.
カール・ベッカー「人生の意味と死について考える」NHK文化センター京都教室講座（NHK京都教室，京都市）2015.6.15.
カール・ベッカー「有意義な人生を生きるために――超高齢化・災害多発・経済低迷社会に生きる」いのち教育セミナー2015（上越教育大学，上越市）2015.7.18.
カール・ベッカー「長寿社会のケアを考える――熟年の生を支える看護」第21回日本看護診断学会学術大会基調講演（フェニックスプラザ，福井市）2015.7.19.
カール・ベッカー「『生老病死』に活きる日本人の経験智」連続講演会「東京で学ぶ京大の知」シリーズ18（「生命・いのち」）第３回（京都大学東京オフィス，東京都）2015.7.23.
カール・ベッカー「研究目標の考え方・絞り方」政策のための科学レクチャー（京都大学人環ホール，京都市）2015.9.3.
Becker, C. (2015) "Death is NOT the End." Institute of Life and Death Studies. (Hallym University, Korea) 2015.9.11.
カール・ベッカー「西洋の生命倫理は日本人の死生観に合うのか？」宗教倫理学会第16回学術大会「現代社会における生命倫理と宗教」記念講演（キャンパスプラザ京都，京都市）2015.10.3.
Becker, C. "Food Ethics: A View from Japan"（台湾大学高等研究院，台北）2015.10.24.
カール・ベッカー「日本人の伝統知」カワタキコーポレーション（ホテルグランビア京都，京都市）2015.10.29.
カール・ベッカー「自分らしい理想の最期――生と死を考える」日本尊厳死協会関西支部講演会（シルク・ホール，京都市）2015.11.1.
カール・ベッカー「生と死のケア――日本伝統の知恵に癒しを学ぶ」第25回神経・リハビリテーション研究会記念講演（京都テルサ，京都市）2015.11.6.
カール・ベッカー「京都府教育振興プラン28年度改訂について」京都府教育委員会（京都ルビノ堀川，京都市）2015.11.20.

カール・ベッカー「日本人の死生観と仏教者の役割」日蓮宗ビハーラネットワーク第12回「心といのちの講座」（日蓮宗宗務院講堂，東京都）2015.11.27.
カール・ベッカー「介護からこころを問い直す」上廣こころ学研究部門2015年度研究報告会「身体（からだ）からこころを問い直す」（稲盛記念会館大会議室，京都市）2015.12.20.
カール・ベッカー「今を大切に生きる――理想的な終焉を見つめて」がん患者グループ「ゆずりは」2016年 1 月定例会（兵庫県民会館，神戸市）2016.1.9.
カール・ベッカー「看護師の倫理」武田病院倫理研修（武田病院，京都市）2016.1.25.
カール・ベッカー「日本的・佛教的スピリチュアル・ケア」浄土宗大阪地区（大阪国際ホテル，大阪市）2016.1.26.
カール・ベッカー「やりがい感は看護師を疲弊から守れるか」住友病院（中之島，大阪市）2016.1.30.
カール・ベッカー「環境倫理」京都大学大学院総合生存学館思修館（思修館，京都市）2016.2.2.
カール・ベッカー「阿弥陀信仰の科学的根拠」第 9 回仏教伝道協会（BDK）シンポジウム「仏教における科学と信仰」（仏教伝道センタービル，東京都）2016.2.12.
カール・ベッカー「『理想の終焉』とは何かを考える」中日新聞50周年特別講演会（中日新聞名古屋本部，名古屋市）2016.2.23.
カール・ベッカー「やりがい感は看護師を疲弊から守れるか――国際比較的な視座から」大阪医科大学看護学部研究活動報告会（高槻市）2016.3.5.
カール・ベッカー「今後求められる葬儀社のあり方」全葬連平成28年度予算総会記念講演（品川プリンスホテル，東京都）2016.3.14.
カール・ベッカー「上廣倫理財団の活動と希望」Cross-Currents（ハワイ大学，ハワイ）2016.3.18.
Becker, C. "Stress and Environment-Lessons from Japan" Buddhist Study Group, (Moiliili Hongwanji, HI, USA) 2016.3.19.

社会活動

日本人体科学会理事.
日本宗教学会理事.
日本実存心身療法研究会理事.
日本自然治癒力研究会理事.
日本生命倫理学会理事.
日本精神医学史学会評議員.
国際生命情報科学会評議員.
日本スピリチュアル・ケア学会理事.
日本医学哲学・倫理学会評議員.
仏教看護ビハーラ学会評議員.
仏教心理学会評議員.
国際統合医学会評議員.
Mortality Journal 編集員.
Near-Death Studies Journal 編集員.
Taiwan East Asian Studies Journal 編集員.
British Journal of Spirituality 編集員.
Personalized Medicine Universe 編集員.

河合俊雄

論文

河合俊雄（2015）「ユング派からみた発達障害」『そだちの科学』，24，20-25.
長谷川千紘・梅村高太郎・西垣紀子・鍛治まどか・河合俊雄・田中美香・金山由美・桑原晴子・深尾篤嗣・宮内昭「半構造化面接からみた甲状腺疾患患者の心理的特徴」『日本心療内科学会誌』，19(4)，237-244.
河合俊雄（2016）「心理療法における猫」、『imago 総特集 猫！（現代思想 3 月臨時増刊号）』，119-128.
河合俊雄（2016）「震災後のこころのケア活動」『imago 総特集〈こころ〉は復興したのか 3.11以後，それぞれの現場から（現代思想 4 月臨時増刊号）』129-139.
河合俊雄（2016）「心理療法における暴力の浄化とその危険：ユングの体験から」『身心変容技法研究第』 5 号，70-74.

著書

河合俊雄（2015）『ユング　魂の現実性』岩波現代文庫.
河合俊雄「こころの歴史的内面化とインターフェイス」河合俊雄・中沢新一・広井良典・下條信輔・山極寿一（2016）『〈こころ〉はどこから来て，どこへ行くのか』岩波書店，39-72.
河合俊雄「閉じることと開くことの逆説」河合俊雄・中沢新一・広井良典・下條信輔・山極寿一（2016）『〈こころ〉はどこから来て，どこへ行くのか』岩波書店，201-212.
河合俊雄「実践とリフレクションとしてのこころ学」吉川左紀子・河合俊雄（編著）（2016）『こころ学の挑戦』創元社，167-192.

編集・監訳

ジェイムズ・ヒルマン，ソヌ・シャムダサーニ著，河合俊雄（監訳），名取琢自（訳）（2015）『ユング『赤の書』の心理学―死者の嘆き声を聴く』創元社.

学会発表

皆本麻実・畑中千紘・梅村高太郎・井芹聖文・土井奈緒美・長谷川藍・田附紘平・松波美里・岡部由茉・粉川尚枝・鈴木優佳・河合俊雄・田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー（ 1 ）――発達障害と診断される要因とプレイセラピーの特徴」日本箱庭療法学会第29回大会（東北福祉大学，仙台市）2015.10.11.
田附紘平・松波美里・鈴木優佳・畑中千紘・梅村高太郎・井芹聖文・土井奈緒美・長谷川藍・皆本麻実・岡部由茉・粉川尚枝・河合俊雄・田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー（ 2 ）――三事例のプロセスの検討から」日本箱庭療法学会第29回大会（東北福祉大学，仙台市）2015.10.11.

講演

河合俊雄　第23回内分泌糖尿病心理行動研究会シンポジウム「身体疾患の治療と人の個別的ケア」（グランフロント大阪，大阪市）2015.4.5.
河合俊雄「夢と現実」日本ユング派分析家協会春学期セミナー（連合会館，東京都）2015.4.26.
Kawai, T. "Recent increase of ASD patients and the problem of agency in Japan" (International symposium: Culture and Clinical Psychology Perspectives for the KOKORO Well-being Studies, Kyoto) 2015.6.14.
Kawai, T. Loss and recovery of transcendence in Jungian psychology and Hua-Yen School of Buddhism. Fourth Joint Conference of the IAAP and the IAJS (Yale University, the United States) 2015.7.9.-7.12.
河合俊雄「症状と夢における自己関係」日本箱庭療法学会2015年度第 1 回全国研修会（大正大学，東京都）2015.7.15.
河合俊雄「心理療法における夢へのアプローチ」日本ユング心理学会研修会（京都市）2015.9.6.
河合俊雄「こころの歴史的内面化とインターフェイス」第 1 回京都

こころ会議シンポジウム（京都ホテルオークラ，京都市）2015.9.13.
Kawai, T. "Deep Psychological Confrontation with the Collective Trauma of Japanese Militarism and 2 nd World War" The Seventh International Conference of Analytical Psychology and Chinese Culture : Confronting Collective Trauma: Archetype, Culture and Healing. (Macao University, China) 2015.10.21-23.
Kawai, T. "Social contribution of Analytical Psychology as outreach and supervision: Passivism as activism" The 2 nd Conference of Analysis and Activism: Social and Political Contributions of Jungian Psychology (Roma, Italy) 2015.12.4-7.
河合俊雄「夢と私：二者、三者、四者、場」日本ユング派分析家協会冬学期セミナー（連合会館，東京都）2016.1.10.
河合俊雄「イメージの世界の家族との共有と分化」2015年度第２回日本箱庭療法学会全国研修会（京都リサーチパーク，京都市）2016.2.28.
河合俊雄「心理療法における夢へのアプローチ」第２回日本ユング心理学会研修会（京都アスニー，京都市）2016.3.6.
河合俊雄「現代と物語」島根県臨床心理学研究会主催特別研修会（一般公開，松江テルサ，島根県松江市）2016.3.13.

シンポジウム

「東アジアのユング派心理療法」シンポジスト．日本ユング心理学会第４回大会国際シンポジウム（京都文教大学，京都府宇治市）2015.6.6.
「"ゆらぎの物語" を創る」シンポジスト．日本箱庭療法学会第29回大会一般公開シンポジウム（東北福祉大学，宮城県仙台市）2015.10.10.
「谷川俊太郎さんに聞く－河合隼雄の思い出」インタビュアー（京都大学稲盛財団記念館，京都市）2015.10.12.
河合俊雄「心理療法とこころのワザ学」鎌田東二教授退職記念講演会・シンポジウム（京都大学芝蘭会館稲盛ホール，京都市）2016.2.21.

新聞掲載

「『大人にならなくてもよい時代』は来るのか」（朝日新聞日曜版GLOBE，2015年７月５日）
「現代小説 必然的に複雑化」読売新聞，2015年８月４日．
「震災後のこころの痛み考える　シンポに500人参加」毎日新聞宮城版，2015年10月19日．
「文化庁 京都移転決定　新しい文化発信、使命に」京都新聞，2016年３月30日．

その他

河合俊雄「解説」『河合隼雄の読書人生――深層意識への道』(2015) 岩波現代文庫．
河合俊雄「解説」河合隼雄『こころの天気図』(2015) PHP研究所
河合俊雄「解説」河合隼雄『河合隼雄自伝―未来への記憶―』(2015) 新潮文庫
河合俊雄「解説」河合隼雄（河合俊雄編）(2015)『「出会い」の不思議』創元こころ文庫
三輪敬之・西洋子・河合俊雄「場への信頼―共に在ること、創ること－」」(シンポジウム記録)『箱庭療法学研究』２，８（１）99-130.
河合俊雄（2016）「門馬論文についてのコメント」『学習院大学大学院臨床心理学研究』第10号.

鎌田東二

論文

鎌田東二（2015）「分子の脱自――宮沢賢治のトーテミズム，その堕落と飛行」佐藤泰正（編）『宮沢賢治の切り拓いた世界は何か（梅光学院大学公開講座論集63)』笠間書院.
鎌田東二（2015）「戸隠の山と水のコスモロジー」『戸隠信仰の諸相』戸隠神社.
鎌田東二（2015）「『人文学』と『日本研究』と『和』の思想」『日本研究』第16輯，国立釜山大学校日本研究所.
鎌田東二（2015）「『古事記』（712年編纂）出雲神話における須佐之男命と大国主神の治癒と平和を生み出す生命思想と霊性」韓中日国際シンポジウム「生命と平和、治癒と霊性から見た退渓学」大会論文集，嶺南退渓学研究院・陶山ソンビ文化修練院（韓国）.
鎌田東二（2015）「息絶えぬ原始の看取り」月刊『MOKU』2016年１月号，MOKU出版.
鎌田東二（2016）「『和の国』の原点と未来」『天河太々神楽講社通信』14，天河大辨財天社.
鎌田東二（2016）「神道とは何か？――ユーラシア・環太平洋交響楽としての神道」竹本忠雄（監修）『霊性と東西文明　日本とフランス――「ルーツとルーツ」対話』勉誠出版.
Kamata, T. (2016) Shinto Research in Japan and its Questions and Contributions to the Humanities. *Zygon: Journal of Religion and Science*, 51(1), 43-62.
Kamata, T. (2016) "Shinto Religion and Japanese Civilization" Targowski, A., Juri Abe, J. & Hisanori Kato, H. (Eds.) *Japanese Civilization in the 21st Century*, Nova Science Publishers, 67-78.
鎌田東二（2016）「身心変容技法と霊的暴力――宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」『身心変容技法研究』５，京都大学こころの未来研究センター.
鎌田東二（2016）「『こころの練り方』探究事始めその六――遠藤周作と石牟礼道子の『汎神論』」『モノ学・感覚価値研究』10，京都大学こころの未来研究センター.

著書

鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第３巻　スピリチュアリティと平和』BNP.
鎌田東二（監修）（2015）『図説　地図とあらすじでわかる！　山の神々と修験道』青春出版社.
鎌田東二，一条真也（2015）『満月交遊　ムーンサルトレター（上・下)』水曜社.
鎌田東二他（共著）（2015）『身体の知――湯浅哲学の継承と展開』BNP.
鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第４巻　スピリチュアリティと環境』BNP.
鎌田東二（企画・編）（2015）『講座スピリチュアル学第５巻　スピリチュアリティと教育』BNP.
鎌田東二他（共著）（2016）『宗教の壁を乗り越える――多文化共生社会への思想的基盤』ノンブル社.
鎌田東二（2016）『世直しの思想』春秋社.
鎌田東二他（共著）（2016）『火山と日本の神話――亡命ロシア人ワノフスキーの古事記論』桃山堂.
鎌田東二（2016）『世阿弥―身心変容技法の思想』青土社.
鎌田東二（企画・編）（2016）『講座スピリチュアル学第６巻 スピリチュアリティと芸術・芸能』BNP.
鎌田東二（2016）「こころのワザ学と日本文化」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，73-100.

講演

鎌田東二「スサノヲ力の時代」『スサノヲの到来――いのち，いかり，いのり』展（北海道立函館美術館，函館市）2015.4.11.
鎌田東二「アジア共同体論――アジア的思惟方式から考えるアジア共同体の未来」（国立順天大学校，韓国）2015.4.22.

鎌田東二「東北のスサノヲ，東北とスサノヲ」『スサノヲの到来――いのち，いかり，いのり』展（山形芭蕉記念館，山形市）2015.7.25.
鎌田東二「スサノヲと場所の力――渋谷の地と氷川神社とスサノヲ神話のコスモロジー」『スサノヲの到来――いのち，いかり，いのり』展（渋谷区立松涛美術館，東京都）2015.9.6.
鎌田東二「さよならトークライブ」（恵文社一乗寺店COTTAGE，京都市）2016.3.25.

メディア掲載

鎌田東二「京都現代藝苑2015と北野天満宮『悲とアニマ展』 伝統の上に新たな表現　鎮魂供養の思い込めて」徳島新聞，2015年４月１日．
鎌田東二「天災の国日本と人災の国韓国　文化共同体の実現目指し　良好な関係構築必要」徳島新聞，2015年５月１日．
鎌田東二「基地の島と神の島――『久高オデッセイ』三部作完成」徳島新聞，2015年６月１日．
インタビュー記事「挽歌の宛先 祈りと震災（50）歌ならきっと一つに　言葉の意味を超え被災者の心に深く」河北新報，2015年６月10日．
鎌田東二，金泰昌（対談）「韓人と日本人の対話・協働・開新が始動　日本的霊性とハン的霊性」未来共創新聞（オフィス21），2015年６月22日
鎌田東二「春日大社と国宝本殿特別公開　白磐座が放つ神秘力　霊性考え直すきっかけに」徳島新聞，2015年７月１日．
鎌田東二「死生観の今と昔――いのち・自然・ものがたり」『兵庫・生と死を考える会会報』61，2015年７月16日．
大重潤一郎（監督）鎌田東二（製作）「大重潤一郎監督の記録映画『久高オデッセイ』第三部風章，完成」毎日新聞，2015年７月20日．
鎌田東二「秘められた声を聞く　未来を切り開くために　安保法案強行採決の愚と神の島のいのちのメッセージ」徳島新聞，2015年８月１日．
鎌田東二「誕生と死と再生――北海道旭岳と福島からのいのちの挑戦」徳島新聞，2015年９月１日．
鎌田東二「『神』としての火山活動　荒ぶる自然をおそれる」大分合同新聞（夕刊），2015年９月14日．
鎌田東二「平成は兵制か？ 『乱世』に突入と直感 『平和に成る』道求め行動」徳島新聞，2015年10月１日．
鎌田東二「大学と学問の未来　創造性の発現 喫緊の課題　論文以外の表現可能」徳島新聞，2015年11月２日．
鎌田東二「韓国儒学の道徳・生命・霊性・礼楽　連携に基づく『美学』 未来倫理となり得る思想」徳島新聞，2016年１月４日．
鎌田東二「翁童論と幼老包括ケア　老人と子ども対関係　生死のエッジ生きる存在」徳島新聞，2016年２月１日．
鎌田東二「二つの最終講義　詩歌は希望見いだす　悲しみや怒り浄化の力に」徳島新聞，2016年３月１日．

ラジオ出演

鎌田東二「アール・ブリュットをきっかけに人の営みを考える」『glow――生きることが光になる』KBS京都ラジオ，2015年10月16日・23日（21:30～21:55）．

映画製作

大重潤一郎（監督）鎌田東二（製作）（2015）『久高オデッセイ第三部　風章』．

内田由紀子

論文

内田由紀子（2015）「日本の若者の幸福感と文化的基盤――個人主義と関係志向の狭間で」『現代の社会病理』30，57-67．
笹川果央理，竹村幸祐，内田由紀子（2015）「自己価値の随伴性と従業員の心理的健康」『ストレス科学研究』30，131-137．
Park, J., Uchida, Y., & Kitayama, S. (2015) Cultural variation in implicit independence: An extension of Kitayama et al. 2009. *International Journal of Psychology*, 2015, Online Version DOI:10.1002/ijop.12157.
Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015) Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. *Journal of Happiness Studies*, 16, 211-239. DOI:10.1007/s10902-014-9505-8.
Uchida, Y., Kanagawa, C., Takenishi, A., Harada, A., Okawa, K., & Yabuno, H. (2015) How did the media report on the Great East Japan Earthquake? Objectivity and emotionality seeking in Japanese media coverage. *PLoS One*, 10(5):e0125966. DOI:10.1371/journal.pone.0125966.
京野千穂，内田由紀子，吉成祐子（2015）「援助行動に対する話者の認知が授受補助動詞テモラウ・テクレルの使用に与える影響――質問紙調査による分析」『社会言語科学』17（２），56-67．
長岡千賀，内田由紀子（2015）「原子力発電所の定期検査における労働職場環境のストレッサーと精神的健康の構造――放射線管理員と非破壊検査員を例とした予備的検討」『計画行政』38（２），33-44．
Morling, B., Uchida, Y. & Frentrup, S. (2015) Social support in two cultures: Everyday transactions in the U.S. and empathic assurance in Japan. *PLoS One*, 10(6):e0127737. DOI:10.1371/journal.pone.0127737.
Uchida, Y., & Norasakkunkit, V. (2015) The NEET and Hikikomori spectrum: Assessing the risks and consequences of becoming culturally marginalized. *Frontiers in Cultural Psychology*, 6, 1117. DOI:10.3389/fpsyg.2015.01117.
Savani, K., Wadhwa, M., Uchida, Y., Ding, Y., & Naidu, N. V. R. (2015) When norms loom larger than the self: Susceptibility of preference-choice consistency to normative influence across cultures. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 129, 70-79.
内田由紀子（2015）「未来への展望 問われる幸福の指標の活用――幸福を支える集合的要件」『CEL:Culture Enrgy and Life』110, 38-43.
Ford, B. Q., Dmitrieva, J. O., Heller, D., Chentsova-Dutton, Y., Grossmann, I., Tamir, M., Uchida, Y., Koopmann-Holm, B., Uhrig, M., Floerke, V., Bokhan, T., & Mauss, I. B. (2015) Culture shapes whether the pursuit of happiness predicts higher or lower well-being. *Journal of Experimental Psychology*: General, 144(6), 1053-1062. DOI:10.1037/xge0000108.
Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015) Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490. DOI:10.3389/fpsyg.2015.01490.
竹村幸祐，内田由紀子（2015）「漁業コミュニティの社会関係資本と水産業普及指導員の『つなぐ』役割」『水産振興』574, 1 -49.
Ishii, K., & Uchida, Y. (2016) Japanese youth marginalization decreases interdependent orientation. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 47(3), 376-384. DOI:10.1177/0022022115621969.
Boiger, M., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B. (2016) Protecting autonomy, protecting relatedness: Appraisal patterns of daily anger and shame in the United States and Japan. *Japanese Psychological Research*, 58(1), 28-41. DOI:10.1111/jpr.12096

Uchida, Y., & Oishi, S. (2016) The happiness of individuals and the collective. *Japanese Psychological Research*, 58(1), 125-141. DOI:10.1111/jpr.12103.
Tsai, J. L., et al(9 /14 authors). (2016) Leaders' smiles reflect cultural differences in ideal affect. *Emotion*, 16(2), 183-195. DOI:10.1037/emo0000133.
Choi, E., Kim, Y., & Uchida, Y. (2016) The folk psychology of happiness in Korea. *Korean Journal of Culture and Social Issues*, 22(2), 165-182. DOI:10.20406/kjcs.2016.05.22.2.165.

著書

Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (2015). Interdependently achieved happiness in East Asian cultural context: A Cultural Psychological point of view. In Trommsdorff, G & Assmann, W. R (Eds.), Engaging in interdisciplinary research. *Quality of life in cultural context*. (pp.217-229). Universitätsverlag Konstanz, UTB., Germany.
Uchida, Y., Ogihara, Y., & Fukushima, S. (2015). Cultural construal of wellbeing: Theories and empirical evidence. In Glatzer, W., Camfield, L., Moller, V., & Rojas, M. (Eds.), *Global Handbook of Quality of Life. :Exploration of Well-Being of Nations and Continents*. (pp. 823-837). Springer Netherlands. DOI: 10.1007/978-94-017-9178- 6 _38 [peer-reviewed book chapter].
内田 由紀子（2016）「文化とこころ――こころへの社会科学的アプローチ」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，193-219.

学会発表

Uchida, Y., Ogihara, Y. & Fukushima, S. What constitutes a good life? Cultural variation in the emotional patterns of happiness and well-being. Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (Genova, Italy) 2015.7.8.
Uchida, Y. The happiness of individuals and the collective（「発達・感情・幸福感――比較文化心理学の最前線」）日本心理学会第79回大会ワークショップ（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.22.
内田由紀子「こころに及ぼすマクロな影響を測る――心理・社会・文化への量的アプローチ」日本心理学会第79回大会シンポジウム（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.24.
竹村幸祐，内田由紀子，福島慎太郎「共有される文化と生業――マルチレベル分析による検討」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.24.
荻原祐二，内田由紀子，楠見孝「自信を失う日本人――日本における自尊感情の経時的変化」日本心理学会第79回大会発表論文集，54.（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.24.
Uchida, Y., Takemura, K., & Fukushima, S. "How do we construct happiness and social capital? Evidence from community research in Japan." 13th Meeting of German-Japanese Society for Social Sciences in Cooperation with the German Institute for Japanese Studies (DIJ) "Trust and Risks in Changing Societies" (Tokyo, Japan) 2015.10.9.
Fukushima, S., Uchida, Y., & Saizen, I. "Effects of trust on the risk reduction of common resource management: Multilevel analysis on rural communities in Japan." The 13th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences German Institute of Japanese Studies (Tokyo, Japan) 2015.10.9.
Ogihara, Y., Uchida, Y. & Kusumi, T. "Does individualization of culture bring risk of being isolated in Japan? A Cultural Psychological Perspective." The 13th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences, German Institute of Japanese Studies (Tokyo, Japan) 2015.10.9.
Ogihara, Y., Uchida, Y. & Kusumi, T. Are people giving more unique names to their dogs? Rising uniqueness and individualism in Japan. 日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会（奈良大学，奈良市）2015.10.11.
Uchida, Y. "Interdependent happiness and wellbeing." International Conference on Gross National Happiness (Paro, Bhutan) 2015.11.4.
Fukushima, S., Uchida, Y., & Takemura, K. "Collective Happiness in Japan." International Conference on GNH (Paro, Bhutan) 2015.11.5.
富永仁志，阿部修士，内田由紀子「私たちはどのようにして利己的な行動を抑制しているのか？ ―行動実験から考えられる経路とその神経基盤についての展望―」日本人間行動進化学会第 8 回大会（総合研究大学院大学，神奈川県葉山町）2015.12.5.
Tominaga, H., Abe, N., & Uchida, Y. How do we inhibit our self-interest? The effect of cultural values on the Behavioral Inhibition System (BIS)-. SPSP Preconference Advances in Cultural Psychology (at the 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology) (San Diego, CA, USA) 2016.1.28.
Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T. Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem in Japan. The 17th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (San Diego, CA, USA) 2016.1.29.

講演

内田由紀子「日本における幸福観の多層性：企業・組織風土との関わり」第47回京機サロン（大阪市）2015.4.27.
Uchida, Y. Culture, happiness, and social capital (Stanford University, Department of Psychology, Cultural psychology lab, USA) 2015年 5 月.
Uchida, Y. Agency matters: Agentic independence and non-agentic interdependence Culture and clinical psychology perspectives for the KOKORO well-being studies (Kyoto University, Kyoto) 2015年 6 月.
Uchida, Y. Culture, happiness, and social capital: Macro-micro function of cultural agency (K.U. Leuven cultural psychology lab, Kyoto) 2015年 7 月.
内田由紀子「企業経営と幸福度を考える」（鼎談）第24回四国地区経済同友会交流懇談会（高知市）2015.9.4.
内田由紀子，上野泰治，宮本百合 You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan　日本心理学会第79回大会優秀論文賞授賞式（名古屋市）2015.9.21.
内田由紀子「日本文化における社会関係――日本人の意識、感情、関係性からの考察」パナソニック株式会社先端研フロンティア講座（パナソニック大阪本社，門真市）2015年10月.
内田由紀子「日本における幸福感」パナソニック株式会社先端研フロンティア講座（パナソニック大阪本社，門真市）2015年10月.
内田由紀子「地域の幸福と健康を考える――社会心理学からのアプローチ」京都大学徳島講演会（徳島市）2015.12.19.
内田由紀子「こころのきずなのインターフェース ―集合的幸福へのアプローチ―」京都大学こころの未来研究センター研究報告会2015（京都大学，京都市）2015.12.20.
内田由紀子「地域の幸福・個人の幸福」ミラツクセミナー2015 セッション「幸せな地域のデザイン」（東京都）2015年12月
福島慎太郎，内田由紀子，竹村幸祐「漁村におけるつながりの醸成に資する水産業普及指導員の役割」平成27年度第 2 回水産業普及指導員研修会（水産庁，東京都）2016.2.4.
福島慎太郎，内田由紀子，竹村幸祐「農村におけるつながりの価値・機能について」農林水産政策研究所セミナー（農林水産政策研究所，東京都）2016.2.10.
内田由紀子「経営者と幸福感」第 7 回京機ビジネスクラブ（大阪市）2016.2.26.
内田由紀子「若者の心の『閉ざされ』と『開かれ』」Workshop with Krzysztof Wodiczko（横浜国立大学，横浜市）2016年 3 月

内田由紀子「社会心理学から見た若者を巡る課題について」（内閣府，東京都）2016年３月．

メディア報道

内田由紀子「幸福観」NHK総合（データなび）2015年６月27日放送．

Uchida, Y. Silent cafes attract solo Japanese in search of peach (The Telegraph) 2015.9.10.

荻原祐二・内田由紀子「名前　読み方で個性　人気の漢字で自由自在」毎日新聞，2015年10月24日．

荻原祐二・内田由紀子「赤ちゃんの名前　読み方で個性競う？　制限の少なさ背景に　京大調査」日本経済新聞（夕刊），2015年10月22日．

荻原祐二・内田由紀子「ひろと、やまと、つばさ…すべて大翔くん　京大調査　読み方で個性　増加」読売新聞（夕刊），2015年10月22日．

荻原祐二・内田由紀子「悠真くん、お名前どう読むの？　漢字は同じ　でも読み方で個性　京大が研究」朝日新聞，2015年10月22日．

荻原祐二・内田由紀子「04～13年の名づけ傾向、京大解析　漢字の読みで独自性　個人主義化を示唆」京都新聞，2015年10月22日．

荻原祐二・内田由紀子「名前に個性的読み増加、京大調査　個人主義化を示唆」共同通信，2015年10月22日．

荻原祐二・内田由紀子「子どもに個性的な名前つける傾向」KBS京都テレビ（newsフェイス），2015年10月28日放送．

荻原祐二・内田由紀子「子どもに個性的な名前つける傾向」KBS京都テレビ（京都新聞ニュース），2015年10月28日放送．

荻原祐二・内田由紀子「そうだったのか！日本人の名前～データで探る名前の未来」NHK総合（データなび，世界の明日を読む），2015年11月28日放送．

受賞

内田由紀子　日本心理学会優秀論文賞（論文：Uchida, Y., Ueno, T., & Miyamoto, Y. You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan. Japanese Psychological Research, 2014,56,263-274.）2015年９月．

内田由紀子　Frontiers in Psychology, Most viewed Psychology articles in October 2015（3 rd place among 228 articles; Ogihara et al. (2015) に対して）2015年11月．

社会活動

文部科学省安全・安心科学技術及び社会連携委員会委員．

農林水産政策研究所客員研究員．

ドイツ日本研究所顧問．

土佐経済同友会GKH委員会．

Psychologia, Special issue Guest editor (with Kosuke Takemura) "Regional studies".

阿部修士

論文

阿部修士（2015）「不正直さの個人差を生み出す脳のメカニズム」『Clinical Neuroscience』33（２），159-161.

Ito, A., Abe, N., Kawachi, Y., Kawasaki, I., Ueno, A., Yoshida, K., Sakai, S., Matsue, Y. & Fujii, T. (2015) "Distinct neural correlates of the preference-related valuation of supraliminally and subliminally presented faces." *Human Brain Mapping*, 36(８), 2865-2877.

Nishiguchi, S., Yamada, M., Tanigawa, T., Sekiyama, K., Kawagoe, T., Suzuki, M., Yoshikawa, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. (2015) "A 12-week physical and cognitive exercise program can improve cognitive function and neural efficiency in community-dwelling older adults: a randomized controlled trial." *Journal of the American Geriatrics Society*, 63(７), 1355-1363.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, K. (2015) "Brain activation during visual working memory correlates with behavioral mobility performance in older adults." *Frontiers in Aging Neuroscience*, 7, 186.

阿部修士（2015）「嘘つきと正直者の脳のメカニズム」『心理学ワールド』71，13-16.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N. & Nomura, M. (2015) "Fear of negative evaluation is associated with altered brain function in nonclinical subjects." *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 234(３), 362-368.

著書

阿部修士（2016）「こころ学の実現に向けて――脳研究の視点から」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，47-71.

解説

阿部修士（2015）『モラル・トライブズ　共存の道徳哲学へ（ジョシュア・グリーン著）』の解説，岩波書店，485-490.

講演・学会発表・ワークショップ等

西口周，山田実，谷川貴則，積山薫，川越敏和，鈴木麻希，吉川左紀子，阿部修士，大塚結喜，中井隆介，青山朋樹，坪山直生「教室型運動介入と日々の身体活動量介入の複合型運動プログラムによる認知機能，脳活動改善効果――無作為化比較対照試験」第50回日本理学療法学術大会（東京国際フォーラム，東京都）2015.6.5.

Kajimura, S., Kochiyama, T., Nakai, R., Abe, N. & Nomura, M. "Transcranial direct current stimulation modulates effective connectivity within default mode network." 21st Annual meeting of the Organization for Human Brain Mapping 2015, (Honolulu, USA) 2015.6.14-18.

Ito, A., Abe, N., Kawachi, Y., Kawasaki, I., Ueno, A., Yoshida, K., Sakai, S., Matsue, Y. & Fujii, T. "Distinct neural correlates of preference of supraliminally and subliminally presented faces." 21st Annual meeting of the Organization for Human Brain Mapping 2015, (Honolulu, USA) 2015.6.14-18.

阿部修士「MRI画像研究と神経心理学によるヒト脳機能の研究」日本認知心理学会ベーシックセミナー（東京大学本郷キャンパス，東京都）2015.7.3.

上田竜平，蘆田宏，阿部修士「前頭前野・報酬系の活動が「無分別な恋愛行動」の個人差を説明する」第17回日本ヒト脳機能マッピング学会（毎日新聞オーバルール，大阪市）2015.7.2.

伊藤文人，阿部修士，河地庸介，川崎伊織，上野彩，吉田一生，境信哉，松江克彦，藤井俊勝「閾上・閾下呈示された顔に対する選好の神経基盤」第38回日本神経科学大会（神戸コンベンションセンター，神戸市）2015.7.28.

Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, Y. "Working memory and functional mobility association was mediated by a deficit-compensation neural activation pattern." 第38回日本神経科学大会（神戸コンベンションセンター，神戸市）2015.7.30.

阿部修士「正直さと不正直さを支える脳のメカニズム」日本心理学会第79回大会（国際賞講演）（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.23.

上田竜平，蘆田宏，阿部修士「眼窩前頭皮質の活動は『無分別な恋愛行動』の個人差と関わるか？――リスク行動傾向による説明」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.22.

柳澤邦昭，重宗弥生，中井隆介，阿部修士「将来の死の想起がもたらす時間優先の報酬選好」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.23.
柳澤邦昭，阿部修士，嘉志摩江身子，野村理朗「自尊感情がもたらす死の不安緩衝効果の神経機構」日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会（奈良大学，奈良市）2015.10.11.
Kawagoe, T., Suzuki, M., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama, Y. "A deficit-compensation brain activation pattern common to working memory and functional mobility in older adults." Society for Neuroscience's 45th Annual Meeting, (Chicago, USA) 2015.10.17-21.
Suzuki, M., Kawagoe, T., Nishiguchi, S., Abe, N., Otsuka, Y., Nakai, R., Yamada, M., Yoshikawa, S. & Sekiyama Y. "Neural correlates of working memory for face and location in advanced aging." Society for Neuroscience's 45th Annual Meeting, (Chicago, USA) 2015.10.17-21.
柳澤邦昭，嘉志摩江身子，重宗弥生，中井隆介，阿部修士「メメント・モリと時間選好の関係――fMRIによる検討」日本社会心理学会第56回大会（東京女子大学，東京都）2015.10.31.
Nishiguchi, S., Yamada, M., Sekiyama, K., Kawagoe, T., Abe, N., Otsuka, Y., Aoyama, T. & Tsuboyama, T. "Multimodal exercise improves cognitive function and brain activation efficiency in older adults." 68th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of America, (Orlando, USA) 2015.11.18-22.
富永仁志，阿部修士，内田由紀子「私たちはどのようにして利己的行動を抑制しているのか？――行動実験から考えられる２つの経路とその神経基盤についての展望」日本人間行動進化学会第８回大会（総合研究大学院大学，神奈川県葉山町）2015.12.5-6.
梶村昇吾，河内山隆紀，中井隆介，阿部修士，野村理朗「経頭蓋直流刺激によるマインドワンダリング抑制メカニズムの解明」平成27年度包括脳ネットワーク冬のシンポジウム（一橋大学，東京都）2015.12.17-19.
Tominaga, H., Abe, N. & Uchida Y. "How do we inhibit our self-interest? –The effect of cultural values on the Behavioral Inhibition System (BIS)-" 2016 SPSP preconference, Advances in Cultural Psychology, (San Diego, USA) 2016.1.28.
Ueda, R., Yanagisawa, K. & Abe, N. "Why do some people engage in immoral love? : A neural predictor of individual differences in immoral love." The Third CiNet Conference; Neural mechanisms of decision making: Achievements and new directions,（脳情報通信融合研究センター，吹田市）2016.2.3-5.
阿部修士，柳澤邦昭，伊藤文人「消極的な嘘の神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会（京都市）2016.3.7-8.
米田明，上田竜平，廬田宏，阿部修士「報酬獲得場面と損失回避場面における正直さの神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会（京都大学桂キャンパス，京都市）2016.3.7-8.
梶村昇吾，河内山隆紀，中井隆介，阿部修士，野村理朗「マインドワンダリングの制御におけるデフォルトモードネットワーク内有向結合機能の非対称性」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会（京都大学桂キャンパス，京都市）2016.3.7-8.
阿部修士「正直さと不正直さの神経基盤」第131回大阪大学大学院生命機能研究科交流会（FBSコロキウム）（大阪大学，吹田市）2016.3.16.
上田竜平，柳澤邦昭，阿部修士「浮気行動傾向を脳と潜在的姿勢から予測する――社会神経科学による検討」第５回超異分野学会関西大会（オムロン京都センタービル啓真館，京都市）2016.3.19.

メディア報道

阿部修士「もう一人のあなた　嘘の構図（４）」産経新聞，2015年４月５日.
阿部修士「文系、理系って何？」読売中高生新聞，2015年５月29日.
阿部修士「京人　嘘の研究　脳科学で挑む」産経新聞，2015年７月６日.

熊谷誠慈

論文

Kumagai, S. (2016) Bonpo Abhidharma Theory of Five Aggregates, Journal of Indian and Buddhist Studies, 64(3), 150-157.
熊谷誠慈（2016）「『こころ』の文献学的研究の総括および展望」『こころの未来』15，44-47.
熊谷誠慈（2016）「『心』と『こころ』――文献学的手法に基づくこころ学の構築」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』101-128.

著書

熊谷誠慈（2016）「『心』と『こころ』――文献学的手法に基づく『こころ学』の構築」吉川左紀子，河合俊雄（編著）『こころ学への挑戦』創元社，101-128.
熊谷誠慈（印刷中）.「ボン教の歴史的概要」『仏教史研究ハンドブック』法藏館.

研究発表・講演等

熊谷誠慈「政治と宗教は共存可能か？（ブータン社会における仏教思想の応用例を中心に）」連続ミニ・シンポジウム「八思」を学ぶ第１回「科学と宗教の対話」京都大学大学院総合学生存学館（思修館）（京都大学，京都市）2015.5.29.
Kumagai, S. Achieving Happiness through Wisdom, TED x Kyoto University (Kyoto University, Kyoto) 2015.6.7.
Kumagai, S. History and Current State of Sakya School in Northern Bhutan, 4 th International Seminar for Young Tibetologists (University of Leipzig, Leipzig) 2015.9.8.
熊谷誠慈「ボン教アビダルマに影響を与える仏教思想――五蘊説を中心に」日本印度学仏教学会第66回学術大会（高野山大学，和歌山県高野町）2015.9.19.
Kumagai, S. Buddhist Psychology for Happiness and Wellbeing, 6 th International Conference on Gross National Happiness (Ugyen Pelri Palace, Paro) 2015.11.6.
熊谷誠慈「チベット・ブータンにおける精神性と公共性」霊性研究フォーラム―スピリチュアリティと公共性―第６回研究大会（山荘京ヶ岳，上越市）2015.10.4.

畑中千紘

論文

畑中千紘（2015）「象徴性の弱い夢をみる中学生との面接――深みから出ることについての考察」『臨床ユング心理学研究』１(１)，49-60.

学会発表

畑中千紘「大学生の室内画にみる現代の意識」日本ユング心理学会第４回大会（京都文教大学，宇治市）2015.6.7.
Hatanaka, C. "Consciousness of Japanese youths today: Analysis of Rorschach test and Room-Drawing-Test" International symposium: Culture and Clinical Psychology Perspectives for the KOKORO Well-being Studies, (Kyoto) 2015.6.14.
Hatanaka, C. "Transformation of Jungian psychotherapy in the age of the loss of individual boundary and self-reproduction" Fourth Joint Conference of the

IAAP and th IAJS (Yale University, USA) 2015.7.9-12.
Hatanaka, C. "The dreams of a woman who lacks her self-centered mind" Dr. Giegerich Dream Seminar (Berlin, Germany) 2015.8.15-16.
皆本麻実，畑中千紘，梅村高太郎，井芹聖文，土井奈緒美，長谷川藍，田附紘平，松波美里，岡部由茉，粉川尚枝，鈴木優佳，河合俊雄，田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー（1）――発達障害と診断される要因とプレイセラピーの特徴」日本箱庭療法学会第29回大会（東北福祉大学，仙台市）2015.10.10-11.
田附紘平，松波美里，鈴木優佳，皆本麻実，畑中千紘，梅村高太郎，井芹聖文，土井奈緒美，長谷川藍，岡部由茉，粉川尚枝，河合俊雄，田中康裕「『発達障害』とは見立てられない子どものプレイセラピー（2）――三事例のプロセスの検討から」日本箱庭療法学会第29回大会（東北福祉大学，仙台市）2015.10.10-11.
畑中千紘「身体的違和感を訴える女性の夢の展開――外的な語りとイメージの関連に着目して」日本箱庭療法学会第29回大会（東北福祉大学，仙台市）2015.10.10-11.
Hatanaka, C. "The dreams of a woman in her 30's who diagnosed as autism spectrum disorder" (Dr. Giegerich Dream Seminar, Berlin Germany) 2016.2.10-11.

その他

ゲリー・L・ランドレス，スー・C・ブラットン（著）小川裕美子，湯野貴子（監訳）（2015）『子どもと親の子どもと親の関係性セラピー(CPRT)』日本評論社，9章・19章の翻訳.
Hatanaka, C. (2015) "Are Today's Students Indecisive? :A comparative study of psychological tests spanning ten years" Research Activities, 50(3), 30.
畑中千紘（2016）「こころを知り、こころとつきあう仕事とは」『金沢大学附属高等学校《同窓生による特別授業》の記録』39，43-64.
講演日 :2015.3.14.

清家理

論文

清家理，櫻井孝，住垣千恵子，武田章敬，遠藤英俊，鳥羽研二（2015）「認知症介護におけるセルフヘルプ人材育成プログラム開発研究――多職種協働一座によるアクションリサーチ」*Journal of the Sugiura Memorial Foundation*, 4, 60-61.
Seike, A., & Yoshikawa, S. (2015) Learn, no matter how old you get and be active throughout your entire life! From Kyo-machiya. Why Research Kokoro Now? *Kyoto University Research Activities*, 5 (3), 14-15.
Seike, A. (2015) Addressing the Challenge of a Super-Aged Society, Why Research Kokoro Now? *Kyoto University Research Activities*. 5 (3), 32.
清家理（2016）「特集：患者さんの疑問から最新研究まで徹底解説！糖尿病と認知症のふか〜い関係 （3）不安を解決！ 認知症なんでもQ&A 医療スタッフの疑問編」『糖尿病ケア』13（1），56-61.
Seike, A., Sakurai, T., Sumigaki, C., Takeda, A., Endo, H. & Toba, K. (2016) Verification of Educational Support Intervention for Family Caregivers of Persons with Dementia. *Journal of the American Geriatrics Society* 64(3), 661-663.

学会発表・講演

清家理「認知症介護におけるセルフヘルプ人材育成プログラムの開発研究――多職種協働一座によるアクションリサーチ」第3回杉浦地域医療助成報告（東京都）2015.7.9.
清家理「介護って何？」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト『くらしの学び庵』初級第3期第6回（京町家・風伝館，京都市）2015.7.22.
清家理「認知症における医療保健福祉政策――政策の学びが腑に落ちるために必要なLesson」（信州大学）2015.7.23.
清家理「家族・介護者のケア――ケアに励む人のココロが枯れたり、根腐れしたりしないために」第2回老人保健施設管理医師研修会（第Ⅱ期）（AP東京八重洲通り，東京都）2015.9.12.
清家理「介護者の介護負担軽減へのアプローチ――段階的教育支援プログラム開発研究（国立長寿医療研究センター版）より」「認知症診療ホットトピック 認知症医療・介護の現在と未来」第34回日本認知症学会学術集会（リンクステーションホテル青森，青森市）2015.10.4.
清家理「ココロの学問で"ココロの象使い"になれる？――心理学・社会福祉学・医学からアプローチしてみる」総合学科科目「産業社会と人間」学問研究講演会（兵庫県立須磨友が丘高校，神戸市）2015.10.23.
清家理「認知症における意思決定支援の課題」京都府医師会（京都）2016.1.19.
清家理，大久保直樹，藤崎あかり，武田章敬，遠藤英俊，鳥羽研二，櫻井孝「国立長寿医療研究センターもの忘れセンターにおける『認知症をもつ人、家族のための学びの場づくりの歩み』」日本医療研究開発機構 脳とこころの研究第1回公開シンポジウム「脳と心の時代 認知症等の克服に向けて」第一部ポスターセッション（よみうり大手町ホール，東京）2016.2.27.
清家理「臨床知を政策に還元するために――認知症のアクションリサーチからの提言」京都市役所（京都）2016.3.10.
清家理「認知症ケアは九転十起――認知症の方および家族介護者と共に学んだ日々より」第11回認知症フォーラム（ウインクあいち，名古屋市）2016.3.16.
清家理「くらしの中からできること――京町家プロジェクト『くらしの学び庵』より」国立長寿医療研究センター公開講座「最期までよりよく生きるために必要なこと――今日から私ができること」（大府市役所，愛知県）2016.3.24.
清家理「介護って何？」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト『くらしの学び庵』初級第4期第6回（京町家・風伝館，京都市）2016.3.26.
清家理「くらしの学び庵総括――こころ・からだ・くらしの学びの足跡」「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト2015年度シンポジウム（稲盛財団記念館，京都市）2016.3.27.

社会活動

平成27年度老人保健健康増進等事業「認知症の早期診断，早期対応につながる初期集中支援チーム設置・運営に関する調査研究事業」外部委員.
社会貢献人材育成事業プロジェクト企画・運営（吉川左紀子と協働）「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発」プロジェクト，くらしの学び庵.
平成27年度京都府看取り対策プロジェクトACP推進ワーキング委員.

上田祥行

論文

市村賢士郎，上田祥行，楠見孝（2016）「課題動機づけにおける困難度情報が課題努力に及ぼす影響」『心理学研究』262-272.
上田祥行，野村理郎（2016）「顔の認識――個別から関係性の中へ」『児童心理学の進歩 2016年版』2-26.
Ueda, Y., Tominaga, A., Kajimura, S. & Nomura, M. (2016). Spontaneous eye

blinks during creative task correlate with divergent processing. *Psychological Research*, 80(4), 652-659. DOI: 10.1007/s00426-015-0665-x

著書

Nakayama, M., Ueda, Y., Taylor, P. M., Tominaga, H. & Uchida, Y. (2016) (in press). Cultural psychology as a form of memory research. In T. Tsukiura & S. Umeda (Ed.), *Memory in Social Context: Brain, Mind, and Society*.

学会発表，ワークショップなど

Kanaya, K., Ueda, Y., Tochiya, H. & Yokosawa, K. "The correspondence between neutral voice and face is mediated by common perceptual properties." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.18.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Variability during learning facilitates generalization in contextual cueing." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.19.

Ueda, Y., Kurosu, S. & Saiki, J. "Intensity of visual search asymmetry depends on physical property in target-present trials and search type in target-absent trials." Vision Sciences Society 15th Annual Meeting (St. Pete Beach, USA) 2015.5.20.

Fujino, M., Ueda, Y., Mizuhara, H., Saiki, J. & Nomura, M. "Effects of two types of Mindfulness Meditation on brain functional connectivity." Mind and Life Summer Research Institute 2015 (New York, USA) 2015.6.14.

上田祥行「アンサンブル処理によって生じる単純接触効果」日本認知心理学会第13回大会（東京大学，東京都）2015.7.4.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Variability induces generalization in implicit learning of spatial configuration." Satellite symposium of the 38th annual meeting of the Japan Neuroscience Society (Kyoto, Japan) 2015.8.1.

樋口洋子，上田祥行，齋木潤「学習時の変動が潜在学習の般化に及ぼす影響」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.22.

上田祥行「脳機能イメージングと遺伝子多型からみた認知制御メカニズムの個人間変異」日本心理学会第79回大会シンポジウム「制御機構の認知神経科学――平均特性と個人間変異の統合に向けて」（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.23.

市村賢士郎，上田祥行，楠見孝「課題動機づけと努力に及ぼす遂行結果の影響」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，愛知県）2015.9.24.

Ueda, Y., Kikuno, Y., Yamamoto, H. & Saiki, J. "Inferior parietal lobules plays an important role in individual differences in executive function: a study with fMRI and SNP." Society for Neuroscience 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.10.17.

Watabe, M., Ueda, Y., Kato, T. A., Shinada, M. & Yamagishi, T. "Gender difference in the performance of cheater-detection in social exchange: An eye-tracker study." Society for Neuroscience 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.10.17.

Kanaya, K., Ueda, Y., Tochiya, H. & Yokosawa, K. "Factors mediating the correspondence between unfamiliar faces and voices." Psychonomic Society 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.11.21.

Ueda, Y. "Visual summary and the mere exposure effect." Psychonomic Society 2015 Annual Meeting (Chicago, USA) 2015.11.21.

上田祥行「注意を向けなくても要約された視覚情報が記憶される」日本基礎心理学会第34回大会（大阪樟蔭大学，東大阪市）2015.11.29.

Higuchi, Y., Ueda, Y. & Saiki, J. "Flexible implicit learning of variable spatial configurations" 2016 annual meeting of Korean Society for Cognitive and Biological Psychology (Jeju-do, Korea) 2016.1.21.

上田祥行「グループの平均表情知覚の正確性」日本心理学会「注意と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

熊切俊祐，上田祥行，齋木潤「顕著性とアンサンブル情報の眼球運動への影響」日本心理学会「注意と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

鎌倉裕介，上田祥行，齋木潤「シーンの意味と構造が眼球運動に与える効果――写真画像とノイズ画像の比較研究」日本心理学会「注意と認知」研究会第14回合宿研究会（名古屋市）2016.3.13.

受賞

日本心理学会第79回大会優秀発表賞.

日本基礎心理学会第34回大会優秀発表賞.

日本認知心理学会第13回大会優秀発表賞「総合性評価部門」.

柳澤邦昭

論文

Yanagisawa, K., Abe, N., Kashima, E. S. & Nomura, M. (2016) Self-esteem modulates amygdala-ventrolateral prefrontal cortex connectivity in response to mortality threats. *Journal of Experimental Psychology: General*, 145(3), 273-283.

学会発表

柳澤邦昭，重宗弥生，中井隆介，阿部修士「将来の死の想起がもたらす時間優先の報酬選好」日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場，名古屋市）2015.9.23.

柳澤邦昭，阿部修士，嘉志摩江身子，野村理朗「自尊感情がもたらす死の不安緩衝効果の神経機構」日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会（奈良大学，奈良市）2015.10.11.

柳澤邦昭，嘉志摩江身子，重宗弥生，中井隆介，阿部修士「メメント・モリと時間選好の関係――fMRIによる検討」日本社会心理学会第56回大会（東京女子大学，東京都）2015.10.31.

阿部修士，柳澤邦昭，伊藤文人「消極的な嘘の神経基盤」第18回日本ヒト脳機能マッピング学会（京都大学，京都市）2016.3.7.

センターの主な動向（2015年10月～2016年3月＊敬称略。肩書きは当時のもの）

●2015年10月14日　こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第2回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師・オーガナイザー：佐伯啓思（センター特任教授／京都大学名誉教授）。1期受講者数22名。

●10月17日　「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第1回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎（追手門学院大学心理学部教授／京都大学名誉教授）「円滑なコミュニケーションを支える脳機構」、村井俊哉（京都大学大学院医学研究科教授）「『社会性』という観点から心の健康について考える」、実践報告：小川詩乃（京都大学人間・環境学研究科 日本学術振興会特別研究員PD）・田村綾菜（愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所リサーチレジデント）。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会：吉川左紀子。受講者数45名。

●10月20日　第6回ブータン文化講座「輪廻のコスモロジーとブータンの新しい世代」（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講演：西平直（京都大学大学院教育学研究科教授）。司会：熊谷誠慈。参加人数98名。

●10月22日　第40回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。発表1：大田俊寛（埼玉大学非常勤講師）「『人間を殺傷しうる人間』の問題～イニシエーションの本質と宗教的暴力」、発表2：田口ランディ（作家）「意識変容体験の負の側面」、〔全体討論〕コメンテーター：島薗進（上智大学グリーフケア研究所所長）。司会：鎌田東二。

●10月24日　「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第2回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎「認知機能の発達とその脳内機構」、岩宮恵子（島根大学教育学部教授・臨床心理士）「子どもたちの心を縛るもの：『イツメン（いつものメンバー）』と『ぼっち』から考える」、実践報告：加藤寿宏（京都大学大学院医学研究科准教授・作業療法士）。グループディスカッション、講師とのQ&A。　司会：吉川左紀子。

●10月28日　こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第3回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師・オーガナイザー：佐伯啓思、講師：内田由紀子。

●11月　上田祥行助教が日本基礎心理学会第34回大会で優秀発表賞を受賞。発表題目：「注意を向けなくても要約された視覚情報が記憶される」。

●11月7日　「支える人の学びの場 先生のためのこころ塾2015」第3回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎「体で学ぶ神経機構：潜在学習」、村上公也（キミヤーズ塾塾長）「笑顔・考える・つながる授業づくり――目からウロコの教材・教具」、実践報告：高畑脩平（奈良県総合リハビリテーションセンター作業療法士）。司会：吉川左紀子。

●11月8日　「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第1回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎（追手門学院大学心理学部教授・京都大学名誉教授）「認知、感情と身体性：感情の役割とその神経機構」、熊田孝恒（京都大学情報学研究科教授）「実行系注意と自己統制のメカニズムとその発達・障害」、事例報告：寺尾智樹（埼玉県立小児医療センター作業療法士）。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会：吉川左紀子。受講者数50人。

●11月11日　こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第4回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師・オーガナイザー：佐伯啓思、講師：金井一頼（大阪商業大学総合経営学部教授／大阪大学名誉教授）。

●11月21日　「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第2回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎「言語・非言語コミュニケーションの神経機構」、船曳康子（京都大学人間・環境学研究科准教授）「『治す・つきあう』のバランスとその支援」、事例報告：草野佑介（京都大学医学部附属病院作業療法士）。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会：吉川左紀子。

●11月25日　こころの思想塾「現代の経済・経営を考える」1期第5回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師・オーガナイザー：佐伯啓思。

●11月26日　第41回身心変容技法＆ワザ学研究会（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。発表1：野村理朗（京都大学教育学研究科准教授）「負の感情の浄化にかかわる考察――心理・神経・遺伝学の立場から」、発表2：魚川祐司（著述、翻訳家）。司会：鎌田東二。

●11月29日　「支える人の学びの場 医療専門職のためのこころ塾2015」第3回（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講義：乾敏郎「共感脳と発達障害」、松見淳子（関西学院大学文学部教授）「地域に根付く子どもの発達支援：実践と研究の一体化」、事例報告：小松則登（愛知県身心障害者コロニー中央病院作業療法士）。グループディスカッション、講師とのQ&A。司会：吉川左紀子。

●12月　センターの取り組み及び研究者の活動を特集した外国向け冊子『Kyoto University Research Activities』（Vol.5 No.3 Dec 2015／京都大学）発行。

●12月3日・4日　fMRI解析セミナー「脳領域間結合解析基礎編＋SPM豆知識」（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師：河内山隆紀先生（株式会社ATR-Promotions、脳活動イメージングセンタ）。司会：阿部修士。参加人数37名。

●12月10日　第42回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会「声と音の力と身心変容」（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。発表1：山崎広子（音・人・心研究所代表）「声の力と身心変容について」、発表2：小松正史（京都精華大学教授）「聴覚が司る無意識の身心変容――音育と音デザインの事例紹介。司会：鎌田東二。

●12月14日　群馬県立太田東高校1年生20名がセンターを訪問。鎌田東二教授、阿部修士准教授によるレクチャーを受講し、連携MRI研究施設を見学。

●12月20日　京都大学こころの未来研究センター 研究報告会2015「からだ・こころ・きずな」（於：稲盛財団記念館3階中会議室／ポスター会場：大会議室）。開会の挨拶：吉川左紀子、研究報告1：船橋新太郎「動物の脳からヒトのこころを探る」、研究報告2：鎌田東二「こころのワザ学――こころはどこにあり、どのように現れるのか？　日本研究の立場から」、研究報告3：内田由紀子「こころときずなのインターフェース：集合的幸福へのアプローチ」、〔ディスカッション〕ディスカッサント：広井良典（千葉大学法政経学部教授）、堀智孝（京都大学特任教授・白眉センタープログラムマネージャー）、閉会の挨拶。司会：内田由紀子。参加人数61名。

●12月20日　京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門2015年度研究報告会「身体からこころを問い直す」（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。センター長挨拶：吉川左紀子、来賓ご挨拶：丸山登（公益財団法人上廣倫理財団事務局長）、上廣こころ学研究部門の取り組み紹介：鎌田東二、研究報告1：門前斐紀「芸術からこころを問い直す」、研究報告2：梅村高太郎「心身症からこころを問い直す」、研究報告3：カール・ベッカー「介護からこころを問い直す」、〔部門研究者による全体討論〕モデレーター：熊谷誠慈、ディスカッサント：清家理、畑中千紘、福島慎太郎（青山学院大学総合文化政策学部助教）、閉会の挨拶：河合俊雄。司会：阿部修士。参加人数97名。

●12月24日・25日　こころの未来 脳科学集中レクチャー2015「こころを創発する脳と身体」（於：稲盛財団記念館3階大会議室）。講師：大平英樹（名古屋大学大学院環境学研究科教授）。司会：阿部修士。参加人数101名。

●2016年1月16日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発

研究プロジェクト」初級４期目第１回（於：風伝館／京都市上京区）。講義：青山朋樹（京都大学大学院医学研究科）「毎日できる運動で衰え知らず！」、意見交換会。司会：清家理。共催：公益財団法人信頼資本財団、後援：アミタグループ、京都市、京都市教育委員会、京都信用金庫、京都大学大学院医学研究科人間健康科学専攻、京都大学医学部附属病院、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、文部科学省 地（知）の拠点整備事業（50音順。以下、同タイトル初級４期の共催、後援はすべて同じであるため記載省略）。

●１月28日　第43回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会「身心変容技法としての短歌と俳句のワザ学」（於：稲盛財団記念館３階小会議室１）。発表１：堀本裕樹（俳人）「我が俳句における身心変容」、発表２：安藤礼二（多摩美術大学芸術人類学研究所准教授・評論家）「折口信夫における短歌と身心変容」。司会：鎌田東二。

●１月30日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級４期目第２回（於：風伝館）。講義：吉川左紀子「健やかなこころで暮らす知恵」、意見交換会、よろず相談会。司会：清家理。

●２月４日　こころの思想塾「民主主義と政治を考える」２期第１回（於：稲盛財団記念館３階小会議室１）。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー：佐伯啓思。２期受講者数29名。

●２月９日　第44回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会（於：稲盛財団記念館２階225号室）。発表１：忠岡経子（英国プリマス大学トランズ・テクノロジー研究所博士課程）「共鳴～隻手の声：認識における共鳴の役割、観想的経験からのアプローチ」、発表２：岩崎美香（明治大学大学院博士課程）「日本人の臨死体験と臨死体験後に辿る過程――20事例における質的研究の結果から」。司会：鎌田東二。

●２月13日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級４期目第３回（於：風伝館）。講義：荒井秀典（国立長寿医療研究センター）「老化と病気の予防で錆知らず！」、意見交換会。司会：清家理。

●２月15日　第45回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会（於：稲盛財団記念館２階225号室）。発表：奥井遼（日本学術振興会海外特別研究員・パリ第５大学）「遊びと学び――サーカス学校のアーティスト養成の冒険」。司会：鎌田東二。

●２月18日　こころの思想塾「民主主義と政治を考える」２期第２回（於：稲盛財団記念館３階小会議室２）。講演とディスカッション。講師：佐藤一進（京都精華大学芸術学部准教授）、講師・オーガナイザー：佐伯啓思。

●２月25日　こころの思想塾「民主主義と政治を考える」２期第３回（於：稲盛財団記念館３階小会議室２）。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー：佐伯啓思。

●２月21日　鎌田東二教授退職記念講演会・シンポジウム（於：京都大学芝蘭会館稲盛ホール）。〔第一部 鎌田東二教授退職記念講演〕センター長挨拶：吉川左紀子、講演者紹介、講演：鎌田東二「日本文化における身心変容のワザ」、パフォーマンス（石笛・横笛・法螺貝他）。〔第二部 シンポジウム〕「日本文化とこころのワザ学」イントロダクション、講演：島薗進（上智大学グリーフケア研究所所長）「道の思想と日本宗教史」、講演：河合俊雄「心理療法とこころのワザ学」、講演：奥井遼「身心変容とアート教育――フランス国立サーカス学校の現場から」、〔総合討論〕ディスカッサント：鎌田東二、島薗進、河合俊雄、奥井遼、コメンテーター：広井良典、司会：熊谷誠慈。参加人数200名。

●２月27日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級４期目第４回（於：風伝館）。講義：幣憲一郎（京都大学医学部附属病院）「毎日できる栄養管理で病気知らず！」、意見交換会、よろず相談会。司会：清家理。

●２月29日・３月１日・２日　2015年度こころの科学集中レクチャー「こころの謎――脳科学からの挑戦」（於：稲盛財団記念館３階大会議室）。講師：北山忍（センター特任教授・ミシガン大学心理学部教授文化・認識プログラム所長）、杉浦元亮（東北大学加齢医学研究所・災害科学国際研究所准教授）、渡邊克巳（早稲田大学理工学術院教授）。司会：内田由紀子。参加人数35名。

●３月　センターの教授、准教授らが執筆した共著『こころ学への挑戦』が創元社より刊行。

●３月　第１回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」（2015年９月13日開催）を書籍化した『〈こころ〉はどこから来て、どこへ行くのか』が岩波書店より刊行。

●３月　阿部修士准教授がNPO法人ニューロクリアティブ研究会・2015年度研究者支援「創造性研究奨励賞」２等を受賞。受賞研究テーマ：「道徳的意思決定に与える創造性の影響――認知神経科学的研究」。

●３月３日　こころの思想塾「民主主義と政治を考える」２期第４回（於：稲盛財団記念館３階小会議室２）。講演とディスカッション。講師・オーガナイザー：佐伯啓思。

●３月３日　第46回身心変容技法＆ワザ学・こころ観合同研究会（於：稲盛財団記念館３階大会議室）。発表１：阪上正巳（国立音楽大学教授・精神科医）「身心変容技法としての音楽療法」、発表２：中田英之（練馬総合病院漢方医学センター長・産科医）「東洋医学治療と音　気滞、瘀血を動かす音」、発表３：上馬塲和夫（帝京平成大学教授・インド医学研究・医師）「伝統医学の頭部へのアプローチにより惹起されるASC（変性意識状態）」、コメンテーター：稲葉俊郎（東京大学医学研究科助教・循環器内科医・未来医療研究）。司会：鎌田東二。

●３月５日　船橋新太郎教授退職記念講演会（於：稲盛財団記念館３階大会議室）、センター長挨拶：吉川左紀子、来賓挨拶：久保田競（京都大学名誉教授）、講演者紹介、講義：船橋新太郎「前頭連合野との35年」、花束・記念品贈呈：吉川左紀子、カール・ベッカー、畑中千紘。司会：阿部修士。参加人数83名。

●３月12日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級４期目第５回（於：風伝館）講義：高岸達哉（京都信用金庫業務部業務課）「老後の備えって？アリとキリギリス物語」、意見交換会。司会：清家理。

●３月26日　「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト」初級４期目第６回（於：風伝館）。講義：清家理「介護って何？」、意見交換会、よろず相談会、修了式。司会：清家理。

●３月27日　「孤立防止のための自助・互助強化プログラム開発プロジェクト2015年度シンポジウム：超高齢社会を心地よく生きるために必要なこと」（於：稲盛財団記念館３階大会議室）。開会挨拶：吉川左紀子、くらしの学び庵総括：清家理「こころ・からだ・くらしの学びの足跡」、くらしの学び庵特別講義１：荒井秀典（国立長寿医療研究センター副院長）「いきいき毎日を過ごすために必要な健康づくり」、くらしの学び庵特別講義２：櫻井孝（国立長寿医療研究センターもの忘れセンター長）「認知症と診断されたら――医療者と本人、家族が共に考えたいこと」、くらしの学び庵特別講義３：三宅聖子（東京都渋谷区障害者福祉センター施設長）「よりよく生きるための笑・唱・掌」、京都市よりみなさまへ：西川保子（京都市保健福祉局長寿社会部長寿福祉課担当課長）、京都府よりみなさまへ：山本勇人（京都府健康福祉部高齢者支援課担当課長）、くらしの学び庵Q&A編「心地よく生きるために今日からできること」。回答者：荒井秀典、櫻井孝、三宅聖子、西川保子、山本勇人、清家理、司会：吉川左紀子、閉会挨拶：松林公蔵（東南アジア研究所教授）。主催：京都大学こころの未来研究センター、後援：京都市、京都市教育委員会、京都地域包括ケア推進機構、京都府、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター、文部科学省 地（知）の拠点整備事業（50音順）。参加人数122名。

●３月28日　第７回ブータン文化講座「ブータンの仏教と祭り ニマルン寺（中央ブータン）のツェチュ祭」（於：稲盛財団記念館３階大会議室）。講演者：今枝由郎（前フランス国立科学研究センター・研究ディレクター）。司会進行：熊谷誠慈。参加人数約100名。

●３月31日　学術広報誌『こころの未来』第15号刊行。

編集後記

自分や自分の周囲のことにばかり関心が向かっていた学生時代。40年以上前になります。当時、公共政策という言葉はあまり聞かず、政治や経済にもほとんど興味がありませんでした（反省）。学生時代の私が本号を読んだとしたらどんな感想を言うのか聞いてみたい、と遠い目になっています。（吉川左紀子）

今回から編集担当に加わらせていただいたが、実質的に私がやったことは座談会への出席と拙い短文の執筆のみで、すべては前任の鎌田東二先生がアレンジされたものである。テーマ設定でのご配慮とともに、内容の充実ぶりにただ感服するばかりであり、この場を借りて感謝の意を表したい。（広井良典）

2016年４月に着任し新しく本誌編集委員になりました。次号は私の専門とする現代美術、アートをテーマとした特集を編集中です。美術の「いま」を見据えた論考に加え、多彩な活動を繰り広げるアーティストへのインタヴュー、初の海外取材などを行いましたので、ご期待ください。（吉岡　洋）

私が編集委員を拝命したのが2013年の11号からなので、丸３年以上が経過したことになる。月日が経つのは本当に早い。本号からは広井先生・吉岡先生ともご一緒させていただくことになった。新たなテイストの入った『こころの未来』、多くの方に手に取っていただければと思う。（阿部修士）

今年度より公共政策学がご専門の広井教授、芸術学がご専門の吉岡教授が編集委員に加わられた。本号には広井編集委員の専門である公共政策学の研究者から実務家まで、幅広い論考が載録されている。本号を通じて、公共政策の重要性と課題が広く再認識されることを切に祈念する。（熊谷誠慈）

本誌の編集体制が新しくなり、特集の幅もさらに広がり、深まることと思います。いつもながら、刊行が大幅に遅れ、執筆者の方々はじめ関係者のみなさまにご心配、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。（原　章）

こころの未来 KOKORO RESEARCH CENTER KYOTO UNIVERSITY　第16号

発行日……2017年1月31日

発行……京都大学こころの未来研究センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46 京都大学稲盛財団記念館内
電話 075-753-9670　FAX 075-753-9680
http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/

編集委員……吉川左紀子＋広井良典＋吉岡 洋＋阿部修士＋熊谷誠慈

表紙写真……北海道十勝　©Nishihama/Shutterstock.com

編集・制作……編集工房レイヴン　原　章

デザイン……鷺草デザイン事務所　尾崎閑也＋東 浩美

印刷……株式会社NPC コーポレーション

京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER・KYOTO UNIVERSITY

こころの未来研究センター